

やないんですからね、餘所へ往かうと思へば幾らでも往ける。女つてもものは夫次第なものなんだからね、夫さい良い人を持ちやアどんなことでも出来るんだ。こんな暮しをしてるんだつて、わたしが好んでしてるんぢやありませんか。わたしのお蔭ぢやありませんよ、こんな貧乏をしてるのは——悔しかつたら立派に役人にでもなつて、お金をたんと取つて来て御覽なさい、あなたなんか何時さうなれるか判るもんですか。あなたは學問をしてそれで暮すも結構でせう——けれども満足に暮せるのは一體何時のことなんです。あなたの考とわたしの考は到底一致しはしませんよ。誰れが一所に王章夫婦のやうに牛衣に包まるやうな苦勞が出来るものか。馬鹿々々しい。外に仕方はありませんよ、別れませう。別れる外ないぢやありませんか。』

生もつく／＼閉口した。家庭が此う荒んでは困つたものだ。何時までこんな恥晒しの生活が続くのか。此うしたふしだら者の爲めにあたら芳年を滅茶にされる。今は年が若いから好いやうなものゝ、このまゝ晩年にまで羞を遺さねばならぬであらうか。舅の家に居た時の妻の仕打ちから現在までのことを考へて見ると、如何にも鄙しき居られぬ。そして再びこの女と逢つたばかりに、此うした目にも遇はねばならぬのだつた。けれども夫婦なれば已むを得ない。

『此うして一家に住んで來たのだから、お前だつて家はどんな事情でどうなつたといふことは、一から十まで判り切つてるぢやないか。二人一所になつてからもう二年になつたのだぞ。随分お前に難儀をさせたこともよく考へてゐる。俺はこれで辛抱して行かうと思ふが、それにしてもお前には誠に氣の毒だと、何時も思つて居るんだ。やがて富貴も近づいて來ると思ふからどうだも少しそれを待つて見る氣にはなれないか。これまでのことを考へて見るが、やはり二人の縁があればこそぢやないか。お前の家から俺のこの家へ來たまでのことを考へたら、さう無暗なことばかり言はんでもいゝぢやないか』

生はしんみりと説得して、女の不量見を改めさせようと、不貞腐つて出て行かうといふのを涙ながらに引き留めた。

『何ですつて、これまでのことを考へろだつて——』

女は生の言葉が酷く癢に觸つた。忽ちふん反り返り、あり合ふ物を取つては投げ打ち毀し、衣類などを引き出して、襖はうじ似が宮中で帛を裂いたやうにびり／＼と引き裂き、机の上の書籍は叩き付ける引き撈かきる、秦の始皇が書を焚いた暴威よりも怖ろしい。夫婦喧嘩は犬も食はぬ、閨房

中の騒ぎは他人に話しもならない。生はじつと辛抱して居る外はない。生れ付き良くない女のことだから、世帯の荒れる頃になつてはます／＼始末が付かぬ。梅子は未だ黄ならずして味先づ酸く、楊花乍ち白ふして態更に顛狂。生は獨り心を苦めるのであつた。

爾來女は朝は鏡の前へ坐り込んで顔の粧りに俄かに念を入れ、暮には門へ出て行き來の人に秋波を送るやうになつた。無論身に着けた物も祿な着物はないが、猶ほ麝香の臍を持つて居るのが唯一の強味だ。口には食ふ米もないが、雞古の香は持つて居る。苦々しいことだ。誰れ彼れとなく出任せの愛嬌を垢撒いて輕薄兒共を近づける、その蓮葉なのが彼女本來の性質だつたのだ。掠鬢蕩裙、さうした態度の豔妖さは、戰亂以來身に浸んだ習慣だつたのだ。寶家の若い妻君が頗る怪し氣なことをするといふことが評判になると、羶物に蛾の聚り腐つた肉に蟲がわくやうに、不良兒共は争つて集まつて來る。生はいよ／＼手古摺つた。さうしたことを斷然禁じやうとすれば、家を覆すやうな狂亂を何處までも繰り返さねばならぬのだ。妻の爲すがまゝに放つて置いては、如何なる悲惨の極まで引き摺られて往くことやら判らない。已むを得ない。女は女の欲するまゝに破廉恥をやらせるがよい。寶家の家庭は寶家の家庭で肅整を行ふ外はな

い。身寄もなくて狂態に陥るものを振り離すのは、その行末が如何にも思ひやられて可哀さうで堪らないが、やはり離縁して家の名譽を保持する外はないとやうやく決心した。

離 縁

いよ／＼生は離縁狀を書いて渡すことになつた。三行半の筆の先にも血がにじむやうな心がある。ほろ／＼と涙が落ちた。昔夫婦になるまでには容易な手數ではなかつたが、今このまゝ別れるとなれば何たる飽氣ないことだ。書き終つて女にも署名をさせ拇印を捺させた。あゝ何たる情けないことだ、前後を合せれば五年の間、夫婦となれば恩愛は格別だ。これでいよ／＼他愛もなく夫婦の縁は切れたのか。誰れか妻子なからん、誰れか室家なからん。縁有つて連れ添ふたからは、百年の後は同じ穴へとまで願ふのだ。圓滿に平和に陸しくと笑顔の眉を畫くその筆で、今離縁狀を書かうとは、感慨に胸が塞がる。

その頃山東の落武者で、この土地へ來て村の小使のやうなことをして居る男があつた。これがなか／＼の放蕩兒で、屢々この女に接近して言ひ寄つた。男の方はまだ獨身の雄狐のやうなも

の、女の方は男でさへあれば誰でも好いといふ雉子の牝のやうなもの。一は花を尋ね柳を問ふが目的で、柳が汚からうが花が穢れて居やうが問題でない。一は雨を潑ひ雲を撩くに饑へて居る。それが粗雲で暴雨であらうとお構ひない。女は磁石に針の引き付けられるやう、水に乳を融かすやう、何のことはなく成立して了つて居て、實は早く寶生と縁の切れるのを待ち設けて居たのであつた。しかも二人は荒れ果てた生の財産にまで目を付けて、それを持ち出し二世帯を持たうと牒し合はせて居つたので、生から離縁状を受け取ると、早速葛籠長持を悉く搔つ浚つて、甕の中盆の中までも、殆んど塵一筋残らぬやうに持ち出して往くのであつた。生の家は全く女の爲めに席捲されて了つた。何たる憎むべき狼貪であらう。しかもその直く隣へ世帯を作ることにして居たのだつた。

『永々お世話様、わたしはこれから隣の女房になるんですからね、あなたとは赤の他人ですよ。きれいさつぱり、途中であつたつて先の妻だなど思はないで下さい。わたしはわたしでもう立派に連れ添つてくれる人があるんですから——今日こんなあばら家を出て了つたら、決して再び此家の敷居は跨ぎません。死んで冥途へ行つたつてあなたなどのお目に掛かるもんですか』

飽くまでも愛想盡かしをほざいて出て往つた。世間にはべら／＼する者も多いが、こんな悪口を吐いて行く奴もあるまい。世の中に癩に觸るといつてこれ程癩に觸ることがあらうか。

一體世間の不貞腐れ女は名門の娘に多いやうだ。極端に墮落する女の大半は豪家のものといつてよい。それといふのは、幼少の時には我まゝ一ぱいに育て、美しく仕立てることばかり考へて、懶け放題懶けさせて置き、年頃になれば顔の美しいことや読み書きの出来ることを、本人も親も鼻に掛ける。戀愛や情慾に關する詩歌などを無批判に歌はせ詠ませるところから、貞淑な行などは少しも習はない。たゞ夢のやうに、無自覺に男女の關係を見せて置くから、家庭の嚴肅な和樂に對する觀念が缺けて居る。徒に自家の門戸の大に自惚れるから、外に對する警戒も自然と放漫になり、交際や儀式に八釜ましい代り、娘の室内に於ける状態に正確な注意を加へる暇がない。爲めに孟姜を淇上に美で、世間體をも畏れず、子國を邱中に留めて耻づべき行ひとしないやうになつて了ふのだ。甚だしきは新台臭を遣し、敵笏羞を蒙り、妻妾も姉妹も母子も見塚のない混沌たる醜態を演じ、遂に汚名を千載の後に謠はれねばならぬことになる。國家の經綸に當る者も、一家の處理に任する人も、この問題に就いては大いに意を用ゐね

ばならぬところである。一朝一夕に軽々しく取扱ふべき問題ではない。一寸の油断もなく警戒すべきことであると思ふ。

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

第六卷

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

秋士の悲み

一八〇

今の寶生の妻の如きも、立派な貴顯の家に生れて名流の子と結婚したのだから、もし女としての修養が一通りありさへすれば、此うまで酷い墮落はしなかつたであらう。たゞ溺愛で無干渉で、一般の教育を度外した結果は、全然無知な人間を造り上げ、散々な汚れと恥を受け、世間の物笑ひとなり、平氣で婦徳の根本なる三従の大義を破り、七去の最大不名譽を負ふやうになつたのだ。由來富貴の家には多淫の女が多い、家柄の家庭は存外禮節がないといふがやはりその通りだ。

それにしても寶生は實に氣の毒だ、蘇武ソフが生きて居るのに妻が勝手に去つたやう、安石あんせきの次男王秀わうしゅうが死なぬ前から妻に逃げられたやう、不貞の妻とはいひながら、置去りをされた後は甚だ氣持の好いものではなかつた。けれども出て往つたものは如何とも仕方がない。今は自分の身を何とかせねばならぬ。ところが、從弟に荒された上、妻に奪はれたので、屋敷は全く空家同様食ふ米もないといふ始末。韓愈かんいは窮鬼を送る文を作つたがなか／＼鬼は去らなかつた。陶淵明たうえんめいは

乞食の詩を作つたが饑うらしさには悩まされる。北斗の漿を挹くめは餅還つて屢罄りんけいき、東門の米を索むれば帖てい乃ち空書なり。食客をすることも六ヶ敷い、何處へ往つても大抵斷はられて了ふ。友人の交などいふものも、斯かる場合には存外頼もしくないもので、頼みに行けばもう絶交したやうな顔をして居る。

しかも時は歳晩に近く、残る年は幾日もない。破紙の窻へ吹き入む北風は弩のやうに鋭く、破れ簾の外に降る雪は鵝の羽よりも大きいのが飛んで居る。氷は三尺も厚くはりつめて、屋根に饑ゑた鳥は行き處もなく、山も林も雪に埋もれて、枝上に凍える雀は飛ぶことさへも出来ないで居る。友人も無いではなかつたが、窮迫した此の場合、范叔はんしゆくにどてらを着せてやつた親切の者は一人もない。矢張り何といつても血を分けた親戚には、姜肱やうかうが大蒲團に一所に寝ただけの頼もしさはあるだらうと思はれた。

生には曩の惡黨の外にまた某といふ從兄がある。阮姓げんせいが南北に家を分ち、施家しかが東西に村を構へたやうに極めて近い血筋の家で、五代前までは祖先が一つだつたのだ。先づ差し當りそれを頼つて往つた。

「家が破産になつて了ひ、妻は残りの家財を全部浚つて出て了つたので、何とも閉口しました。何處の隅でもいゝが暫く置いちゃくれませんか」

『ホー氣の毒だつたね——』

従兄は眞面目な精神の男だつた。少しも堪に鬨ぐやうなさもしい態度は見えなかつた。けれども嫂といふのが頗るやかまし屋で、甚だ耳の痛いことをいふ。日敷經つうちには怖ろしく當り散し、悪いことは何でも生がしたやうに告げ口をし、生への面當てに叱らすも好いものをもがみく／＼叱る。生は居堪らなくなつた。茲に箸を投じ、旋て衣を拂はざるを得ない。苟も従兄弟の情誼を思へば、氣拙くして遁げて了ふといふことも忍びない事態だが、奈何せん此う嫂に辛く當たられば、平氣で飯を食つては居られなかつた。氣の毒にも生は肌寒に責められて意氣も銷沈し、不幸續きの爲めに有爲の年月を空しく磨盡して了つたのであつた。

獨り寝の夜深かく、情けない今の身の上を思ひ廻らせば、曾て此うした寂しい生活をしたことがない。雁來り木落ち、何たる肌淋しいことだらう、竊かに男性としての寂寥が感ぜられ、秋士の悲しみの轉た深いものがある。鳳去り台空しく、女のない身にはいふばかりなき不自由が思ひ知

られ、孤り恍として春夢婆の想を抱くのであつた。しかしそれは已むを得ない。三世三公の富貴顯榮の身でも、そればかりは思ふやうにならず、統袴の貴公子でも満足には行かないのだ。まして現在の生は裸になつて了ひ、住むに立錫の地さへないではないか。一時の安息さへ得られぬこの世には、梁の孝王の忘憂館のやうな所はない。うるさく付き纏はれる人間の生涯には、周の赧王の避債台のやうな都合の好いものは到底あり得まい。あわれ英雄路を失して足を托するに門なく、豪傑名を埋む生を謀るに奚の術ぞ。財産は破壊され一家離散して了つた生の現在は、正にその通りであつた。

下 山

山奥の尼寺に行ひすまして居た愛姑は、手に獅子の爐の火を藪き、焼いて心香を出し、涙は降襲の鉢の波を傾け、染めて血漬を成す。千々に亂るゝ心を抑え／＼て、外見だけは行持殊勝にその目を送つて居たが、溪光月色を見ても、まだ諸法空相の姿に悟を開き切らず、花氣鳥聲を聞いてはあじきなく別れた人の上にのみ心を牽かれる。昔霍小玉が紫玉の釵を質に置いたのは何の

爲めか、みな李益りえきの在家を探さう爲めの苦心であつた。蘇若蘭そじやくらんが八千餘言の詩を線に織り込んだ心の誠は、とう／＼寶酒たうたうの迎ひの使者を呼んだではないか。鴛湖鵝水の語り草もある。たとひ今は互に行方不明に成つて居るとはいひながら、必ずしも廻り會はぬとは限るまい。晉しんの重耳ちゆうじは秦しんに身を寄せて、白髪になつてから國へ返つて來たのだつた。陳ちんの樂昌がくしやう公主こうしゆは揚素やうその家へ引き取られ、古道具屋の鏡から昔の夫徐德言じゆとくげんに再會したといふ。必ずしも絶望すべきではない。伯勞はくろうは東に飛び燕は西に飛んでも、均しく並命の鳥だ。南の枝は暖きに向ひ北の枝は寒きに向つても等しくこれ同根の樹だ。さう思つては頼もしい氣にもなつて、涙の雨を拭ひ胸の雲を拂ひながら、依然として果てもなきあじきなさに嘆き沈む。天長地久、それよりも愛姑の恨みは綿綿として盡くる時がない。それともこのまゝこの山寺に朽ち果てる運命か知らん——亡國の後深山へ入つて山女になつて了つた秦の始皇の宮人毛女もうぢよのやうに——。匈奴の國へ渡はれた漢の蔡文姬さいぶんきは魏の世になつてから買ひ戻された。おゝ誰れか此の身を連れて往つてくれる人はないものか。身を悶へても悶へ切れぬ。發鳩はつきうの山に住む精衛の鳥は前生炎帝えんていの女と生れ、東海で溺死した口惜さから西山の木石を銜へて往つて東海を填めやうとしてゐるとやら、愛姑の恨はそれどころでない。

李密りみつが黎陽れいやうの土で埋立てをしたやうに、無茶苦茶に埋めて了つても懺ちまたらぬ心がする。

それをよく見抜いて居たのは住持の老尼だつた。老尼はいつも澄心黙照、慧眼靜觀、兀爾として坐禪して居るが、木犀の香を座間に聞いて香通三昧に入り、梅花を枝上に嘖つて春透ると十分。愛姑の起居を見ても顔色を見ても、心の惱みがあり／＼と讀め、杜蘭香とらんきやうはまだ俗縁が切れず、吳綵鸞ごさいらんは民の妻に謫す外ないやうなものだと見て取つてゐた。慈悲の臉を廻らして寵女の哀訴を聽く、佛法修行の問題は姑く措き、しんみりと心の裡を尋ねて見ると、愛姑の嘆きもまことに氣の毒だ。これは無理に引留めて置いては却つて罪が深い。月の宮に獨り寝させて置くべき代物ではない。絃切れ琴柱亂れた二人の仲を、何とかして躋こゝろ雞筋ききんの絃で再び續くやうにしてやりたい。龍と化して見失なつた梭を探し出して、またもとの鮫錦を織らしてやりたいものだ。それがまた佛の慈悲でもある。けれども此處は山奥のことで、崎嶇たる山路は遙かに解虎の錫を飛ばしても送つて行くわけに行かず、遼遠な船路は盃を船と化しても渡してやることは困難だ。さればといつて、誰れか一所に山を下りる人にも頼んでやらねば——それも男では困る。若い女のことではあり、途中どんな過ちがないとも限らぬ。

『それが一番困るのです。そのうちよき序もあらうから、それをお待なさい』

親切な老尼は歸途の便宜に就いて彼れ是れと氣を付けてくれるのであつた。

そのうちに折よく女の客が此の山寺へ訪ねて來た。その女客といふのは錢塘生れの人で、相當の舊家だつたさうだ。萊邑へ嫁いたのだが、夫に死別れて俄かに後家になり、それ以來夫の追善の爲め此の山寺へ參詣して、高德な老尼の教を受け、熱心な信者になり、大さう心易く往來するやうになつたのだといふ。随つて折々の布施なども手厚いもので、誠に莫逆の交りといふのであらう。神佛にかけて姉妹の契りを込めた仲であつた。餘程因縁の深い同士と見えて、老尼もこの女客もさつぱりと浮世を忘れ、この山寺に語り合ふのが何よりも嬉しいらしい。いづれも孤獨の身で、床を一ツづゝほろり離して宿つて行く。老尼は素娥夜冷かにして影梅蕊の魂に依るが如く、女客は青女曉寒して淚楓林の色を染むとも謂ふべきものであつた。しかしこの未亡人とても、此うして教の道を聽いて心を慰めるとはいへ、やはり女には相違ない。いろ／＼なことにつまされることもなくはあるまい。一生後家を立て徹し、二度と浮いた世間の樂みをしようにといふのではないが、山寺にばかり宿つても居れなかつた。

『そろ／＼郷へ歸つて見ませう』

といひ出した。その時老尼は始めて愛姑の身の上を話して未亡人に連れを頼んだ。

『ほんに氣の毒な獨りほつちなのです。女といふものはね、やはり一人歩行するよりは二人の方が確ですし、夫婦連れでなくとも誰か一所に道伴になつて貰へば、どんなに心丈夫か知れはしない。サア／＼お名残は惜しいがそんなことは言つて居られません——早くお粧をなさい。ほんに好い鹽梅でした、お伴になつて戴いて機嫌よく郷にお歸りなさい。わたしが送つて上げたいけれども、此う年を取つては仕方がない。氣を付けてね。オ、お發ちなさい——わたしのことは決して心配なさるなよ』

愛姑は嬉しいやら悲しいやら、

『ほんに有り難ふ御座いました。先達ては飢死するばかりのところを助けて戴き、また今日は此うして御親切に郷里へ送つて戴いて、此の御恩は未來永劫決して忘れはいたしません』

丁寧に頭を下げて別れを惜み、やがて女客に連れられて靜かに足を運び、小さい庵室の屋根を振り返りながら、下山の途に就いたのであつた。里へ出れば懐い實生が待つて居るものや

うに胸の血が湧く。畢鉢羅樹は並笑の花を開き、天棘の柳は同絲の蔓を引くとはこれか。未亡人は道々も大さう親切にしてくれて、疲れはば同じ馬に乗せ、河には同じ船に乗り、風和かい田舎道には互に手を執り交し、水淨き流には肩を並べて月を見る。何かと細かいところまで氣を付け勞はつてくれるので、旅の疲れなどは氣も付かぬ程だつた。

舊廬の重逢

遠いと思つた道も存外樂に、も早や故郷は目の先のところまで近づいた。

『大さう御世話になりました。わたしの家はあの放鶴洲の近所で御座いますから、夫も多分弄珠樓の附近を探したらゐることだらうと存じます。ほんに永々御親切にして戴いて、お名残惜しう御座いますが、——』

『さやうですか、またいづれ、御大事になさいます』

未亡人はそこから船で西湖の方へ向ひ、愛姑は北麗(禾中の地名)で船を下りる。互に名残り惜しく別れを告げた。

愛姑はいそ／＼城下へ近づいて見ると、城廓はやはり舊のまゝに廻らされてあつたが、住む人々は皆變り果て、殆んど見知つた顔も居ない。亡き母に連れられて家を出てからは、住む人もなかつたのか、戸に螢火流れ門に蛛絲綴る。馴染の燕も來なくなつたか、梁には空しく泥が落ちて居る。見覺への梨は花も散つて、荒れた小徑は一面の苔に封じられてゐた。おゝあれから幾年になつたのだらう、それにしても何たる屋敷の變りやうだ。涙が流れる。

身一つでも此うして達者で居られたのは幸ひだつた、あの方にも逢はれぬといふことはあるまい。彼方此方心當りを尋ねながら、澗水(ひらすゐ)から漢塘(かんたう)へ出て陸へ上り、非常な楽しい空想を描いて迎り着いて見れば、あはれ空想とは正反對に慘たらしい現實に逢着したのであつた。生の家へ往つて見ると、家の中はがらんとして何一つ道具らしい物はない、司馬相如が夜逃げした跡のやうだ。金銀財産から田畑山林を悉く施して了つた後の倪瓚(すいざん)の屋敷跡もこんなであつたか知らん。あはら家の中に寶生が一人ぼつねんと坐つて居るのであつた。

『マアツ、あなたどうなさいましたの、此のお住居は——そして召し上り物などどうなすつて』
何たる情けない有様であらう。長い間別れ／＼の悲しい思ひを盡した上に、やうやく廻り會

つて見れば話にならぬこの有様、互に語り合ふこれまでの艱難は、一言一句腸を絞る。ひしと手を執つて、見交す顔に涙の源も枯れたであらう。

悲しい中にも會ふた嬉しさは込み上げる。涙をそつと拭へは笑顔はニツコリと浮ぶのであつた。

『どんなことをしても死んでも廻り逢はうと思つて居ましたわ。ほんとに此うしてお目に掛かれて嬉しう御座んす。神様の引合せですわね。お互の一心が通じたといふんでせう』

愛姑は實生のあまりに尾葉打ち枯らして居るのが何よりも悲しい。心を引き立てささうと様々に慰めた。玉簫は思ふ男の消息が絶へて焦れ死をしたが、とう／＼生れ替つて韋臯の側へ行つたといふ話もした。徳言と樂昌公主の鏡の話から、自分達も丁度それと同じく、また一所になつたといふことも物語つた。太古の帝女嫺氏の神靈が二人の互に缺けた恨みに同情して天地を補つたやう、本通り二人を合はせてくれたのだらうとも語り合つた。お互の真心が通じて、費長房の縮地の術のやうに兩方から自然と寄つて了つたのだらうなどと、いろ／＼嬉しい話をした。そして更に一層生を勵むるのであつた。

『周の寶鼎が沈んで在つた爲めに、泗水の水にはいつも金寶の氣が動いて居たともいふし、龍泉太阿の劍が埋めてあつた爲めに、豊城の空には劍の精氣が斗牛の星の間に蟠つてゐたともいひますもの、あなたも斷じて李白程の奇が無いならば、文章で世に名を揚げることは出来ずまいが、立派にその才がおりなことはわたしが確に見て居ります。大將軍衛青程の立派な貴い素質を持ちながら、此うした情ない暮しで一生過ごすなどいふことがあるものですか。決して氣を落してはいけません。これから先のことはわたしが立派に立て、行きませう。わたしの舊の家はむさくろしいながら、禾中の地に在るのでから、夫婦暮しには狭くとも、辛抱しようぢやありませんか。また糊口の方法にしても途のないことはありません。あなたは充分勉強しながら文筆の方をやつて下さい、百姓仕事をするよりいゝぢやありませんか。わたしは身軀の續く限りお針の賃仕事でも何でもいたします。食べる米が無いとか着る着物がない程困るやうには決してしはしません。世間體恥しいなどいふことは問題でありませんから、何事も辛抱してあなたの實力だけを研くことが専一だと思ひます。そしてかりそめにも進士試験を立派に及第遊ばしたら、それを占めたもの、外になにも入りません。そして立派になつてから、あなたと二人で態々粗末な着

物を着て鮑宣が鹿車で歸郷したやうにあなたの町へ歸つて往く、どんなに嬉しいでせう、わたしはその外に願が御座いません。けれどあなた、わたしを見棄てはなさらないでせうね。どうぞ御願で御座います。あなたの爲めならわたしにどんな事でも出来ないことはありません』

愛姑の衷情は切々たるものだった。

「ね、さうぢやありませんか』

「おゝ、有難い。何うならうとも二人諸共だ。それが僕の唯一の願なのだ。二人で努力する——それが眞に正しいことなのだ。お前のいふのが天地の心といふものだ』

手 鍋

愛姑の發議に従つて二人は早速南湖の近く愛姑の舊宅へ引移り、半畝ばかりの小やかな家の手入れをし、兎も角そこへ落付いて、屋敷の居廻りの荒た畑などに鋤を入れ、幾坪か野菜や穀物などを作つて見た。やがて芋だの粟だのを收穫して見ると、これは結構やつて行ける。どうして貧乏人處でない。柘を栽えたり桑を栽えたりして見るとなか／＼以つて立派な恒産が出来たわ

けだ。そこで愛姑は蠶を飼つたり絲を紡いたり、馬磨(馬に挽かせる石臼)を挽いてはそれで朝夕の食事を炊き、暖い日は襷掛け尻端折りで、始終簾外の草叢へ入つたり出たりしてせつせと働き、寒い夜は熱心に機を織つて、軋軋の音が生の讀書の聲に和するといふ有様であつた。冀きけつの妻のやう、何は無くとも一通り膳拵をして、生にだけは不味いものを食はせず、伯鸞はくわんの妻のやう、如何なる卑しいことをも厭はず、貧賤な夫を敬ふその甲斐／＼しき健氣さ、涙ぐましいばかりであつた。愛姑は枕に雞鳴を戒めて朝早く起き、實生は晝蟾影を窺つて寸陰を惜み、まことに夫婦同一婦隨、たゞ一言の言葉争ひもなく、丁度よき年頃ではあり、睦しき羨むべきもので、夫婦同一心、氣を揃へて勵むことやがて三年に及んだのであつた。

さなくとも實生は非常に俊秀な生れ付きだったから、普通の人間の到底及ぶところではない。學業進歩の蹟驚くべきものであつた。二人の暮しを世間は何と見やうとも、生の希望は非常に高い處にある、燕雀安んぞ鴻鵠の志を知らんやだ。洛陽秀才多しと雖も嶄然として一頭地を擢でた蔡洪さいこうにも比すべき實力が付いた。天下の碩學すべて斐楷はいかいの博學に及ばなかつたといふが、生の蘊蓄は更に凌駕すべきものがあつた。けれども悲しい哉、彼れの現在の状態では僅かにそ

の目を支へて行くだけのもので、葛籠を倒にしてもたゞ瘡蓋（上の瘡の意味不明紙）が落ちる位のもの、財布を振つて見ても讀書に集めた螢の乾いたのが出てくる位のものだ、この點からいへば實に三文の値打もないわけだ。硯の上は田ではない、何時まで搔き廻して居ても米も取れぬ。書物の中に穀類植ゑてあるのでないから、豊年を望んでも徒勞に過ぎない。毎夜糠を燃すやうにして貧しい中で學問に頭を埋め盡して來たのだが、（平和は三年も毎年璞玉を楚王に奉つても、王に玉を見る目が無かつた爲め、遂に刑罰）られて兩足共に無くなつて了つたといふ通り、只氣にはやつても詮なきことと、じつと我慢をし通すのであつた。

けれども世間の有様を見れば、無學な凡くらが得々として進士に及し、低能な青二才が揚々として高官に昇つて居るではないか。あんなことなら最優等で及第する位のこととは囊の中から物を取るより雜作ない。高級な地位に仕官するのは道傍で芥を拾ふより容易いではないか。さう思ふと生も曾ては試験の爲めに大いに奮闘した覺へもあるので、程明道（てめい）が年を取つても小供の時から好きな獵を見ると羨しくなつたといふやうに、酒呑みが樽を見て涎を流がすと同じこと、一腕揮つて見たくて堪らない。

『何のことだ、自分の今の力量だつたらどんな奴が來やうとも、その一段上に出るのは朝飯前だがな。ウーン残念だつた馬鹿な目に遭つて來た。俺は十年の歳を棒に振つて了つたんだからな。どうも髀肉の嘆に堪へない。あまりに長く埋もれて了つたものだ。老驥千里の志を懷いて櫪に伏して居たわけだ。けれどもまだ鬚に白髪が生へたわけではなし、奮發して見よう。先年は大いにやるつもりだつたが、折角の大望も失敗に終つたのだつた。今度こそは北京へ出て一ツ、大いに筆陳を按排して見よう。やはり何といつても名を争ふには帝都へ行かねば駄目だ。みつしりやつて前途を開くには大學でなくては駄目だ』

が、盤に苜蓿なした。馬に食はせる物はおろか、自分の持つて行く辨當にさへ困る。曾て愛姑と携へた時の道中着も有つたのだが、それは弊れて今は質屋の店に在る。その他何一ツ餘分な物の貯がないのだから、どうして旅装を調ふべきか問題だ。文籍腹に滿つと雖も一囊錢に如かずと趙元叔（てんげんしゆく）はいつたが、その一囊錢を倒にしても路資にさへ足らぬのだ。しかしこの眼前焦眉の大問題に當面してはたとひ肉を剗るとも辭するところでない。遂に今まで住んで居た愛姑の家屋敷の一部を賣り拂ひ、その金で上京するといふ、實に悲慘なる英斷を決行したのであ

つた。

生は固よりこんな片田舎の淪落に安ずる氣はなく、これから大いに雄飛しようといふ希望に満ちて居るのだし、愛姑も同じく榮達させたい、その爲めに今日まで苦勞を續けて來たのだから、此の場合藁屋一軒荒地の片隅を賣拂ふ位は少しも惜いとは思はなかつた。いよいよ出發のその日、屋敷内の桃が美しく咲き初めた。

『ほんに桃源の花の中から戀人を送り出すやうですわね。やがてあなたが高く月桂冠を捧げられた時、わたしはきつと船の着く河岸までお迎ひに出て居ますよ』

送る者も送られる者も洋々たる希望に満ちて、日を擇び道中を祝ふて出發し、雲水を一帆に飛ばして終に吳會を離れ、烟花を三月に趁ふて却つて揚州を上つたのであつた。

哀 鴻

丁度その年は打續く兇作だつたので、地方は非常に人氣が悪く、物資の運輸は止まり旅客の往來も危険が多く、人々の集つて居るのを見るといづれも胸ばかり出て腹は引込み、その形は

鳩のやう、兩頬はげつそり落ちて、顔は鶺鴒のやうな者ばかり。人の聲はみな鴻か雁のやうに、哀れに力抜けた聲で語るといふ有様、名にしおふ白樂天の築いた錦塘の水も冷たく、飾り船を浮べて贅澤をするものもない。慈谿の小墅の花も荒れて、悠長に瓊簫を吹いて楽しむものもない。杜牧が二十四橋明月の夜といつたその二十四橋にも、當年のやうな月の明るさを見ることが出来ず、曹植が周流二十侯、間に十二帝を置くといつたその十二帝の邊りも、昔のやうな華かさは見へぬ。殊に旅行者に甚だ危険の多い土地だつたので、いづれもびく／＼もので通るのであつた、宿屋へ泊つて居てもなか／＼安心はならぬ。無論生も大いに警戒を怠らぬのであつた。ある晩ひどい淋しい田舎の宿屋へ着いた。如何にも僻地で人の影さへ稀に、風高く月暗く、甚だ氣分の好くない土地だ。皖の西で博士李涉を脅したやうな大海賊も出まいが、王獻之の部屋へ忍び込んで青氈まで持つて往つたやうなこそ泥は矢鱈に出沒するのであつた。

生は用心しながらも、連日跋涉の勞れで遂ぐつすり寢込んで了つた。するとそれを疾うから狙つて居た悪漢があつたのだ。音も立てずそつと生の部屋の屏風の蔭へ張り付いて、生の熟睡を待つたらしい。梁上に身を藏す鼠かなぞのやう、何處から何う忍び込んで來たものか、外で

は犬の吠へ聲も聞えず、門には錠を下してあるのだから、人の近寄るべき筈はないのだが、夜の暗に人の氣付かぬ處から、壁へ穴を明け入り込んだものと見える。曉方目が覺めて荷物を見ると、何一つ残らず、財布の中はすつかり空になつて居た。

何たる無残なことだらう、昔の賈誼かぎにも齊しき才を持たながら賈誼の所謂鵬鳥の災を免れて命だけは全ふして居るものゝ、運命は盧嬰ろえいと同様、鶻鷲の厄に遭つて衣類金錢一物も残らず盗まれて了つたのだ。折角愛姑が苦心をして作つた着物も誰に着られて了ふことや、愛姑の屋敷を賣拂つて作つた血の出るやうな金も、何者がそれを使つて了ふのであらう。たゞの悲しさたゞの口惜さとはわけが異ふ。生は蒼くなつて土地の役所へ急報し、縣の知事に面會し具に事情を訴へた。

『何とか盗られた金品を手に戻るやうに御盡力を願ひます、實は今進士試験を受けに出る處でして、お蔭を蒙つて是非試験を受け得るやう御計らひを願ひたいのです。何も盗まれた品物が惜いといふのではなく、折角晴れの壇場で今まで苦勞の効を現はしたいのです。それさへ出来れば何も惜くも傷ましくもありません。盗られた金品はさういふわけの金品ですから、特に御盡力を御願ひいたします』

ところがその縣知事殿は大變な横着者で、何事があつても平氣なもの、租税取立ての時だけ特別に骨を折る以外は、たゞ坐つて嘯いて居る外用がないといふ相手が悪い人間だ。

『ハア、楚國の人が弓を遺せは矢張り楚の人が拾つて使ふといふぢやないか、遺しても取られなくてもまたそれが何とかなるだらう。寒翁が馬を失つてもわしに相談するのは無理だ。窮寇は追はずさ。脱げる兎は逐つても仕様がなぢやないか』

全然取合ふやうな顔色さい見せてくれない。

『ハ、ハ、ハ、あんたが何とかして見なされ、氣の毒だがわしにはどうもならんて』

生はがつかりした。身は瓢箪を繋げたやうなもので、どうしやうといふこともならず、もはや誰に訴へるところもない、頭の中は徒らに慌てゝぐらくするばかり、此うなつては飛龍が藥店へ飛び込んだやうなものだ。此處で骨になつて了であらうか。飢へた雀が青空へ飛び上つたやうなものだ。如何とも方法が付かない。知つた土地も近くにはなし、頼んで見るやうなものもない。郷へ歸るにしても遙かな道中を裸では出来ないし、此のまゝ都へ往くにもまだ可なりの

距離がある。此うした旅に出ては阮籍が嵇康に逢ふた時のやうな青眼に見てくれる親切な人があらうとも思はれず、しからば舊知つて居る老友馬遵の所でも便つて往くかだが、かゝる有様で何の面下げて行かれやうか。全く進退谷まつて了つた。

絶命の詞

生は絶望の極、枯鱗鍛羽を翻躍して全く自棄になつて了つた、體裁も我慢もない。徐孺子が窮して鏡を磨いたといふやうに、すつかり身を落して或は日傭取りになり、伍子胥が呉へ逃げて來た時のやう、ある場合には民家に立寄つて乞食もする。王勃が南昌へ舟行の際、風を一帆に助けてくれたやうな神人には逢はずして、范仲淹が薦福寺の碑を書いて飢へた書生に恵んだやうな特志家の助力を受け、流れ／＼てまたも龍蟠虎踞の金陵へ歸つて來た。曩には春水に扁舟を泛べて、金馬、碧雞の寶を求め去るの概であつたが、今は華堂燭滅して復た髡を留むるなく、流落の生を顧みてくれる者は一人もない。やゝ知つた家の門へ行つて見ても、誠に無愛想を極めたものだ。此の前に來て馬遵や愛姑に逢つた時は、大いに賑かに愉快に騒いだのであつ

たが、今追憶すればたゞ夢のやうなものだ。聲を掛けてもいそ／＼出て迎へてくれる筈もない、徒に思ひを残して嫌な気持ちで歸る外はないのであつた。あゝ書劍廳零長へに伶俚の魄に落ち、關河蕭索奚んぞ蹴躡の踪に投ぜんやだ。こんなに落ち果てゝ了つては、此うした歌舞の廓へ來て見てもどうもならぬ。

物は獨りで鳴るものではない、平かならぬことがあつてこそ音を立てるのだ。人間は無暗と涙を流すわけのものではない、堪へ難い苦痛に遭つてこそ袂をしぼるのだ。忠良にして放逐された屈原は汨羅の池に行吟し、父兄を殺され剩へ身も逮はれんとした伍員は蘆原の中で浩嘆した。流泉嗚咽し、落木悲涼。列壑風に號へ、攢巒月に慘たり。千林露に泣き百卉烟に啼く。悽慘たる寶生の悲愁は胸を搔き撈るばかり、遂に『絶命之詞』一首を賦して滿腔の憤を抒へ、叫天の響を發し、哀れな聲を揚げて高らかに歌ふのであつた。

絶命詞

人皆集苑兮 我獨向隅

何彼榮而此瘁兮 豈才異而知殊

匪_レ虎兇_ニ而率_レ彼曠野_一兮 俾_レ蛟龍之困_ニ於泥塗_一

余將披_レ髮而馳_レ玉駟_一兮 直騰_レ身以叩_レ金樞_一

奈彼蒼_レ之浩浩兮 終不_レ白_レ夫區區_一

任_レ世途之顛倒_一兮 隕_レ我命於須臾_一

縱_レ百身其猶莫_レ贖_一兮 雖_レ九死亦復何辜_一

哀れにも力なきその聲は、孤鶴の長空に唳ふが如く、哀猿の斷峽に啼くが如く、かぐじ耒雨として崩崖裂石の如く、凄然として楚雨酸風の如く、筑を撃つて變徴の音を成すが如く、絲を弾いて絶絃の響を起すが如く、夜坐して閑人の寡に泣くを聴くが如く、曉行いて邊士の寒に苦しむを聞くが如く、實に悲愴といふ外はなかつた。

前を見れば大江の流は長へに東に去り、滔々たる鯨波は物凄いうねりをなし、河伯旌を揚げて蛇龍の屈に入るを待ち、馮夷賀を勧めて蛟蜃の郷に登るを俟つかとも見へ、逸才を懐いて困頓の苦に落ちた生の身軀を彼の暗い波の底へ吞まうとして居るのではないかとも思はれる。生の今は全く世に望みなく、一命は鴻毛より軽い、このまゝ魚腹に葬むつても惜いこともなくなつ

た。崔嘉の止めるを聴かず石を抱いて河へ飛び込んだ申屠狄を思ふ。伍子胥の靈と共に潮を逐ふて去つた文種の靈を懷ふ。ふら／＼と波の底へ飛び込んで了ふ氣になつた。

殆んど無意識に汀へ駆け寄つて見ると、奇鷺雨を呼び毒虎風に嘯き、水勢滔々として流れて居る。舟は徒に横に繋がれて人の影さへ見えぬ。無論網などを打つてるものもない。たゞ水が舟を繞つて渦巻くを見るのみ、それに棹さして乗り出すものもなく、暮れかゝる水の色が薄氣味悪く動いて居る。見渡せば濁浪天に連なつて水郷の空霞み渡り、打ち寄る波に餌を漁る魚が時々水上に跳ねる。生は遙かに波頭を眺めて、魂は早くも矢の如くに吸ひ込まれるやうだ。足許の深い邊りを覗いて、此の邊から飛び込まうかと思ふと、また何となく涙がほろ／＼落ちる。

「ア、いよ／＼死ぬんだ。どうなるものか」

思ひ切つてやをら身を躍らせやうとした時、神様が引止めたとてもいはうか、將に足が水際に放れんとして、はつと考へが變つたのであつた。

待て、自分の一身は兎も角、我が家のものはどうなるか、女心の愛姑はどんなにか歎くであらう。自分は今一足飛び込めば遊魂忽ち青雲に乗て了ふ、たとひ昇天は出來ずとも、すべて現世

の苦惱から遁れることは出来るのだが。翻つて思へば、朝夕の化粧にも心を籠めて歸るその日を計へてゐる愛姑に、遂に歸らぬ人を待たすかと、堪らなく不憫になる。流石女だけにその悲嘆はどんなであらう。そればかりではない、今自分が亡くなつたら父祖以來の家業を誰れが繼ぐか、誰れが祖先の祀をするものがあらう。それを思ふと渺たるこの一身も大事な身軀といはねばならぬ。千鈞の重い責任を負ふてゐるわけだ。如何にも惜しくないつまらぬ命だが、死ぬことだけは考へものだ。兎も角一縷の命だけは取り止めて置かねばならぬ。

自殺を思ひ止まつた寶生は、相變らず晝は食を乞ふて宿場々々を渡り歩行き、夜は堂宮などへ潛り込んで雨露を凌ぐのであつた。秋も末になれば冷い西風は肌を斬るやうに吹いて來る、蘆花を詰めたやうなボロ綿入れの外に着るものも無いのだ。身の振り方は付かず、麥飯の残りを貰つて饑を凌がねばならぬのだ。身を淵河へさへ捨てかねたのだ。乞食をしてうる付き廻る位は仕方がない。汚い装りをして立派な家の門へ立ち『奥様、旦那様』に縋つて歩行く、め入るやうな暮の鐘を聞いては托鉢の僧の身も思はれる。此うして鼠の食ひ残しのやうなものを腹に入れて、辛く命を繋ぐ意氣地なさを顧みると、自分ながら袂を被る程恥かしくもなる。布目

も判らぬボロを引つ掛けて身軀を蔽ふて居る圖を見ては、誰れか笑はぬものがあらう。手に持つは孟敏が甑、破れよとまゝよ。鋏をかたがて通るは劉伶の鍬か、野垂れ死んでも誰れが埋めてくれるだらうか。

『あゝ何たる無情の天地よ、これはどうしたことだ』

頭をむちやくちやに搔撈つて了ひたい。此うしたところまで虐まれ落されては誰か胸を打つて歎かぬものがあらう。花の情風の性にあらずとも、飛び散る心の痛みがある。身軀はもはや土木に等しく朽ち果てゝも、なほやるせなき悲みだけがひしと纏ふて居るではないか。全く理屈にもならない。考ふべき餘地もない。年少才子の薄命は紅顔を破らぬものはないのだ。運命の神は飽くまで才を忌むと見へる、世間といふものはどうして此うも冷酷なものなのだらう。

第七卷

易にも云ふやうに屯(義)は必らず終に亨(通達)る、否(閉塞)は能く泰(通)に轉ずで、畢竟富貴は廻り持ちだ。詩書の學問は決して心を誤るの具ではない。天の心は測るべからずとばかりはいへぬ。極端に人を苦しめるのも、それは英雄を仕立て上げる爲めに、磨き上げるのだと見ることも出きやう。苟もその人にして人事を盡して正義に悖らなかつたなら、遂に仕合はせを挽回することも出来るであらう。今の寶生の身の上に引き當てゝ見てもさうだ。あらゆる艱難を歴盡し、あらゆる苦しみを忍んで來た。大きな挽臼で挽き潰され、心肝を嘔き出し、血を搾り抜かれたやうなものだ。笑つても怒つてもどうもならない。晉の祖逖が如何に先鞭を着けやうと焦燥つてもさう旨く行かず、秦の繞朝が策を立てゝもその成功には自から別の機縁に依らねばならぬ。生も今は苦しみの絶頂、試練もこれ以上に加ふべき餘地がない。もはや機縁を待つばかりだ。今や旅先で進退谷まり裸一貫とまで成り下つた丁度そこへ、初めて救ひの手は下されたのであつた。突然生を尋ねて來た一人の若黨がある。無慘な乞食姿の生の前へ、丁寧

に頭を下げた、蓮伯玉(蓮)の家から來た使かと思ふ程慇懃に、蕭穎士(蕭)の家の下男かと思ふ程に親しみ深く、そして恭しく一通の手紙を差し出した。

『主人からの申し付けでこの手紙一通を持参いたしました。此處でお目に掛かつたのは誠に好都合で御座いました。またこれもあなたへ差上げるやうとのこと御座います』

手紙に添へて夥しい多額の金を取り出した。思ひもかけぬこの偉大なる救ひの手は、彼の老友馬遜からの贈物であつたのだ。

馬遜は曾て寶生、愛姑の二人を見送つた時から、その前途に對して蔭ながら非常な危虞を懷いて居た。雨につけ風につけ、心を去つたことがなく、巧く行くか拙く行くか、豫想したやうな酷い目に逢つて居るだらうと。殆んど生の運命を洞觀して居たのであつた。しかし當分は五角六張で何を行つても事毎に當てが外れる。その度に金を出して面倒見てやつてもそれは何もならない。それよりも充分千磨百折の苦勞をし抜いた時を見て、徹底的に助けて遣るのが最も有意義だ。大なる勳業は晏如として居て出來るものでなく、人間の明智才能は常に災難に對する注意から發達するものだといふ見地から、今までの難義は殆んど見透して居たに拘はら

ず、全然構ひ付けずして、生が災厄の絶點に達したのを見計ひ、始めて救ひの手を下したのであつて、その時の手紙には

『いよ／＼今度こそ大いにやつて御覽なさい、奮發の時が來たのですから、金は存分に差し上げます、尻古垂れずのみつしりやつて腕を見せて下さい』

といふやうな意味が書いてあつた。あゝ萬里路遙にして幾年か互に顔さへ見ないが、幾行の手紙の面に、血の出るやうな親切な馬遷の友情があり／＼と見へる。斜に封した白絹の袋には、ブツしりと持上がらぬ程の黄金が入れてある。わざ／＼此處まで持たせてくれた親切、またその手紙の一字一句、實に身に浸み渡つて感激される。

生は今まで地の底にも埋まる程に沈み愁へて居たが、今は亦急に天にも昇る程喜んだ。馬遷の惠の金で早速旅装を買ひ調へ、大鵬が垂天の翼を張つて風を搏ち、鯢魚が曝日の腮を嘘して水を刺すやうに。俄かに心も大きく意氣旺んに、再び試験を受けに上京した。

道を急ひで北京へ到着し、夥しい多額の入學金を納めて大學に籍を置いた生は、元來聰明な素質を持つて居るのだから、一般學生程度の學問ならば、殆んど勉強する必要もない位だが、

散々な苦勞が身に浸みて居るのから更に一段の激勵を加へ、故人困學の跡に鑑み飽くまで心を戒めて勉強した。朝は白々明けから、達磨大師が少林で九年の面壁坐禪をしたといふやうに、兀々と机に向ひ、夜は劉向が天祿閣で編輯に従事した當時、天の太乙星が燈火を助けたといふやうに、曉に及ぶまで燭下に目を曝し、鐵の硯に穴があくかと思ふ程、膝下の蒲團も破れるばかり、恐ろしい精力を傾けて研學したのであつた。

やがてその功空しからず、その文名は往古の曹子建よりも高く、都下才人多しと雖も肩を比ぶるものなく、その詩賦は昔の太冲を凌ぎ、遂に洛中の紙價を貴からしむるの概があり、筆花を雪案に吐けば行行宋玉の艶、班固の香を陳ね、墨浪を風簷に翻せば字字韓愈の潮、蘇軾の海を漂はすといふ有様であつた。しかし世間は盲千人で、寶生の廣才卓識もまだ充分に認められず、千里追風の名馬もまだ伯樂に逢はずして空しく駿足の相を埋め、洋洋たる江河の心、峩峩たる太山の心を調ぶる伯牙の琴も鍾子期の知音に遭はざるを怨むのであつた。

たま／＼朝廷でも人材拔擢の聲が盛んになり、實力本位の任用方針に更まり、最高學府から優秀な俊才を要路に推薦することになつて、學殖智識に對して非常に嚴峻な考査を加へ、同時に品性操行の點にも綿密な詮衡をなし、更に人格度量の點に就いても充分に檢査して、國家の柱石たるものを求めようといふことになつた。その際都下雲の如き俊髦の中から特に選拔されたのは寶生で、その超邁な學識才幹は廟堂の諸公を驚嘆せしめた。どうして此れ程の逸才が今まで世に知られなかつたのかと不思議がられ、蕭何せうがが韓信かんしんを推薦して國士無雙と賞揚したやうに、生の爲めに特に肩を持つてくれたものも少くない。朝廷に於ける評判も當今第一といふのも第二と下らぬ人物だと賞揚せられたのであつた。既に此うした有力な推薦があつたので、生の聲價は忽ち隆々たるもので、一旦傑作を認められるやその詩文論策は非常な權威として扱はれるやうになつた。

是に於て生はます／＼勇を鼓し、大いに志氣を激揚して、單騎直馳たんきりよくち、その秋の地方試験を受けて優等で及第し、とん／＼拍子に翌春の中央試験でも首席を以つて及第した。方に大鵬の翼成つて南溟三千里の水を撃ち、萬里の風を搏つべく已に蒼龍の片甲を得た以上は、直ちに雲を

起すこと目の前にある。白鳳の織毫を吐いて元嶺げんしんが廊下を行く時、初日が九英に映じたといふが如き文名は期して待つべきものだ。波濤腕下に生じて倒峽の詞源を傾け、星斗胸中に列して凌霄の氣宇を仰ぐ。一朝にして本來の天分を發揮し、實に少かの間に榮達を得た生の心境や想ふべきものである。敲金戛玉かうきんかつぎやくも生の盛んな聲華には及ばない。風檣陳馬ふうしやうちんばと雖も生の榮達の速きには及ばなかつた。輝きは寶炬に生じて僅かに元燈に譲り、光りは絳霄に徹して仍ち奎耀を聯ぬとも形容すべきであらう。

時は恰も明朝みんてうの黄金時代で、英主成祖文皇帝朝に臨んで萬機を統べ、天下の人材を悉く廟堂に網羅した時であつたから、生の顯榮もまた極めて華かなもので、朝廷の受けがます／＼善く、隨つて衣冠も甚だ隆々たるものである。特に宮中の宴に列して夥だしき賞賜に與り、日に／＼その勢力は上つて行く。過去の生は匣中に藏れた湛盧たんろの名劍のやうなものであつた。今は秦の相劍者薛燭せつしやくに逢つて、更に一段の光芒を表はしたやうなものである。流離困憊の當時は吳下の飯炊竈で焚かれた桐のやうなものだ。いよ／＼時を得た現在の生は、蔡邕さいよくにその爆音を聽かれて、立派な焦尾琴せうびきんに仕立てられ、塵を舞はすの妙音を發するやうなものである。盈つるも

虧くるもみな命數といはねばならぬ。顯はれるも晦れるもすべては因縁時節だ。

やがて及第を知らせの書帖が来て、完全に進士としての立派な肩書が付く。同時に朝廷では新進士の任官詮衡が開始された。朝臣は多数の優秀者の中から先づ第一に竇生を推薦し、その文才學識の秀で居ることを賞揚して、翰林院學士を最も適當とするといふに一決した。ところが成祖皇帝は深く竇生の英雋の材を嘉されて、特に前例を破つて刑部尙書の顯官を授けられたのであつた。

漢張湯は子供の時鼠を磔刑にした。父が覗いて見ると立派な判決文が出来て居る。而も一廉の老吏の手際も及ばなかつたので、父も舌を卷いて了つたといふが、生が刑曹としての流るゝが如き裁判振りは、張湯のそれを想ひ起すばかりであつた。上古の荼萍漫は龍を屠つたとか、生が刑を用ゆるところも細大洩らす處なく、毫も情實に依つて明法を晦すといふやうなことはなかつた。飽くまでも身の清廉を持し法の嚴正を期したので、名刑曹の譽れ中外に高く、李白が但だ願くは一たび韓荆州を識らんといつて朝宗を賞めたやうに、生の顔を見ただけでも非常な光榮とされるのであつた。随つて堂上の公卿と雖も目を睜つてその治蹟に驚き楊敬之が士項

を賞めたやうに竇生の名は一時に海内に震ひ、綱紀頓に肅然たるものがあつた。

けれども生は此うした顯榮の地に上つたに就いても、常に念頭を離れぬのは老友馬遜であつた。想ひ切なるは糟糠の妻愛姑を懷ふの情であつた。生は現在の地位を得ると直ちに馬遜の好きな食物や座敷などの用意をして、上京するやうに迎を出し、閨帳を整へて愛姑の上京する日を守つたのであつた。思へば天涯遙かに隔つて、老友の顔を見ぬのも長い年月であつた。只一人節を守つて居る愛姑の苦勞も如何ばかりであつたらう。生の最も心に掛るものはこの二人で、華やかな賑やかな生活のうちにも、常に釋くべからざる悶であつたのだ。偶爾として一時に志を得、勢譽一世を風靡しても、この二人を思ふ時、顯榮も亦全く誇るに足らなかつた。

故園の情

それにしても世間の人々といふものは輕薄なものだ。勢盛んなものには無暗と寄り付きたがり、時の便宜には争ふて高官に近づくのを捷ちとする。一旦職を失へば縦い昨日まで親友として交つたものも忽ち雲と泥程隔つて了ひながら、苟も時に乗じて高位に登つたとなると、見も

知らぬ縁もゆかりも無いものまで、骨肉のやうに親しく近づいて来る。殊に帝都は天下擇り抜きの人々が集まり、五陵の裘馬京華に輻輳し、萬國の冠裳魏闕に肩摩するといふ有様であつて、それ等の人々も皆相當に學者と稱され天才と呼ばれる一廉の人材に相違ない。何處の門標を見ても鄒陽、枚乘の如き人々で、どの家を見ても庾信、鮑照の如き顔觸れだ。而もその中に於て一頭地を抜いたのだから、寶生の聲望の隆きは當然のことだつた。曾て左思が三都賦を作りたいといつた時、陸士衡は大いに嘲笑つたのであつたが、いよく作り上げたところを見ると實に立派なもので、一字を加ふべきところがないと言つて大いに嘆服しとたいふ。李白が黃鶴樓へ登つたとき、先に崔顥の題してある古詩を見て非常な傑作だと驚いて筆を擱き題詩を斷念したといふ。寶生が今始めて世に顯はれて見ると、今迄の天狗連はいづれも士衡、太白のやうに急に頭を引つ込めて了ふのであつた。

『寶纒芬といふ方は實に偉いものだ。奇才豪放、古藻紛披だ、この人の作つた文を見ると、喬いづくわうく喬皇皇として、天を燭して雲霞の色を起すともいふべきものだ。また詩、詞などの雄健なこと地に擲てば金石の聲を成すともいふべきものだらう。偉いものだ』

此うした評判がばつと一般に廣まると、やれ碑を書いて貰ひたい、やれ墓誌を作つて貰ひ度いといふものが、轍門に絶へずといふやうに集まつて来る。それが爲めに謝禮や贈物の使が門内に溢れ、玄關先は履物で埋まつて了ふといふ豪勢だつた。

生はつく／＼考へると可笑しくもなる。曾て禾中の藁屋に薪米にさへ困つて逼塞して居た時の自分と今の自分と、人間としてどこに相違があるか。當時貧乏儒生、田舎文士として散々馬鹿にして居たのはこの人々ではなかつたか。あんな平凡なもの、あんな淺薄なものといつて、詩文なんぞでんで問題にしてはくれなかつたではないか。陳琳が武都の賦で一本參つてやつたやうに、自分も大いにやり込めてやらうものと如何に鬱憤を抑へたか知れはしない。いよく運命が展開して地位が變ると、此うも現金に詩文まで榮枯を現はすものなのか。此うして見ると龍勺、雞彝（いづれも祭（祀用の器物）のやうな神聖な器も、清廟、明堂の祭壇に載せられないときは、只の盥や水注しと異らぬものだ。純金鑛や明玉の粗材も燕台、吳市に持ち出して評價されずに終れば、石や瓦と何處に異りがあるか。しかしながら、將來の大人物を鼻垂れ小僧の時分に見分けるといふことは、何んな慧眼な人でも六ヶ敷い。裏店の食ひ詰め者の中にも將相の器たるべ

き偉大なる豪傑の居ることは、俗眼に到底見分けの付く道理はないのだから、亦何ぞ怪しまんやでもある、貧賤にしてその實力天才を認められるといふことは、殆んど不可能に近いといつてもよい。貴顯富豪から出て榮達するのは、それは錦上華を増すといふものだが、それ等の人々は、大抵悉くが利己主義の者ばかりで、困窮して居るものから引立てやうなどいふ雅量は露ばかり有たぬものだ。獸炭霏紅の煖い火鉢を抱へて居ても、雪中に暖を送つて凍へる者に分けてやらうといふやうな心得はどうしても起らぬものだ。

ある日生の家へ一人の高貴な來客があつた。それは當時朝廷でも時めく顯官で、翰林院の要職にある人物だつた。寶生に面會して頗る慇懃を極めた態度で此うことを申し出た。

『あなたはまた春秋に富まれて居るのに、此やうな御榮達は誠に羨しう御座います。就きまして、まだお獨りであられて、近頃然るべきところから令夫人をお迎ひになられる御希望で、適當な才媛を尋ねていらつしやるやうに承りましたが、實は拙者にも年頃の娘共がありますぢや。方々から嫁にと申して、希望者も随分多く媒人を以つて申し入れるものが尠くありません、或は正室にといふて來るもの、或は第二夫人にと所望するもの、誠にうるさいもので御座

いまして——しかし、拙者から申すも異なるものではあるが、纏綴も決して世間並には落ちず、教育も充分に授けてあるつもりで御座います。如何で御座らうか、是非一人箕箒の妻に娶つて戴きたいと存じすが——』

生は黙つて聽いてゐたが、言葉を改めてきつぱりと斷はつた。

『御厚意は誠に感謝いたします。が、婚姻の思召だけは堅く辭退を申す外ありません。只今富貴の身分に登りましたのは、眞に拙者の獨力で仕上げたので御座いまして、結婚問題に就いても又他人の御厄介にならぬ所存で御座います。實は先年妻を離縁しましてからこの方、再び後妻を娶らうといふ希望を有たぬので御座います。貴下の令嬢——成る程立派な才媛であられることは察せられますが、拙者に取りましては誠に蛇足の感がいたします。折角ですが御斷りいたします。悪からず——』

極めて冷かに歸して了つた。

けれども此ういふ話を屢々持ち出されて見ると、竊かに感慨無きを得ない。去つた妻の事も想ひ出す。如何に毒惡な女でも、あれでも一旦は妻であり夫であつたに相違ない。今は何ん

な境遇に彷徨つて居ることやら。何よりも切なるは愛姑に對する想ひである。故郷のいぶせき薬屋に一人此の身を待つであらう。相變らず達者でまたくと立働いて居ることだらう。苟も身官職に居る以上、公の事務に就いては飽くまでも嚴正に、氷の如き冷靜さがなければならぬのだが、翻つて人間としての感情をいへば、離情の更に切なるものがある。獨り寝の衾は鐵の床よりも寒く感じられるのであつた。曉鏡に臨んでは獨り綵鸞を望み、雕鞍を見ては専ら駿馬を思ふ。じつと目を閉れば、艶の好いふつくらした玉の腕が肩に觸れるやうに思はれ、香はしい豊かな鬢の狭霧籠めたやうに亂れてるのがありくと見へる。春愁深く、我れながら何たる遣るせなさであらう。一夜を明かすが一年程に長く辛く感じられる。何故か——すべてその人が側に居てくれないからのことである。

外 補

寶生は遽かに手紙を書き始めた。別れて後の轉變、榮華の身の寂しさなど細々と書き認めて使ひの馬を急がせて愛姑の許へ送つてやつた。使ひには無論上京に就いての旅費諸費用、萬金

の黄金を持たせてやつた。

曩に寶生を送つて後の愛姑の苦勞は一通りでなかつた。雨につけ風につけ生の身を案じ、試験の経過はどうかしら、學費に不足はないかしら、唐の賈直言が嶺南へ貶された時、妻董氏は二十年の間直言が封じた髻を解かなかつたといふ、愛姑の家を守る心はそれにも増して堅かつた。足は中庭に裏んで屋敷の外へは一步も踏み出したことなく、昔の魯の秋胡のやうに桑摘女に、金を出して挑んだといふやうな不所存者にも警戒して、急いで桑の籠をしまい。織る機にも千々の心を廻文にもせまほしく、せつせと精を出し、粗末な食物に甘んじて、辛くも釜の塵を拂ふといふ有様。苟も一片贅澤がしたいといふやうな心がある者では、到底眞似も出来ることではない。

遙かに生の上を想ひ、杜鵑暮樹に啼いて歴歴悲しみを含むの時、如何なる吉兆ぞ鵲聲晨の簷に噪しく、思ひも掛けず生からの使が来て、筆の蹟懐しい一封の手紙を差し出した。愛姑は手紙が天からでも降つて来たやうに喜んだ。取る手も遅く封を開いて見れば、首尾克く及第して今は立派な高官の地位に就いたから、一刻も早く上京するやうといふ、紙上爛漫の花を盛るや

うな知らせであつた。愛姑は手足も踊るばかり、青い庭には悉く合歡の草が芽生へたか、胸の血は抑へきれず湧き立つのであつた。それを傳へ聞くと、近所の者はお祝ひを述べに来る。また一郷の名譽として、特に愛姑の門口に隆々たる誇りが輝やくばかりであつた。令名日に輝いて昔の王渾の妻鐘氏、高柔の妻胡母氏の賢にも比し、羨み且つ尊敬するのであつた。愛姑は取る物も取敢へず旅装を整へ、陸路、舟路を急いで北上の途に就いた。今まで長い間の苦勞を打ち忘れて、いそぐと夫の許に急ぐ、愛姑の姿を見ては、傍觀するものまで嬉しさを想ひやられる。況やその本人の心はどんなにか嬉しいことであつたらう。

寶生の方も、身は天子の御座に近く廟堂の位に列して居るものゝ、心は遙かに郷を望んで翹首し、夢は小さやかな舊居の裡に飛ぶのであつた。人間の世界は何時になつたらこれでよいといふ時が来るのか。それにしても迎ひに遣つた使のその後の消息が待遠くて堪ない。望眼巴巴、離腸戚戚、愛姑到着日のを想像して、僅に心を慰めるのであつた。

ところが突然重大問題に關る詔命が寶生に對して降下した。それは曩に成祖皇帝篡位の時、成祖の登極に不平を抱いて逃亡した程濟、史彬等の餘類齊泰、黃子澄等の殘黨の罪狀を追勸せ

よとの仰せだつたので、生が刑部尙書として最初の最大の大斷獄であつた。事苟も王事に係る重大事件であり、事件當時から二十一年にもなる今日、特に寶生をして審理させようといふ成祖の思召のある處にも感奮せねばならぬ、生は殆んど一生の心血を注いで事に臨んだのであつた。

生がいよく審理に着手するや、檢察に臨んでは法文の適用飽くまでも峻嚴に、飽くまで隱微を抉剔し、可なり重要な位置に在る者でも、苟も連類の嫌疑あるものは毫末も假借せず、實に秋霜烈日の如く、有司下僚の作製した調書、口供等に對しては紙背に透る底の眼光を照し、微に入り細に亘り、事件の徹底を期して、公平に輕重を判し、舊案と翻復對照して全く間然するところなく、その關係書類は積んで山を成すといふ有様。而してこれに對する生の裁決は宛も水の流るゝが如く、その斷ずるところは實に牢乎たる鐵案となつて、明なること鏡の徹するに同じく、整理された證據の正確にして、意見の明快なる實に一點の私心情實の跡を止めない。結審に臨んでは特に天子の勅に依つて黃紙附箋のものと雖も、苟も條理に中らざるものは斷然として卻けるといふ。その明斷は實に前古に比を見ざるものであつた。

嗟乎、斯くの如くにして始めて法の神聖は保たれ、司法の獨立が保たれたのであつた。法は

徒らに人を殺し人に媚びるものでないといふことが明かにされた。法の運用には一點の私心を容さない。司法官自己の身を顧み、その結果が地位の上に如何なる影響があるかといふやうなことを念頭に挟む餘地はない。生の態度は實に立派なものであつた。

成祖は非常に御満悦で、生の斷案に照らして改めて從來の法の不備や缺點を匡し、惡法の改廢を命ぜられることになつた。而して生の斷獄に當つての用意の全く嚴正なものであつたことを案ぜられ、特に優渥なる御詔を賜はつた。

『今回の獄には法を枉げ法を抑へた跡が少しもない。まことに整然として前代の判例にも極めてよく適合して居る。直ちにそれ／＼の官に命じて處分を行はせ、將來に對しての効果を及ぼすようにいたすであらう。御苦勞であつた』

事件は書類と共に大理卿に引き繼かれ、更に御史の手に渡り、それ／＼處分の手續きを取られて、同事件連累の者は芽生まで鋤き取られることになつた。そして累の及ぶところ廷臣共の間にも糺彈の手が及ぶこととなつたので、數多い小人共の間から突然内訌が惹起され、爲めに直接斷獄の衝に當つた賈生は、少からず怨望されねばならぬ立場に置かれたのであつた。

内訌がますます八釜しくなつた時、賈生には特に恩命があつて外藩に出ることゝなり、ある地方の巡撫に任ぜられた。いよ／＼身北闕を辭し天子の節を持って赴任の途に就く、御史を兼ねて居るので、華やかな宮中の衣階服を着けて出發した。今迄徳を慕つて居た者共は鳥の樹に集まるやうにぞろ／＼と見送りに出て、車の輪も埋まるばかりであつた。道中駟馬を駈り高車を催し、宿場々々を通過する毎に、驛の役人共は殿上の貴人刑部尙書の顯官であつたといふことを知つて居るので、沿道を戒め非常に鄭重な歡送迎をする。中には顔を識つたものもあり、中央に不満を抱いて、最早地方から再び還らぬだらうなど、噂をするものもあつた。

幾つかの都會を通過して近畿の地を離れ、やがて任地の管下へ入ると、一帯に大戰亂の慘禍を蒙つた地方とて、傷ましい哉、村も町も見影なく荒れ果て、雞犬の聲さへ聽えぬといふ寥落たる有様。城下へ入つて見ても如何にもひっそりしたもので、河には船も動かさず、陸には車の跡も稀に、經濟状態も極めて沈衰して、住民なども頻繁に換つて了ひ、これが復興の爲めに特に自身の來任するのを待つて居たのではあるまいかとも思はれて、如何にも同情を深ふした。生の着任の感慨は實に悲痛なものであつた。戰禍の流亡の悽慘を憶へば、民力の回復の困

難なもの無理はない。残忍なる鐵蹄の蹂躪に遭つた瘡痕は容易なことでは癒えまいと思ふと、坐るに憚然たるを禁じ得なかつた。

法 筵

目に觸るゝもの一として戦争の慘禍を物語らぬものはない。泥に塗れて横はる戈には血が紫に腐り、地上に散つた鏃にはまだ生々しい紅の血が残つて居る。四野の悲風を聴くのみ人烟寂寂、連旬の陰雨に對して鬼火熒々。草はち切れて色黄に、地の色の赤からぬところは無い。林寒き夕日には鴉が土堤へ降りて野垂れ死んだ者の腐肉を探し、露冷かな荒原には蔓草が河邊の戰死者の白骨に絡つて居る。加之、昔から大戰亂の後には凶作が續くといふ通り、口に入れる食物は殆んど絶えた上に、惡疫が非常に流行して、餓ゑた者が日々山へ登つて木の根、草の根を採つて腹に充てる。彼方にも此方にも餓死者の葬が列を成して通るのであつた。晝夜悲しく叫ぶ陰慘な聲を聞くと、鬼が食物を探し廻つて居るかと思ふばかり、山野に號哭する者はいづれも戰死者、餓死者の魂を呼ぶ聲である。何たる悲惨事ぞ、億萬の生靈はみな黄泉に入つて、

毒海の中に沈んだのであらう。何人か此の無告の幽魂を慰め、三千大千世界の苦患を救ふものぞ。情けないことだ。生は一大追悼會を思ひ立つた。屬僚共に命を下して會場の設備をさせ、夥き供養の品を供へ、日を卜して孟蘭盆の大施餓鬼會を啓建し、一般戰死者の幽魂を得脱せしめることとなつた。その日は領内の僧侶幾十人を請して廣く法輪を轉じ、山の如く食物を積んで餓ゑたる人々に供養した。法要は實に莊嚴を極め、潮の如き讀經の梵音に隨つて天花飛舞し、七寶莊嚴の壇上には瑜珈の寶座を現出するかと仰がれる。地獄の湯池の水も爲めに澄み、劍の火焰も爲めに滅して、修羅の幽鬼も悉くその極苦を遁れ。森羅萬象一佛慈顔を瞻て、地獄の變相も頓に寛ふされ、戰歿、餓者の靈共に永劫の苦輪を脱し、宿世の惡業忽ちに滅滅し、無慘なる沈魂畢く煩惱の毒海を渡つて涅槃の彼岸に上り、普く覺路に登らんことを専ら祈願したのであつた。此うした大功徳の盛なるは、やがて靈鷲山れうじうざんの拈華會上にも感應さるべきか、それは邈として想像揣摩の限りでないが、茲に圖らずもこの選佛場に於て、生は一大歡喜事に相遇したのであつた。

この法要に集まつた多くの僧侶の中に一際目立つた一人の偉大漢が交つて居た。龍は魚穴に

藏れても頭角常に非ず。鶴は雞群に立ても羽毛自から異なる。何處の巨刹の高僧か、衆僧を掻き別けて生の座席に近づき、朗かな聲で言葉を掛けたものがある。よくよく顔をみると、何ぞ知らんこの高僧こそ生が一日として忘れたことなき當年黄衫の俠客馬遜その人だつた。

『ヤアあなたでしたか。これは誠に申譯もない——實はわたしが及第して任官された際に直ぐにお知らせをいたさうと思ひましたが、何時の間にか行方が判らなくなり、丁度莫耶の劍が延平津で神龍と化し去つたやうに失望して、十年の間そればかりを遺憾に思つて居りました。曩には志を同じうし道を同じうして交つて居たのに、今日また突然お目に掛つて見れば何としたこと、言を異にし服を異にし、全然浮世を捨て、居られるには、何と申してよいか判りません。一體どういふわけで佛法に入られたのか、出家されるには何か理由がありません。どうぞそれを詳しく聽かして下さい』

馬遜は話せば驚くだらうから、話すまいとは思つたが、親友が折角尋ねるので

『ナニつまらない事だつたのだ』

といつて、驚くべき事實を物語つた。

『わしの遠縁に當る奴がつまらぬことから牢へ入いたのが因ぢやつたが、妙なことで他人に疑心暗鬼を起され、無暗に騒ぎ立てるものがあつた爲め、無根の事實が事實にこじ付けられて、つまり瓜田に履を納れたのが瓜泥棒と見做され、釜の塵を捨つた顔回が子貢から摘み食ひをしたと疑れたやうなものぢやつた。陳平が嫂を盗んだとありもせぬ名を謠はれ、曾子が友人のしたこと、間違ひられ殺人の悪名を被たやうなものでな。その騒ぎで下らぬ出入りをし、雞の餌を雀が啄いたやうな喧嘩で蚌の争をやつて居る處へ、恐ろしい鴟が嚇つとやつて來ましたぢや。時の役人が酷い悪黨で、わしの遠縁の奴が可なりの富豪だつたところへ目を付け、好い加減な理由を付けて有無をいはず拘引し、關係者を手當り放題に牢へ打ち込んで慘酷極まる拷問に掛けたものぢや。引かれた嫌疑者共の家族親戚や、その他の罪人共が、あの手でやられては敵はぬと賄賂を包んで穩便を願へば、酷吏の吏の奴はますます誅求して厭くことなく、賄賂が少いと忽ち在檻者に手枷足枷首枷を掛けぎう／＼責めながら、一方で更に限り無くゆすりのやうに金を強要し、何程出したら罪人が赦されるやら見當も付かない。それどころか役人共の方では收賄の口を減す爲めに、囚人共ば牢腐れにしようと企んで居るといふ、實に酷い奴もあつたも

鴛樓の流血

馬邊の眼は次第に興奮に耀やくのであつた。

『黙つて居れば何時になつても止めおらぬ。弱い者虐めも程があらう。鄒衍が無實の罪で牢へ入れられた時には六月に霜が降り、東海の孝婦竇氏が罪なくして仕置に遭つた後は三年の間雨が降らなかつたといふ位ぢや。己ツ、ぐツと癩に觸つたわい。これも俺が持つて生れた氣象、耳畔風生じ鼻端火を出した。むか／＼ツとするともう容赦はならぬ。勘忍袋の緒が切れた。わしは風の如く單身、百雉（一雉は長さ三丈高さ一丈）の城壁を飛び超へて、彼れ貪吏の屋敷へ躍り込み、十年磨礪の一劍を抜いて斬れ味を試みてやつた。勿論目にも止まるものか。影白虹の如く閃めいた時は、彼奴の魂魄は忽ち翠帳の裡に迷ひ、劍光赤電を流すところ、血は鴛鴦の樓に濺いだ。憎い貪吏め首は枕の下に落ち、寢室一面に濁血の海となつたわい、痛快ぢやつた。

朝廷大官の暗殺といふので、其筋では血眼になつて狼狽した。天子からは詔が下る朝廷から

は嚴重な逮捕命令が出る。お膝元に非常線を張り、全國に逮捕状が廻つて、津々浦々蟻も這出ぬ非常網が行き渡り、都會地では大金の懸賞で刺客逮捕を激勵するといふ物々しさ。何處の隅へ行つても目明かし御用聞が梟のやうな目を光らせ。立廻る先には追手がぞろ／＼跟いて来る。函かん谷關かきんの孟管君まうしやうくんではないが、雞を鳴かせても通れるものではなかつた。河橋の渡しで瑯邪王らうやわうの従者そご宋典そうてんが渡守の役人を誑かつたやうな場合も度々あつた。俺は一旦黔中ぎんちゆう（湖南の辰州、常德、永）へ落ち延び、廻り廻つてこの山東へ出て來ましたが、その間屠場の人足になつたり日傭取りをしたり、時には行商人の眞似もする。出來るだけ姿を晦ましたが、どうかすると顔を知つた奴に出くわしてひやりとする。橋畔へ立ち寄れば友人の豫讓よじやうの顔を見知つたものがあり、市中へ出れば女子供の韓康かんかうの顔を覺へて居るものがある一寸の油断もならなかつた。

これではどうもならん、蒼蠅そうじやうと思つたので、すつかり家屋敷財産を分散して敝履の如く棄て、了ひ、一切浮世を離れて此の通り坊主になつて了ひましたぢや。でもまだ殺伐の血が此の腕に流れて居るでな。五戒も十戒もあつたものかい。光冷冽たる匕首が今でもお経箱の底に仕舞ひ込んでありますわい。血糊の生々しい仇の髑髏が禪床の上に擲つてある次第なんぢや』

馬遜は話し終ると、如何にも心地よげに胸を開いて朗かに高く笑つたが、聴く方は生を始め會衆舌を咋つて驚くばかりであつた。

『ヤア成る程驚いた、一世の快男子の忠肝義膽ですな、普通人の出来ることぢやありません。此う見かけたところ表面は如何にも冷靜でゐて、而も胸心熱血が溢れて居るとは誰も氣が付きますまい。今の事實談は全く恐れ入りました。』

祥 婚

一同の焼香が済んで法要が畢る。參詣の人々は順次に席を離れると、本堂の莊嚴を卸して本尊様は一人ほつちになり、獅子の寶座も寂しくなつてたゞ慧劍の光を留めるばかりとなつた。生と馬遜とはそれから庫裏の座敷へ引揚げて、莫逆刎頸の親友に邂逅した喜びに桑落の美酒を酌み、改めて一別以來の言葉を交はした。公の意味を離れた差し向ひで、鹿爪らしい禮儀は抜きにし、大官と坊主と水入らずの親しみ、半僧半俗、形の上の相違などは眼中に無い、客も主人もなく、君、僕の掛け構ひない昔のまゝの睦しさで、心行くまで語り合ふのであつた。傍の

者共は巡撫閣下の不思議な客との廻り合ひを見て、たゞ呆氣に取られて居るばかりであつた。

その後間もなく迎ひを出した愛姑も到着し、喜びの上に喜びが重なつた。生は曩に愛姑へ手紙を出し迎ひの使を出してから、ひたすら到着の日を待ちあぐみ、閨の寂しさを感じることもますく深く、玉宇光寒く、會て霓裳に向つて月姉を邀へるの心切なるものだつたが、今や銀河影淺くして、織女星の羅襪がいよ／＼接近して居るのであつた。町の役人が息急ぎ、駆け込んで『只今奥方様のお車がお着きになりました』と注進して來た。やがて門番が、『お見へになりました』と奥へ知らせた時は、も早や愛姑の車は玄關へ着いて居て、美しい車の窓掛けを掲げて靜かに降り立つたところであつた。あゝ生は俠骨の友と美貌の妻とを一時に得て、宛も蔡侯の二箇の玉佩を両手に握つたやうなもの、たゞ恍乎とするばかり、馬遜と愛姑を迎ひ入れて、鞞かた起が雙環を着けたやう、如何に安心し如何に嬉しかつたことであらう。

友とは意氣相投じ、妻とは合歡の喜びあり、岸柳初めて舒び、王昌齡わつしやうれい、高適かうてき、王渙之わうくつしの三人が歌の賭をしたやうに、旗亭に上つて伸びやかに歡を盡くし、嶺梅乍ち放いて、官邸の奥座敷に悠々と詩を題して、十餘年の勞苦が茲に始めて酬ひられ、眞に我れに還つたやうな心であつた。

謝墅の春風を披いて絃管に追陪し、庾樓の秋月を賞して江山に嘯傲す。身分は高く人は優雅に、誠に清らかなその樂みは、俗界の思ひ及ばざるところ、人物の優れた人だけに團樂は實に美しいもので、世間凡庸の徒の間には見ることの出来ないものであつた。

しかし愛姑と寶生の今日の成り立ちを遡つて見ると、雨宿りの當時から單に二人の仲の戀愛だけで結合したもので、公然と結婚の禮儀手續きを取つたものではない。いはゞ野合に過ぎなかつたのだ。すべてが缺くるところなく満足を得たに拘はらず、僅かにこの點だけに遺憾がある。馬遷は此ういつた。

『苟も人間と人間との接觸交渉には、正しい軌常といふものがなければならぬものぢや。孟子も友を取る必ず端しといつてある。妻を取るも同じことぢや。詩經にも媒に匪れば得ずとある。俺は幸に此うして親交を得て居る仲ぢやから、これは一ツこの縁を全ふすることを考へよう。

甚だ無能な俺ではあるが、媒酌人として立合つて婚儀の式を擧げてはどうぢや。』

『それは誠に忝ない』といふので、遷は直ちに易を立てゝ見ると、文定るこれ祥、大いに吉の卦が出た。如何にも長い間和愛の間ではあるが、爰に改めて新郎、新婦といふことになつて、芽出

度く婚儀を擧げることになつた。

そこで馬遷が媒酌人兼婚儀委員長格で準備を始め、萬端忽ちに整備した。實に大仕事だが、秦の始皇が石に鞭つたやうに取り急ぎ、愚叟の山を一時に移して了つたやう、壺中の草木は忽ちに芽を吹き、一瞬間にして春色燦然たる裝飾が出来きた。環海上の樓臺須臾にして市を成す。官邸の中は蜃氣樓を見るやうに美しく飾られた。

當日の華やかさはまた譬ふべからざるものであつた。門には招かれて來る祝賀の賓客が馬乗物の市を爲し、座敷には美しく並んだ少女達が露の如く袂を連ね、孔雀の屏風を立て、金雞の帳を垂れ、篆香裊として祥烟就り、樺燼團として瑞雪を成す。やがて山海の珍味が備へられて、芽出度き成婚の式は擧げられた。龍笛鸞笙の劉亮たる鈞天の樂が奏されると、燈は一段と明かく掲げられて、五色の雲中に絳鵲影を照出し、銀海の鼙鼓の音が響くと、花は萬年の枝上に開いて、一對の新郎新婦が靜かに定めぬ席へ現はれる新郎は俊雅なる風丰容儀まことに一箇の仙郎の如く、新婦は眩ゆきばかりの晴衣に脱け出るやうな美しい濃化粧、神女の降臨かとあやまたれる。玉山彩を映じ珠浦輝きを聯ね、さすが顯縉の夫婦だけに、得も言はれぬ氣高かさがあり、高貴の

人の結婚式だけに、美しさ華やかさはまたと見ることも出来ぬほどのものであつた。四海浪靜かに、好夢方に長ふして良宵未だ短からず。儀式が濟むと床入りになる。牀は翡翠を聯ねて居然として乍ち新人に對し、褥は芙蓉を隠して却つて是れ舊物に逢ふ。烟は深く玉煖かに、露重く花濃かなる紅閨裡の歡洽想ひやるべきものである。此の時の綽約たる柔情は千金にも買ひ難く、昔日の愁魂怨魂はさらりと投げ棄て、了つたのであつた。

覆盆の水

間もなく愛姑は懷妊して月々に身體が重くなり、やがて月滿ちて玉のやうな男の子を産んだ。父に似ても母に似ても立派に生れないわけではない。瑞氣は寶家の上にたなびくばかりであつた。ところが母親愛姑は、初産であつた爲めに乳房が細く、幾日経つても思ふやうに乳が出ない。赤ん坊は晝夜啼き通し、腹が空くと乳を探すやうに顔を動かすのが慘らしくて堪らない。紫の袍を脱ぎ棄て、見ても、男は悲しい、乳房を當て、やるわけには行かぬ。たゞ抱き上げてあやして居るばかりでは、赤ん坊は饑しくて堪らぬだらう。けれども初めて親となりわが子の顔を

見た嬉しさと、二人の愛の結晶に對する感情が小さき生命に集中されて、可愛くて、舐め乾かすやうな有様である。何とかしてこの子に充分乳を遣る方法はないものか、適當な乳母がないかと、方々候補者を物色して居るのであつた。

さうして乳母探しに夢中になつて居ると、何たる惡縁か、突然曩に離縁した先妻に出くわした。一旦泥溝の中へ棄て、了つてから、何處を何ううろ付いて居たものか、昔日の覆盆の濁水が流れ、この土地に現はれ、乳母募集に應じて洒々としてお目見へにやつて來たのであつた。寶生が待ち構へた乳母候補者を呼んで會つて見ると、身装顔色こそ多少は變つて居るが、擬ふ方なき離縁した先妻だつたので、その駭きは譬へやうない。その姿を見るさへ苦痛に堪へなかつた。世の中程判らぬものはない。人間は實に何處に誰に逢ふか判らぬものだ。あゝそれにして一旦故あつて去つたものが何として、態々こゝへ來なくともよささうなものではないか。

女が此うなつたといふのは、當時姦通した後の夫の某といふ者が恩赦に遭つて歸郷することになり、同伴して往つたまではよかつたが、歸ると直ぐその夫は病氣して了つた。その夫の死

ぬ少し前に男の子が生まれたが、二三ヶ月の後にはそれも死んで了つた。二夫に事へ、女の立場を滅茶／＼にしたばかりか、僅かの間にそれにも死別れては全く寄邊なく、どうやら残つて居た色香も段々凋れ、碌な男は相手にしてくれず、忽ち全くの天竺浪人になつて了つた。持つて生れた病だから致し方はないが、我儘の限りを盡し、散々墮落の淵に沈んで了ひ、後家を立てゝ居るなどと人には吹聴しても、到底身の潔白を守るなどいふことは出来る女でない。たゞ現在では差し當り飯が食へぬところから、乳母にでもならうといふ氣になつたまでであつたのだ。隻馬雙鞍、仍て喪林の嘆を發し、一瓜兩蒂、徒らに蔓を抱いて歸るに勞す。多くの男を手玉に取つた報ひは、あはれ一人身で世に棄てられねばならなかつた。而も當時寶生が不遇に困つて居ると、後足で砂を掛けて往きながら、今堂々たる身分になつて立派な生活が出来るやうになると、尾を揺つて憐を乞ひに来るとは何たる慚しらすの女であらう。

『どうも面目ありません。あの節は何とも申譯ないことをいたしました。どうぞそれは水に流して面倒を見て戴きたう御座います。あの時はわたしの本心から申し上げたわけではなかつたんでした。馬鹿なわたしのことですから、どうぞ御容し下さいまし』

何たる圖々しい女であらう。しかしどうも手の付けられぬことになつた。花が落ちれば枝の上は美しく榮えるが樹の根の方はらちもなく汚くなる。譬へば水の流れでも山の中は清いが山から外へ流れるに水は濁つて了ふ。この女を責めることはまた自から自分の家の不名譽を曝すやうなものでもある。生は全く閉口して了つた。

が、生は元來寛容な性質だつたから、忍びぬところもあつて、深く舊惡を追及することはしなかつた。愛姑もさつぱりとした氣立だから、愚痴つほく舊い怨を繰り返す心は露程もない。嫌だといふものなら無理に居て貰ひたくはなし、置いてくれといふものなら快く置いて遣らふといふのであつた。けれども薰と菡とは同じ器には盛られない。涇水と渭水とは自から流れる場所が別である。一方は散々自墮落に身を持ち崩して生れた家の名譽まで傷ける毒婦だし、一方は飽くまで玉の如き身を守つて、遂に今日の榮華に引上げられた貞女である。鸞と鴉と程の異ひがあるのだ。似ても似つかず、風馬牛相及ばずで、到底しつくりと融合しさうな氣遣はない。たとひ棄てられずとも先妻の如き毒婦が矢鱈に榮へさうな筈はないのだ。當時は立派な家の娘と生れながら、斯かる賤しいものに成り下つたのは是非もない。置いてやるにしても家族同等

の待遇をするわけには無論行かぬ。

生は兎も角もこの女を乳母として置くことにしたが、別棟に住はせて食物は運んでやることにしてあつた。しかし苟くも大事の長男に乳を吞ませる女だから、全然奉公人並みの取扱ひは出来ない。相當に待遇を良くして女中まで付けてやり、平和に老後を養へるやうにと計らつてやるのであつた。

道傍の敗柳憐むに堪へずだ。どうならうと放つて置く外はない。陌上の殘花何ぞ惜むに足らんだ。開かうと散らうと任せて置くがよい。寶生夫婦は少しも干渉がましいことはせず。出来るだけ氣儘をさせて居た。女としては實に願ふてもなき仕合せであつた。けれども不自山のな生活も、無聊に苦しむやうになると、また好からぬことを考へたがる。表の方を見れば如何にも勢威赫赫として貴顯大官の往來絶まなく、時の天下に勢を得たものは羨しい。しかしそれも今の身には一向關係がない。贅澤にして貰つても物足らぬのは獨り寝の寂しさだ。男といふものゝ顔さへ絶えて久しいもの、表の榮華に引き較べると天と地の相違だ。考へて見れば情けなく嫉ましく、獨り悔しいと思ひ始めると限りなく考が悪い方へ外れて行く。

媒 孽

蛇の心は足ることを知らない。蠶は何時も尻の針に毒がある。女はまたそろ／＼舊の病が萌して來た。生と愛姑の仲の好きを見ると嫉妬が起つて堪らない。今の身分を忘れて生に對する野心を抱くやうになつて來た。ひねくれ根性も直らない。時々むしやくしや腹で衝きかゝる。

劣情の抑制が出來なくなると、生に對しても屢々嫌やな耳刮りをいひ、堪らなくなると、無禮千萬にも怪しい科を作つて生に寄り付かうとするのであつた。雪中に芭蕉を書いた繪も、繪で見ればまことに清涼なものだが、火の中へ蓮を栽ゑたのでは熱苦しくて堪らないだらう。生としては女の狀態を見ても問題にせず、馬鹿々々しくて手を出して見るやうな氣にはなれぬ。愛姑としては夙に盈つるも虧くるも皆天の定めと曉つて居るのだから、少しも怒を含むやうなことはなく、特更に二人を隔てようといふやうなさもしい量見は露程も有たぬのであつた。

ところが獨り承知の出來ないのは馬邊であつた。食客の身分も何もあつたものでない。生の家庭の幸福に就いては我が事のやうに心を碎き、何かと注意もすれば苦言もいふ。女が來た時

から、これは悪い者が來たと睨んで居たので、密かに豫防線を張つて居たが、近頃の素振を見ては黙つて見ては居られない。事毎に暗に制壓を加へ、折角言ひ寄らうとするのを邪魔する。その度に乳母が口穢く食客の老法師を罵る聲が聽へる。馬邊は殆んど腹に据ゑ兼ねて、己れ、思ひ知らしてやる覺えて居れと密かに憤りを衝むのであつた。女の方は更に怨みが深い、骨に徹し腸に刻んでくやしがつた。

『あの眼の中の釘を抜かないうちは、わたしのこの心の毒は取れやしない』

女たげに執念は怖ろしい。すべて禍は衽席から起り、騒動は蕭牆に起るものとなつてゐる。たま／＼生の家に甚だ善からぬ足輕がゐた。初めのうちはなか／＼善く立ち働いたが、性質が狡猾で生意氣で、主人の命に負くことも屢々あり、つまらぬことで恩を仇にするやうなこともある。危難に臨む襤褸の中の幼主を助け、山陽に隠れて盛り立てたといふ李善りぜんのやうな足輕とは天地の相違だ。寧ろ逆に行く奴、それで見榮坊で、人に媚びることは稚子の秦宮にも似た厭ふべき奴だつた。竊かに女共には近よつて淫みだりがましい振舞を耻とも思ふ奴ではない。この奴が何時か乳母と互に相接近するやうなつて了つた。奴から女に言ひ寄つたのであらうが、女

の方は折しも饑ゑ切つて居た際だから、忽ちにして醜類同志の戀仲は成立して了つたのだ。

けれども乳母の住居と足輕の部屋とは遙かに隔てがあるので、逢瀬はなか／＼容易でない。牆を躓えては構曳を續けてゐた。女の方は殆んど狂態だ。男が來る頃になると欄干の彼方此方を廻つて通る人の姿を眺め、夜は戸を半開にして忍び寄るのを待ち、夜が明ければ化粧をした後は午近くまでも寢込んでゐる。花を折るといつては男の部屋へ近づき、月を見るといつては男と手を執つて巫山戯けてゐる。草に襯して裊となし林に依つて幄と作す。枕紋面に印す野鴛睡を食ふの時、粉漬唇を沾ほす浪蝶春を偷むの候。男に對す乳母の醜態は斯波の淫女媚猪びちよの如く、同時に馬邊に對する鬱憤、寶生夫妻に對する嫉妬は狂犬の如く、遂に二人は主家に對する反噬の牙を磨くのであつた。

『どうしたら俺達二人は何時まで此うして楽しめるだらうかね』

『そりやア方法がありますよ。此うしたら旨いものぢやありませんか』

二人は果して何事を企らんだのであつたか。

彼等二人は身慄すべき大それた悪計を協議するのであつた。主人寶巡撫を始め馬邊をも共に

重罪に陥して、官の手で殺して了はうといふのである。そつと司獄の廳へ出頭し、全然無根の事實を何かの廉へ結び付けて謀叛の企があると訴へ出で、度々密告書を投じたら、無論疑ひは起り直ぐ問題になる。さうなれば此方のもの、鼠にさへも牙がある。奉公人が企だことでも見事大獄を起すに相違ないといふのであつた。何ぞ知らん牆に耳有りだ。誰れにも知れまいと思つた二人のこの大隠謀は盡く漏洩して了つたのであつた。

第八卷

是より先、この乳母には一人の女中が付けて置かれたが、ある時何かの過失から非常に毒付かれた上に酷く撲り付けられ、家中を引摺り廻して折檻するなど酷い暴状を加へられた。それ以來乳母の酷使がますます甚だしく、僅の間も身軀を休めさせず、非常に意地悪くばかり仕向けるので、女中は怨み骨髓に徹し、何時か恨みを晴してやらうと狙つて居た。するとある晩、人の寢鎮まつた夜半過ぎ、乳母の部屋からひそ／＼話の聲が聽へる。女中は拔足して忍び寄り、何事かと耳を立てると、一人の男を相手に怖るべき大隠謀の協議最中であつた。逐一それを偷み聽いた女中は、夜が明けると早速母屋へ往つて昨夜密會の事、主人を罪に陥さんとする隠謀の内容、悉くを詳細に訴へたので、一家は忽ち大騒動、上下驚駭、昔共工氏ききゆうしが怒つて頭を不周山まゐに觸れた爲めに天地が摧けたといふが、寶氏一家の運命は果して如何になり行くかと手に汗を握るばかりである。女中も自分の口から思ひも寄らぬ大騒動を起して、却つて身に殃が降りはせぬかと蒼くなつて慄へて居た。

是に於て老俠馬遜は髮冠を衝くばかりに憤慨した。怒氣奔雷の如く、忽ち劍の袋を拂ひ、すつと立つて振り被つた勢は、地を斫るの聲を聽くばかり。

『己れ生かして置けぬ奴だ。毒蛇は殺せ癩は育てるなどはこれだ。家に仇する憎いしれ者、此うして内輪の害毒を禳つて遣る。厄鬼の咽を絞めるのはこの時だ。そこ動くなッ』

紫電一閃鞘を迸しつたと思ふと、ヤツと斬り下した腕の訝え、女の首は皮も残らず血烟立つて地に落ちた。神威の激發するところ妖孽えうげつは忽ちに肅清された。

『オ、叩つ斬つて了つた。此奴程の惡物はなかつた。梟けう(生れて母を食ふ鳥) 獍けい(生れて父を食ふ獸) よりも酷い奴。まだ此うしても足らぬ奴なのだ』

同時に隠謀の相手の足輕も打ち斬つた。死骸は外に持ち出して野原に曝し、鳶や鳥の食ふに任せ蟻の争ふに任せて了つた。

屋内の妖孽はこれで全く滅びたが、不圖すもそれが導火線となつて、非常な大問題を惹き起して了つた。この騒ぎが何時か世間へ洩れると、主人の罪惡を密告せんとした召使が殺害されたといふやうに訛傳され、さなきだに寶生の異常の榮達を嫉視する小人共が、それに尾鱗を付

けて吹聴し、寶生の家には建文帝の子が匿まれてある。やがてはその幼児を守り立て、今上百年の後天子の位に即けやうと企て、居るのだといふ、架空の筋を乳母の隠謀の内容と結び付けて、成祖皇帝に彈奏した。

これは國家としての大問題である。朝廷には俄かに大會議が開かれた。先づ寶生を獄に下して罪蹟を追窮し、嚴重なる處分を下さねばならぬといふことに一決した。しかし事實一點の曇りなき寶生は、此の最大危機に臨んでも少しも狼狽しなかつた。虎の尾を履むも驚かず、蜂の群り刺すも懼るゝところなく、天子の逆鱗、群臣の誹謗を冷かに見て、迅雷柱を破り服を焦すも眉一筋動かさず靜かに書籍に目を曝し、大敵河を渡るも悠然として碁を打つて居た謝安の沈勇にも似て、すべてを天の命に任せ、吉凶共に毫も喜憂の色を動かさなかつた。

愛姑もか弱い女とはいひ、堂々たる貴顯の妻として少しも亂れた態度は見せぬ。

『刺客聶政が名を揚げたのも姉の義烈の爲でした。伍子胥が吳へ逃げる時追手を遁れたのも瀨女の賢明がまつた爲です。苟も人間として心に愧るところなき以上、たとひ死刑も懼れませんか。あなたと共に冥途へ行くならば、一族共に誅されても少しも厭ひはいたしません。』

寶生を拘引の押使が來た時も、涙一滴滲さず見送つたのであつた。

斯くて寶生は囹圄の人となり、屋敷には官の手が下つてそれ／＼處分される。天子の勸氣に觸れた以上、この後果して如何に成り行くか全く測り知ることが出来ない。宛ら漢の李固、杜喬が取り潰されたやうな、晉の郤氏、欒氏を討ち滅されたやうな大騒動を目の當り見る凄じさであつた。

貽 緘

當時翰林院の會榮等は、生の冤罪なることを知つて居たので、生の爲めに大いに辯護し、處置枉屈の不當を鳴らし、寶生を失ふことは事苟くも國家に關すること、獨り寶生一人の問題ではない。國民の安危にも係はる問題だから、特に明鑒を垂れて生の一族を助けられたいといふことを屢々上表したが、朝廷ではそれを握り潰して何の沙汰もないのであつた。

そのうちに生に對する吟味は追々進み、いよいよ家宅搜索をして實證を擧げるといふ時になり、壁の間まで隈なく捜査して見たが、嫌疑に關する證據は塵一筋もなかつた。建文帝の若君

云云の事實は跡方もない嘘であることが瞭かに判明した。

是に於て成祖の疑も漸やく霽れて、入獄中の生は直ちに赦免となつた。聰明なる成祖は無實の生を苦しめたことを非常に氣の毒に思はれ、いづれ何分の沙汰あるべき旨を傳へて直ちに歸宅を許されたのであつた。猥りに天地の常を覆すといふことは出来ない、非道を網は必ず開かれる。生は鄒陽が窶獄を赦されて梁の孝王の上客となつたやうに、韓安國が一旦疑晴るれば漢の武帝に改めて取り立てられたやう。依然として朝臣としての優遇を受けることゝなつた。

生は今回の事件に就いて拘引される當時から、獄中に在つても一日として馬遷の安危を氣遣はぬ日はなかつた。やうやく赦免の身となつて歸宅し、先づ第一に馬遷はと尋ねると、騷動のその日のうちに突然行方不明になつて了つたといふのであつた。鶴杳としては林空し已に塵中の迹を絶す。雲は山僻に深うして石上の魂を尋ね難し。全く何處を尋ねべき手掛りもない。その部屋へ入つて見ると、只一通の手紙が書き遺されてある。開いて見ると左の如き數行の文字が認められてあつた。

謂ふに夫れ百二の秦關も未だ仕途の險に及ばず。三千の弱水も宦海の危きに如くはなし。

案牘の形を勞せしむるが若きは何ぞ斧斤の性を伐るに異らん。夢如し未だ覺めずんば且らく忽忽の黄梁に隨ひ。幾くは若し早く知らば蕭蕭の白髪を待つこと莫れ。僕や曾て黄石公の語を記す、願くば赤松子の遊に従へと。傀儡場中、沈迷未だ久しからず。骷髏隊裡、解脫難きに非ず。窃かに先知あり、敢て豫告を爲す。君は本瑤池に酒を掌り、姑も亦閨苑に花を司る。偶天上の辜愆を干し、暫らく人間に謫して磨折す。他日劉安の雞犬皆仙と成るべく、今時の鮑靚夫妻俱に宜しく道を學ぶべし。

嗚呼、鶴は華表を辭して猶ほ警語の能く聞くを存し、鳳は丹山に返つて復た德輝の覽るべきなし。馬遷の消息は杳として判らなくなつた。けれども嵇康と呂安の仲のやうなもので、千里の遠きと雖も、あの老俠はまた何時ひよつこり逢はぬとも限らない。天に昇り地に入つたか、探し廻つて尋ね當てられる人間でもなし、水の上山の頂を探しても無駄骨なことは判つて居る。波濤淼淼として、何時まで待つても徐福の舟が見へないやうなもの、烟霧霏々として、或は張超のやうに市中に隠れて居るかも判らない。或はまた此の世を去つて石曼卿のやうに芙蓉仙主となり、白傅のやうに靈芝宮の仕人になつて了つたか、虎龍夜合す黄金鼎、鸞鶴晨朝す紫綺裘、九轉

大還丹を飲んで不老不死の人となつたか、一朝穀類の食を斷つて地上の遊仙となつて了つたか。

黨 争

爾來生と姑とは金を鑄、繪に書いて馬遷の像を居間に掛け、朝夕香を焚いて恩に酬ひ、春秋二季には祀を行つて、到れり盡せり、心から追懷の誠を竭すのであつた。そして馬遷の言ひ遣した金言を常に心に銘じ、早く世間の煩累から遁れることを願ひ、官海生活の桎梏に等しいことを思ふ毎に、何うかして勇退の機會を得たいと考へて居た。たゞ成祖の信任ますく、渥く、恩寵日に深きにも係はらず、これに對して何等酬ゆるだけの功勳を顯はさぬのが甚だ心苦しく、爲めに權臣としての榮華に戀々たるわけではないが、心ならずも廟堂を退かず、時機を見て居るのであつた。その意味をば馬遷の思惑に遺憾のないやうに、特に山靈に告げて明かにしたのであつた。

その後生は特に詔命があつて江、淮地方の鹽、糧食の督理を命ぜられたが、任に赴くや、從來地方民を苦しめて居た猛虎の如き惡官吏は悉く逐ひ拂ひ、屬僚の私曲を戒しめて秋毫も官の

貯藏に指を染めることなからしめ、凶歳には租税を薄くして、飽くまで民力の休養に力め、無暗に壯丁を苦役した弊を除いて、一般に皇恩の優渥を知らしめるやうにした。而も自己の身を持すること嚴正に、自ら範を示して屬僚を導き、人民に神と崇られて居る龔遂、黃霸の徳政に倣はんことを心掛け、公に奉じては飽くまで浩潔に、民の父母と慕はれた杜詩、召信の撫育を學び、天子の威徳を普ねく民に徹底したので、生の地方官としての名聲は非常なものであつた。殊に民福中心で治に臨んだので、管下人民は舉つてその徳に懷いたのであつた。

その當時の中央地方全體の政情を通觀するに、成祖の所謂靖難以來、刑罰は重きに失し平和がしばらく續いたので法網がますます嚴勵になり、繁文縟禮と、刑罰の苛酷とは殆んど忍びざるものであつて、爲めに義士、忠臣にして獄へ投ぜられたもの多く、貞妻烈女も身を賣らねばならぬといふやうな悲慘な現象が續發した。隨つて收斂もはげしいから、民力は衰へて食ふに困る者が多く、矢鱈に罪人を製造するので、九族悉く屍を横へるといふ慘劇が屢々行はれた。怨を飲んで無實の刑に殺されるもの、憤慨の餘り自殺するもの、流丹碧に化して血柱鶴を染め、玉を葬り香を埋めて魂芳草に依るといふ有様であつた。

生は常にこれを見て苦々しくて堪らない。充分調査研究の上、遂に刑を緩にし、徳を以て治めねばならぬといふことを上書した。盛代に處して良臣たるものは、その責任として天子の統治を補弼し、弊政を改め、善治を敷くことに力めねばならぬ。敢て今の聖朝の政治に弊政なしといふことは出来ない。これは聖明の批判を待つ迄でもないことだ。茲に誠心誠意明主の恩に酬ひん爲めには、廟堂權臣の鼻息を窺つて因循すべきものではないといふのが生の意氣であつたのだ。

當時の朝廷の内部を見れば某某等甚だ善くない人物が蔓つて居た。暴威を揮つて民を虐むこと猛虎よりも甚だしく、貪婪飽くことを知らざる餓狼の如き徒輩である。儒教の仁義を看板にしながら擅に無辜の人を殺し、菩薩戒を受けて慈悲の信仰を喋々しながら、世の禍になる行ひをしてそれを禪機だと言ひくめる。斯くの如くにして四海兄弟の骨肉を惨害し、國家の重きに任ずべき天子腹心の權臣が毒を流して居る。狗黨の如き輩が官位を笠に被て、權力を悪用して堯を吠える犬のやうに良臣を讒し、鬮茸たじようの小人共が官威を私して盜跖たうてきの先棒を振る。豺狼の徒が志を得て政府の要路を占め、魍魎共が誰れ憚らず白晝人を惱ますといふ有様である。生は

見るに堪へなかつた。彼の鯁骨は腕に鳴つた。これ等の輩の跳梁を抑壓せねば、到底公明な政治は期せられない。どうしても官制の大改革を決定して、法制の上から肅正を行はうと考へたのである。曾て先聖の書を読んだのは何事を爲さんがためであつたか、生は直ちに大詔の煥發を請ふて、これ等の奸物共を斬り拂らはうとしたのであつた。生が封事を上るや、果せる哉、物論囂囂として沸騰した。權要の者は嫉心し、奸雄共は切齒した。

『生意氣な奴だ。不都合千萬な男だ』

生は殆んど廷臣の全部を敵に廻したやうなものであつた。田蚡でんぷんの忿を激して滿座汗流れ、張讓ちやうじやうの威を干して舉朝股慄す。頻りに暗中飛躍が行はれ、正義呼はりをする奴は叩き潰せといふ聲が盛んになり、口を經るに隨つて、奸臣組は聯盟を堅くし。群臣對竇生の關係は極端に險惡な形勢を作るのであつた。鼠を焚き殺さうとして却つてその身を焚き、狐を沈めやうとして却つてその身を溺らすといふが、眼前の竇生は恰もそれに近かつた。群臣共は誓つて生を排擠しようといふとあらゆる謀計を廻らし、頻りに謠言を放ち飽くまで生を死地に置かうといふのであつた。

藏弓の時

生の胸中は水の如く、一點の疚しいところがない。これに誅を加へることは何等依るべき理由がないのである。けれども衆口金を銷すといふことがある、群臣は堅い結束を以つて誅戮を加へんことを請ひ。最後にはいよく帝の聖斷を仰ぐことになつたのだが、帝は遂に群臣聯盟の進言を聽かなかつた。しかしながら、天威を干し朝廷を騒した咎めは免れない。姑らく愚忠を宥して遠隔の地に貶謫せよとの勅命が下つたのであつた。生はもとより報國死をだも辭せぬ覺悟を持つて居る。少しも動ずるところはないが、成祖は深く生の人物力量を認めて居たので、彼を殺すに忍びない。一旦懲戒を加へて置いて、兎も角朝廷の内輪揉めを收拾し、而る後に機を見て再び重用しやうといふ考であつたのだ。生は遂に御史の官を削られ、刺史の名簿も改除して、懲罰の意味で遙か僻遠の地柳州の刺史に謫されて了つた。

罪人としての鳥流しではないが、これでもまだ浮世の役人の端くれだ。任に就き僻遠の地の民政長官になつても、依然として君側の奸を攘ひたいといふ忠誠の志氣は衰へず、大いに治蹟

を擧げて再び都に上り、その上で肅正の宿志を遂げたいとの希望は脈脈として抑へることが出来なかつた。随つて州長官としての生は非常に勉めたもので、州民も大いに悦服し、生が行つてからは火盜の災も息み、田畑は青々と茂り、地方の蠻風は淳化し、監獄の跡へ花を栽ゑるといふ有様、屬僚共は殆んど議論などをする程の事件に遭遇することはなくなつた。

けれども中央政府の監督官に對する年年の賄賂は一文も贈らなかつたので、時々愚劣千萬な小事故を捉へては、兎角生の州治に難を付け、いつの年でも生の成績の判定は最下等に置かれるのであつた。顧みれば中央政府の大官から地方長官になつて長い間、生は一定の俸給の外に一錢一厘も餘計な収入はない。而も已に五年の長い間民治の爲めに努力して、僅かに州太守の一級上の位にしか昇せられなかつたのは、餘りに酷い冷遇といはねばならぬ。生は俄かに吳地の菜の味を憶ひ出した。故郷を思ふ心がむらくとして、杜鵑の聲を聴くにつけてもしみじくと役人生活が嫌になつた。

「あゝ俺の仕事はこれでお了ひだ。よして歸らうぢやないか」

「ほんにあなたはさう思召しますか、さうしませう、二人は一所ですものよう御座んす。富

貴に榮えたいのは人情誰れも同じこと、あなたは充分名をもお揚げになり、富貴に榮えても來たのですからね。もうこれ以上と願ふところはありません。高鳥盡きて良弓藏るとも申しますもの、今こそその弓袋に藏れる時で御座いませう。こんな馬鹿々々しい田舎に居ることはありません。では早く辭職のお仕度を遊ばせ』

夫婦が此う話を決めて見ると、實に胸が清々した。袖に清風を剩し襟に明月を餘す。何といふ仲やかな心であらう。南國の土産物などを買い込み、何等役所には迷惑を掛けず、山を踰へ海を渡り、遙々と絶えて久しき故郷へ歸つて來た。

生の過去を振り返つて見ると、官途に在つては、卑しいことをしてまで地位の向上を計るといふやうな下劣は非常に羞じた、いかで狗盜の徒の知己を受けるやうなことが出來やうか。交りは飽くまで清廉賢明な人を選んだ、たとひ牛醫の子でも黄憲くわんけんのやうな賢人があれば、決して見棄てるやうなことはしなかつた。腰は矢鱈に折れぬ、頸筋の骨は強い。肯て長揖して將軍を見るの氣概があつた。大丈夫當に是の如くなるべしだ。天子の爲めに偉功を建てるならば、萬戶の侯ものかはあるが、奈何せん廟堂の臣僚はみな御都合主義のものばかり、徒らに黨争

を激し、善きも悪きも入り交れて、君子黨もあれば小人黨もある。それが年中唾み合つて居る醜態は見るに忍びない。中央に地位を失すれば、成るだけ豊かな地方へやられることを希ひ、何處へ行つても執拗く榮達の手蔓に捉まりたがり、官途の富貴に未練が斷ちきれず、いよ／＼退官際には溜めた金で山でも買つて樂に暮さうといふのが、これが一般の官吏氣質といふものだ。生の如きはこの點に於いて目が味かつたといふべきか、抑もまた時宜に合はなかつたといふべきであらうか。

一 鴈 一 咏

間もなく成祖皇帝は崩御し、仁宗皇帝が即位され、大赦の恩命が下つて死刑に行はるべきも、のまでその恩典に浴し、言論の禍で放逐されたものは悉く召し返して相當に拔擢されることになつた。生の許へも恩命が下り舊友達から出慮徜徉の手紙なども來たが、生は身青山に伴ひ白雲に留められ、悠々たる今の生活を棄てたくない、田舎住居が氣安すくて離れられぬ。

『近頃健康甚だ勝れず、激務にたづさはることは覺束ない。誠に身に餘る恩命感激の至りに存

じますが、此かる有様にては詔命を奉ずるに堪へませぬ。拙者としては無事が何より、氣の向ひた時は著書でもして見やうかと存するので、これから柄にもなく年寄の冷水を試みましても、また再び虎鬚を採るやうな縮尻が關の山、また老妻も取る年のことゝて、皺くちや顔を都の装に飾つて見ても致方はないと申して居るやうの次第。舊友諸君の御好意は誠に有難う御座りまするが、拙者のことはどうぞこのまゝ差し置かれたく、聖上には此のまゝ山野に終らしめられるやう、恩命御辭退の旨然るべく御執奏お願ひ申しまする』

と更に未練なく斷はつた。

それ以後は此處の水、彼處の山、心のまゝに杖を曳き、一觴一咏、伸びやかに幽情を叙し、悠々塵尾の拂塵を揮つて文人達と詩文の舌戦をやり、茶を啜りながら碁を打つて、政治向きの談話は一切お斷り、子供達に詩書などの學問を教へることが唯一の仕事であつた。

昔から立派な人は大抵良き妻の内助の功が大半に居るといふ、古人の美行を見ると多くは賢婦の力が加はつて居る。立派な人間として名を揚ることは容易の事でない。天淑配を生ず豈夫れ偶然ならんやだ。隱棲に入つてからの愛姑は相變らば夫を助けて禮を盡し、召使共をば懇ろ

に勞はつてやり、顯榮時代の華麗な服装などはさつぱりと忘れて、木綿着物で氣輕に動き、髪はぐる／＼巻きにして、珠玉翡翠の髪飾などは見向きもせず。洗ひ晒しで事足るのだから、蒲桃の美錦に用もない。郎は鸞坡に値ふて已に西垣の簡を執り、妾は蠶室に居て猶は南陌に筐を提ぐ。一ツは生來のつゝましい性質にも依るのだが、更にその至性を慎しんで居るのであつた。生は嘗て同好仲間の會を作つて盛んに詩作を行つたことがある。その頃世路のまゝならぬ意味のところを詠むと、何時の作でも慷慨忿激の詞が現はれて居たものだ。愛姑はそれを子供達にも深く戒めるのであつた。

『人様の前へ出たら決して詩が出来ますなどいふものではありませんよ。その爲めに禍を取ることもあるものだから氣を付けなさい。どうかするとその詩で腹を見抜かれますからね。お酒は飲んでも構ひません。氣を引き立てゝ心のむしやくしやを拂ふには誠に結構なものです。けれども澤山飲んではいけません、自分の本性まで無くなすやうでは困りますからね』

子供に教へることも、非常に柔かく、それで深く肯綮を射たもので。その行といひ言ふことゝいひ、宛も昔の老萊子ろうらいしの妻の言葉のやうで、何となく奥床しく津津たる味がある。晉しんの陶

侃の母の聲にも優るといふ評判が到る處籍籍たるものであつた。

寶生、愛姑兩人の大恩人馬遜に某といふ悻があつた。彼の大變動の際馬遜の行方が判らなくなる、其筋では直ちに家族を取調べ、縁に續かるところから馬遜の妻はその際落命して了つた。悻はその血腥い家の中に只一人生残り、れて了つたのであつた。楚の孫叔敖が歿した後のその子のやうに、町へ負はれて出て辛くも命を繋ぎ、任昉死後のその幼兒のやうに、衣には穴だらけの古布子を着て冬の寒天に曝されて居たが、雨瀟瀟たる夕、星落落たる晨、故郷の空の懐しく、舊の友達とも遊びたい。薪を求め粟を求めることが桂や珠のやうに容易でない世の中に、幼なき身に遙々歸つて来て、舊の家に近いある家へ丁稚奉公に住み込んで居たのであつた。生は常にその悻を探し出し、立派に育て、やりたいと心掛けて居たので、馬遜の舊居の近傍を尋ねて見ると、悻はある酒屋に奉公して居たことが判つたので、直に家に連れ歸り、哀れな孤兒を勞はつて養子のやうに可愛がり、稍物の解るやうになると、生自から書籍を執つて學問を仕込んでやつた。實に父であり師であつたのだ。胤こそ違ふ他人の子とはいへ、すべて平等にして我子と同じく養育して居たが、本人も性質に少しのひねくれた處なく、生の悻と兄弟にして並べ

て見ても優り劣りがない位。玉は磨礪を受けて輒ち席上の珍とすべく、芝は培植に因つて即ち庭前に秀づ。この子がやうやく手足が伸びると、熱心に家業を揚げるやうに仕立て、友人馬遜の後を興すことにし、馬氏の姓を名乗らせて、同時に生の財産は二ツに分け、半分はその子に與へ、半分は生の悻に繼がせたのであつた。この十年間養育の骨折りといふものは容易なものではなかつたが、たゞその子の成人を樂しんで、全く勞苦を忘れて居た。これらは生の心掛の一端を擧げたに過ぎないが、以つてそのすべての行を推すことが出來やう。

晩年に及んでは黃老清虚の道に入り、齡六十を超へてからは自然と老衰し、日常すべて道家の法に依つて、窓上には玉女の形を刻み、心靜かに步虚詞の道歌を歌ひ、黃精の陽草を服して益壽の方を盡し、花暖かなる雲房に香を焚いて北斗を禮し、露仙人掌に濃かなるところ朝元の羽服を新たにし、殆んど現實界を遠ざかつていつた。金竈將に成らんとし、臨終の時やうやく近づいたのを知ると、室内に玉棺の用意をさせ、生涯の最高官位御史の烏を穿いて、梅福の靈を蓬萊に迎へ、玉杵臼を壺嶠の雲英に返し、殆んど此の世の人ではなかつたのだが、生は寢起きも平常と異らず、某の日に臨終であると明かに豫知して居つたが、談笑少しも變るところな

く、豫ねて期したるその曉方には、溘然として永遠に現實界を脱去して了つた。

生は已に世を去つたが、後には立派な俸が残つて居て、學問に於いても勇武に於いても、父寶繩祖に優るとも劣るところなく。首席を以つて進士に及第し、位は公卿の班に列して、大いに父の名を揚げたのであつた。而もその兄弟は揃ひも揃つて優秀に育ち、古の薛氏の三鳳、荀氏の八龍の如く、それ／＼その特長を發揮してその身を立て、生に代つて母親に孝行を盡し、官に仕へては天晴誠忠を挺んでた。斯くて瑞鶴鱸を銜んで三臺の高位に登り、靈蛇綬に蟠まつて立派な武將を出したのであつた。それはみな前代から頻りに陰徳を積んだ果報を承け繼いだものであらう。今に至るまで世人に仰がれて居るのである。

奥書

ある人がこのことをある席上で物語つたので、座客一同は大いに感嘆した。余も面白く感じたので、話の筋を書き記し聊か閑情を托した次第である。實際を見たわけではないが、如何にも親しくその人物に會つたやうな感じもし、ほんのその場で聴いただけだが、興味を以つて聴い

たので、詳細のことまで記憶して居る。嗟乎、此うして見ると、儒といひ俠といふも根本に立到れは同一であつて、たゞ情の出發點の相違に過ぎないやうである。仙といひ凡といふも、その表はれが異つて居るものゝ、元來全然異なる二ツの源から別れて來たものではないやうに思はれる。蓋し春怨秋愁となるも俱に心の弦に觸れて初めて起るのであつて、忠臣孝子と別れるのも共に同一途から出發するのである。夫婦の情はどうかといふと、これはまことに巧く組み合はされぬものであり、朋友の誼はといふに、これは更にそれよりも當てになり難い。張耳、陳餘の如く互に戦つて了うやうなものも決して特別ではなく、普天悉く然りだ。蕭育、朱博が仲違ひに終つた如きも地を易へれば皆然らざるなし。交を深くするのは愁を深くするやうなもの、契を結ぶならば怨を結んだ方が増し位のもので、何事も無い場合には互ひに往來して離るべからざる仲のやうに見えても、一旦利害關係に觸れたら互に叩き落して上から石を投下する位のものなのだ。友人の爲めに家産を破つてまでその急難を救ひ、命を棄て、までその仇を復してやつた馬遷の如き人物がまたあるかといふに、浩浩たる古今、茫茫たる宇宙、斯くの如き人物はさて幾人居るだらうか。

球(著)は十年賦を作る。可なり長いものだが、舊いものは滅茶々々になつて了ひ、友人達は見れば、これも同輩の大部分は寥落たるものに成つて了つた。詩を學んでも劍を學んでも、何一ツうまく行かずに了つた。いやはや、馬鹿げきつた半生にして了つたものだ。それに様々な目に逢つて來て居るから、誠に意氣地なくなつて了つた。今では年を取らばかりで、野心も希望もすべて灰だ。その代り物事に妙に氣ばかり廻るのは困つたものだ、骨が朽ちると蠅が飛ぶのを見ても悚つとする。膽が破れて居ると蛾の喧嘩も牛の鬪程に魂を消すやうなものだらう。桓温のやうな男が亡くなつてからは、謝奕のやうな我まゝな眞似は出來まいし、嚴武のやうな氣まぐれが居なくては、甫世のやうな傲岸は出來さうもない。その上金も持たなくなつて了つては鄧禹に笑はれても已むを得ぬ。樽に酒が無いのも、灌夫のやうな人間に怒鳴られずに濟むと思へば却つて結構だ。たゞどういふものか口の悪いのが直らないのは困つたものだ。それで居て物には感じ易く、潯陽江で商人の妻君の身の上話を聽けば、青衫の濡れる程涙を流す樂天もどき、西陽關を出て、故人なしなど、王維の歌を聽かせると、黒い鬢まで急に白くなつて了ふ。これでは頼に毛を植へて見てもあまり好い男に成れさうなことはない。無暗といろく

の文字を引き出して見たがるのも、興が乗ると出て來る性分なので、此の燕山外史を作つたのも、つまりその道樂の産物である。

この作は全篇を通じて三萬餘言になつたが、全部四六の體で書いて了つた。當年の魏收の翻たる蛺蝶の輕薄の浮名は免れまい。陶穀の草制のやうに寄せ集めもの、様に依つて葫蘆を畫くの亞流で、句は無暗に並べ立てたに違ひないが、語だけは几帳面に對に聯ねてある。繪を書いて活きたやうに見へれば結構だが、鵠を雕つて驚に見るのは是非もない。四字と六字を並べたところ、蟲の形に見へる小兒の書いた篆書と同じお笑ひ草であつて、元來が淺薄な文章なのだから、深奥な意義のある筈はないのだ。それにしても、ふざけ過ぎて居るといふかも知れないが、それは小説といふものが原より覆醬瓿で、無用の書なのではないか。然らば如何なる人間が讀んで意味を解するかといふならば、それはお婆さん達でも決して門外漢ではないのである。たゞこの話は二三の人々が集つていろくの珍らしい話を持ち寄つて、四百年以前の殆んど判らなくなつた端々を繼ぎ合はせたものなので、實際にあつた事實を研究するなどいつても、それは到底不可能の事だ。しかし此うしたことを傳へ、一ツの物語りとして存するのも差聞な

枕中往來

下卷

52225はあるま5か。(終)

小 引

支那の物を邦譯するに方つて最も痛感することは、兩國の言葉の長短であるが、本書に於いて更に一層それを痛感させられた。原書では叙事、對話共に極めて僅少な文字で深く要領を得て居るのだが、邦語に譯して見ると、夥しき多くの文字と多くの音を綴る爲めに、對話の如きは甚だ間の抜けたものになり、而も内容は甚だ稀薄になり易い。たゞ／＼邦語の方が遙かに要領を得て居る場合がないではない。けれどもそれは極めて稀なる場合で、而も原文に對して譯筆を執る場合には不自由の方にばかり多く逢着する。殊に青年男女の戀物語りの如き、情熱の表はれに於ては兩國語共に必ずしも隔るところはないが、切情の一二語の間に甚だ多くの内容を言ひ表はして居る點では邦語の遙かに及ばざるものがある。これを譯して見ると徒に音と文字とを多くしてしひ、爲めに甚だしく情熱をさまして了ふことが少くない。否往々然りである。最も痛感したことの一つであつた。

剪燈新話の邦譯では鹽谷文學博士の直譯が國譯漢文大成に收められてある。大さう立派なも

ので、本書の譯に就ても負ふ所甚た多かつたのであるが、直譯と雖も言葉の苦痛は同じやうに表はれて居る。例へば有名な『牡丹燈記』中の妙齡の美人符女の言葉の一節

『姓は符、麗卿はその字、淑芳は其名、故の奉化州判の女なり。先人既に歿して家事零替す。既に弟兄なく仍つて放蕩鮮し、たゞ妾一身遂に金蓮と湖西に僑居するのみ』

といふが、如き漢文直譯として當然この外にないわけだが、故圓朝の所謂『秋草色染めの振袖に、燃え立つばかりの徘徊緬の長襦袢、駒下駄の音カランコロン』と出て来る窈窕たる少女の言葉としては、如何にも六ヶ敷過ぎて似合はしくない。而もなほ原文に對して倍に近き音と文字の増加を免かれないのである。これを邦語に言ひ換へて、よく間の抜けぬものにしようにすることは、實に難中の至難といはねばならぬ。

原語をそのまま用ゐる直譯でさへ文字數は倍になる。邦譯にすれば五倍以上の増加は何としても免かれない。剪燈新話四卷のうち、最短は八百八十餘字で一篇を纏めてあり、最長篇でも三千字には達せぬのである。しかしこれを邦譯して見ると、長きは一萬字、短きも五百字以下に詰めることは出来なかつた。間延びのせぬ叙事、對話を邦譯に求めることの至難なことを痛

感した。

本書剪燈新話の取材は概ね蘇、杭地方に起つた至正、洪武間の出來事を捉へたもので、著者瞿佑が郷里臨安の教諭に任ぜられた三十二三の血氣の時に執筆し、洪武十一年に脱稿して居るのだから、すべて直接の見聞を採つて靈筆を驅つたものである。殊に『天台訪隱錄』の如きは洪武七年の出來事とあるから、恐らく著者執筆中に現はれた事實であらう。附録『秋香高記』に至つては實に著者自身がその篇中に入つて居るのである。目の當りに近き事實を親しくその土地に居て書いたのだから、餘程氣乗して書いたものと見へる。その筆致の華麗流暢なる只々感嘆の外はない。

筋は大體唐代の傳記と同じやうなものだが、唐代の傳寄の如き開古の趣に乏しい代り、飽くまで濃豔に飽くまで甘い書き振りである。やはり當代を壓倒して居た諷刺小説の潮流から受けた影響であらう。吾邦の讀者には如何にも喜ばれさうな書き振りで、夙に江戸時代の諸作家に屢々借用されたのはさもあるべきことである。たゞ現代では所謂漢文讀み、若しくは直譯體では甘じない人が多くなつた。故に邦譯を試みて本叢書に收めたわけである。

剪燈新話

第一卷

山陽 瞿佑 宗吉 著

譯者 識

水宮慶會錄

二

元の順帝四年、至正甲申の歲のことである。潮州の余善文といふ男が、日中漫然と自宅に坐つて居ると、突然二人の男が訪ねて來た。いづれも黄色の頭巾に縫取りの装束嚴めしく、歳神の使力士かなぞのやうである。づつと善文の坐前に進んで恭しく禮をした。

『南海の龍神廣利王からのお迎ひで御座います』

これは驚いた。

『廣利王と申せば南海の大海原を領する龍神だが、拙者は浮世に暮す數ならぬ者、幽冥の世界と現實の娑婆では、これは如何にも及びも付かぬことで御座います』

『兎に角お出で下さい。どうぞ御辭退下さるな』

促がさるゝまゝに出掛けることにした。二力士に跟いて南門外へ行つて見ると、紅塗りの大船が岸へびたり横に着いて居る。一同が乗り移ると、その大紅船は二頭の黄龍に兩舷を擁せられ、速きこと風雨の如く、眞に瞬くまに到着した。門の前に止まると、先づ二人の者が内へ入

つて到着を報じ、しばらくして善文を内に案内する。廣利王躬から階を降つて殷勤に出迎へた。

『御芳名はかね／＼承はつて居りました。今日は態々お運ばせを願ひ、甚だ恐縮いたしました。どうぞ——』

王は先に立つて階上へ案内し、相對して坐を薦める。善文は身體がすくむ程恐縮し、席へも着けずもぢ／＼して居ると、王から先づ口を開いた。

『あなたは陽界の世間に住まはれ、わしは大海中の水府に居る。全然管轄違ひなのだから、一向御遠慮には及ばんぢや』

『どういたしまして、大王はかやうな尊貴のお身分、拙者は一介の貧書生、さやうなわけには参りません』

廣利王の左右には龍參軍、龍主簿といふ二人の臣下が侍立して居る。その時進み出て大王に申し上げた。

『只今客人の申さるゝところが道理で御座います。願ひにまかせられますやう。殊更に尊嚴を損して盛威を汚さるゝことは宜しう御座いますまい』

三

廣利王然らばと中央の坐に着き、善文には別に右の方へ一脚の椅子を出して坐らせることになつた。

四

『そこでぢや。わしの住居はかやうなつまらぬ所だが、鮫や鰐と隣りあひ魚や蟹共と暮して居ては、龍神の盛徳を示し、帝者としての權威を發揚するに甚だ貧弱で面白くない。で、此度新たに一ツの宮殿を建設し靈徳殿と命名することにして、優秀な技術者を集め、高貴な材料を悉く完備し、何一ツ不足するものはないのだが、たゞ一ツ上梁文だけに困つて了つたのぢや。承はれば足下は不世出の才を負ひ、あつばれ經論を懷いて居られるといふことである。それで御迷惑ながら態々御光來を願つたわけぢや。どうかわしに上梁文を書いてくれまいか』

輝やく白玉を刻んだ硯、文美はしき犀角の筆、人魚の賣るといふ鮫絹の白絹一丈ばかり、早くも侍臣共の手で善文の前へ運ばれたので、善文は平伏して王の仰せを承はり、一揮に上梁の疏文を起草した。文には點を施さない。

伏して以みれば天壤の間海を最大となし、人物の内神を最靈となす。既に香火の依歸に屬す、廟堂の壯麗を乏くべけんや。こゝをもつと重ねて宮殿を營み、新たに華名を掲げ、

龍骨を掛けて以て梁となし靈光日に耀き、魚鱗を緝めて瓦となし瑞氣空に蟠まる。明珠白璧の簾櫳を列ね、青雀黃龍の舸艦を接す。瑣窓啓いて海色戸に在り、綉闥開いて雲影軒に臨む。雨順ひ風調ふて南溟八千餘里を鎮し、天高く地厚くして後世億萬斯年に垂れ、江漢の朝宗を通じ溪湖の獻納を受く。天吳紫鳳紛紜として到り、鬼國羅刹次第し來る。歸然として魯の靈光の若く、美なる哉漢の景福の如し。蠻荆を控へ甌越を引きて永く宏規を壯にし、閩閩に叫び琅玕を呈して宜しく善頌を興すべし。遂に短唱を爲つて修梁を助學す。

抛^{りやうとうになげうちて}梁^{りやうとうになげうちて}東^{ほうちやう}方^{ほうちやう}文^{ぶん}蓬^{ほう}萊^{らい}指^し顧^こ中^{ちゆう}

笑^{わらふてみる}看^{かん}扶^ふ桑^{さう}三^{さん}百^{ひやく}尺^{しゃく}金^{きん}雞^{けい}啼^{てい}罷^ば日^{にち}輪^{りん}紅^{こう}

抛^{りやうせいになげうちて}梁^{りやうせいになげうちて}西^{じやくすい}弱^{じやくすい}水^{すい}流^{りゆう}沙^{しゃ}路^ろ不^{まよはず}迷^{まよはず}

後^{こう}夜^や瑤^{えう}池^ち王^{わう}母^ぼ降^{かう}一^{いつ}雙^{さう}青^{せい}鳥^{てう}向^ひ人^{ひと}啼^{なぐ}

抛^{りやうたんになげうちて}梁^{りやうたんになげうちて}南^{なん}巨^{きよ}浸^{しん}漫^{まん}萬^{ばん}族^{ぞく}涵^{ひた}

要^{はらきやうの}識^し封^{ふう}疆^{きやう}寬^{かん}幾^き許^{しよ}大^{たい}鵬^{ぼう}飛^ひ盡^{じん}水^{すい}如^{ごとし}藍^{らん}

五

抛^{りやう}梁^{はう}北^{ほく}衆^{しゆう}星^{せい}絢^{けん}爛^{らん}環^{わん}環^{わん}宸^{しん}極^{ごく}

遙^{はるか}瞻^{かに}何^{なる}處^{ところ}是^{これ}中^{ちゆう}原^{げん}一^{いつ}髮^{ぱつ}青^{せい}山^{さん}浮^{すわ}翠^{すい}色^{しき}

抛^{りやう}梁^{はう}上^{じやう}乘^{りやう}龍^{りゆう}夜^や去^き陪^{はい}天^{てん}仗^{じやう}

袖^{しゆう}中^{ちゆう}奏^{そう}罷^ひ一^{いつ}封^{ふう}書^{しよ}盡^{ことごとく}與^{さう}蒼^{せい}生^{せい}除^{じゆ}禍^わ障^{じやう}

抛^{りやう}梁^{はう}下^げ水^{すい}族^{ぞく}紛^{ふん}綸^{りん}承^{とく}德^{とく}化^{くわ}

聖^{せい}曉^{けう}頻^{ひん}聞^{きん}贊^{さん}拜^{はい}聲^{せい}江^{かう}神^{しん}河^か伯^{はく}朝^{れい}靈^{れい}駕^か

伏して願はくば上梁の後、萬族仁に歸し百靈德を仰ぎ、珠宮貝闕、天上の三光に應じ、
袞衣綉裳、人間の五福を備へんことを。

立派に書き上げて捧呈すると、廣利王は非常に喜んで、いよ／＼日を選んで落成式を擧げる
ことになり、東、西、北、南海の龍王を當日の祝宴に請待する。使は三方に派遣された。

その翌日使を受けた三海の龍王は殆んど時を同じうして來朝した。いづれも千乘萬騎の臣僚
に堂々と行列を打たせ、神蛟、毒蜃の族は踴躍して前後驅に走せ、長鯨、大鯤の徒は奔馳して
左右を擁し、魚頭鬼面の士卒は或は大旗を捧げ或は劍戟を揮かして居る。その數幾十萬なるを

知ることが出來ぬ。壯觀譬ふべからざるものであつた。この日廣利王の威容はまた實に尊嚴を
極めたもので、通天の冠を戴き、絳紗の上衣を着け、手には碧玉の圭を秉り、躬から門に立ち
出でて來賓の三海神を接迎した。その禮儀格式の嚴肅なことはまた格別である。迎へられた三
神もまた威儀壯嚴なるもので、袞々たる冠冕を正し燦然たる佩劍嚴めしく、たゞ身に裝ふた上
衣だけはその居るところの海の方位によりて各異にして居る。一應寒暄の挨拶があつて、恭し
く禮を交し各賓主の席に着いた。

善文もこの席に列するの光榮を得たのであるが、これは無官の身分だから白衣を着て殿の片
隅の方に着席して居る。やがて來賓の三神と挨拶を交さうとすると、東海の龍神廣淵王の座の
後から王の前へ躍り出でて突如怒號した者がある。鐵の冠を戴き長鬚を揮ひ、一見物凄い形相
である。廣淵王の從臣赤鯁公といふものであつた。

『今日は畏くも南海龍王の宮殿落成式に就き、特に三海龍王の駕を請じてこの宴會を催された
のであつて、江、漢諸水の首長、大川、深澤の主君さへ誰一人席にあづかり得ないといふ嚴肅
を極めたこの席場へ、見受けるところ彼の末座に白衣の者が一人紛れ込んで居るは何者なるか、

以ての外の儀に存じます。』

「オ、あれは中潮華陽の文士余善文といふものぢや。この靈徳殿を建てたるに就き上梁文を作る爲めにわしが特に招聘し、引續き此の席へも列したわけぢや」

主人廣利王の一言に却つて恐縮したのは來賓廣淵王である。赤鯿公をかつと睨んだ。

「文士の御座る前をも辨へず、餘計なことを申す奴ぢや、控へ居らぬか」

出しやばつた赤鯿公頗る器量を下げ、赤くなつて引き下る。

やがて宴は開かれ賑かな樂の音が起る。二十人の美姫が現はれて、美しき耳環を揺り輕き裙を翻へし、筵席の前方にならんで昔唐の玄宗が凌波池の女神を慰めたといふ凌波の詞を歌つて

凌波の舞を舞つた。

若有人兮波之中 折楊柳兮採芙蓉

振瑤環兮瓊珮 璆鏘鳴兮玲瓏

衣翩翻兮若驚鴻 身矯矯兮如游龍

輕塵生兮羅襪 斜日照兮芳容

蹇獨立兮西復東 羌可遇兮不可從

忽飄然而長往 御冷冷之輕風

美姫達の凌波の舞が畢ると、更に四十人の美しい歌童が現はれて採蓮の舞を舞ふ。玉の如き美貌に一段の新粧を加へ、目もあやに舞ひ出づる袖も香はしく殿堦の前に飄つた。採蓮の曲といふのは左の如きものだ。

桂棹兮蘭舟泛 泛波光兮遠遊

捐予玦兮別浦 解予佩兮芳洲

波搖搖兮舟不定 折荷花兮斷荷柄

露何爲兮沾裳 風何爲兮吹鬢

棹歌起兮綵袖揮 翡翠散兮鴛鴦飛

張蓮葉兮爲蓋 緝藕絲兮爲衣

日欲落兮風更急 微烟生兮淡月出

早歸來兮難久留 對芳華兮樂

不可_{ちつてしうきよくすべからず}以終極_一

以上二隊の舞が畢ると、鑿々_{とらうく}と百里の外に響くといふ靈鼉_{れいだ}の鼓を撃ち、玉龍の笛を吹いてあらゆる音楽が同時に合奏され、美女、美童總踊りの賑かな舞樂が演じられる。龍王主客の間には頻りに献酬が行はれて、充分に歡を極めたのであつた。すると東、西、北三海の龍王は打揃つて善文の前へ觥_{さかうき}を捧げた。

「われ等はみな邊僻の地に居るもので、一向儀式典禮に就いての心得のないものであるが、今日は測らずも盛大なる祝筵に列なり、かやうなる儀式を拜したのみならず、貴下の如き大學者先生と同席の榮を恭ふしまして、誠に身に餘る面目と存するのであります。

それに就き、是非貴下の一詩を頂戴して、自分共一生の記念とし、且つは吾が龍宮水府の誇りとして廣く流傳いたしたならば、非常に結構なことであらうと存するが、先生如何で御座いますせう。」

善文は快く承諾して直ちに筆を執り、水宮慶會詩_{すいぐうけいけいし}二十韻を作つて三龍王に進呈した。

水宮慶會詩

帝德乾坤大 _{ていとくけんこんのことおほほに}	神功嶺海安 _{しんかうれいかいのこくとくやすし}
淵宮開棟宇 _{えんきうかうとうをひらき}	水路息波瀾 _{すいろはらんをやむ}
列爵王侯貴 _{れつしゃくわうこうたつとく}	分符地界寬 _{ぶんぷちかいひろし}
威靈聞赫奕 _{ゐれいかんえきをき}	事業保全完 _{じげんぜんをまもつ}
南極常通奏 _{なんきよくつねにそうをつらふ}	炎方永授官 _{えんぽうながくわんをさづく}
登堂朝玉帛 _{どうのぼりてまよはくをころし}	設宴會衣冠 _{えんをまうけていくわんをくわいす}
鳳舞三簷蓋 _{ほうまふさんえんぐわい}	龍馱七寶鞍 _{りゅうたすしつぽうあん}
傳書雙鯉躍 _{しよをつたへきうりおどり}	扶輦六龍蟠 _{れんをたけてろくかうわだがまる}
王母調金鼎 _{わうぼきんていをどまのへ}	天妃捧玉盤 _{てんぴぎよくばんをささぐ}
盃凝紅琥珀 _{さかづきはこうこはくをころし}	袖拂碧琅玕 _{そでをへきらうかんをよらふ}
座上湘靈舞 _{ざじやうしやうれいまひ}	頻將錦瑟彈 _{しきりにきんひつをもつてひく}
曲終漢女至 _{きよくをはつてらんぢよいたり}	忙把翠旗看 _{いそがしくすゐきをとつてみる}
瑞霧迷珠箔 _{ずいむしゆよくにまよふ}	祥烟遶畫欄 _{しやうえんやわらんをめぐ}

屏開雲母瑩

簾捲水晶寒

共飲三危露

同餐九轉丹

良辰宜酌

樂事稱盤桓

異味充喉舌

靈光照肺肝

渾如到兜率

又似夢邯鄲

獻酬陪高會

歌呼得盡歡

題詩傳勝事

春色滿毫端

善文が呈したこの詩を見て滿堂湧くが如き歡びであつた。やがて日は西の方咸池に落ち月は東谷に現はれ、臨席の諸龍神はいづれも充分に酔ふて、蹣跚たる足許を侍臣に扶けられ、座を起つてそれぐの國へ歸つて往く、車馬乗物の奔めき軋る音は駢闐としてしばらくの間絶へなかつた。

かくて靈德殿落慶の賀筵は滞りなく終了したので、翌日は廣利王が特に善文の爲めに慰勞會を開き實に懇篤を極めた謝意を効したのであつた。大いに寛ろいで歡を盡し、宴を撤する時に

あたり王は青玉の器に照夜の珠十箇、通天の犀二箇を盛つて善文の前に捧げた。それはト梁文起草に對する執筆料である。善文が歸國の際は復び二人の使に命じて丁寧に郷里潮陽まで見送らせたのであつた。

善文は歸郷してから廣利王に貰つた執筆料の珠玉を波斯人の寶石店へ賣り拂ふと、その代金は無慮億萬金の巨額に上り、俄かに大富豪になつて了つたので、爾來世俗の功名には一切念を絶ち、遂に家を捨て、仙道の修行に入り、遍ねく天下の名山に遊歴した。終に何うなつたのかその後のことは判らない。

三山福地志

山東に元自實といふ男があつた。生れ付き人の好い人間で、學問などは一向なかつたが、家は大地主で界限での富豪の中に數へられてゐた。その頃繆君といふ男がその村に住んでゐた。たま／＼閩中(浙江福建地方)の官吏を奉職することゝなつたが、いよ／＼赴任する時に旅費がなくて非常に困り、自實に銀二百兩の借用を申込んだ。自實はかねて村の者には親切に交際つて

したので、繆君の窮状を氣の毒に思ひ、快よく承諾し、借用證などいふ鹿爪らしいことは抜きにして、申出通り耳を揃へて二百兩の銀を貸して遣つた。當時二百兩位の金は自實に取つては左程の大金ではなかつたのだ。

ところが元の順帝の至正も末年になり、元朝覆滅の悲運に際會し、山東の一帶も忽ち騒亂の巷と化して、自實の家の如きは眞先に群盜の掠奪に遭ひ、塵一本も残らず、昨日の長者は今日の乞食となつて了つた。折しも福建には陳有定が據守して居て、七閩(福建東南の一帶)は比較的平穩であるといふことを聞いたので、自實は妻子を連れ、海道を遙々福州へ落ち延びた。曾て旅費を貸した繆君がまだ閩中の役人で居るならば、それを頼つて何とか生計の途を講じやうといふ考であつたのだ。繆君の様子を尋ねて見ると、果して有定の幕下に屬し、重要な政務は總てその方寸に依つて決するといふ偉らい羽振り、その邸宅の如きも實に堂々たるもので、非常に傲華な生活をしてゐるといふことまで判明したので、自實は俄かに大船に乗つたやう心密かに喜んだのであつた。けれども災難續きの上、妻子を連れての長旅で、身装りもぼろ／＼になり顔貌までも窶れ果て、當時權勢並びなき繆君を訪問するにはあまりに見すばらしくもあり、

いきなり飛び込んで往くには何となく氣が退ける。自實は一旦宿へ歸り、城下で小さな長屋を見付けて兎も角もそこに妻子を落ち付け、身装りなども垢を落して日を改めて繆君の屋敷へ推參した。

門を入ると丁度繆君が今外出するところだつたので、自實はいそ／＼馬前に進み寄り丁寧に禮をすると、繆君は怪訝な顔で打ち見やつた。一向見覺へもないかのやうであつたが。郷里姓名を名乗つてから、かうやく思ひ出したやうに驚き且つ謝し、座敷へ迎へ入れて俄かに客扱ひをしてくれ、一別以來の挨拶があり、茶を御馳走になつてその日は引き退がつた。

翌る日また往つた。その日はたゞ酒を三盃飲ませただけで、故郷の人としての懐しみもなければ、目下窮迫の境遇に對して同情の言葉をかけるでもない。借りて來た赴任旅費などのことは忘れたか覺へがないか、只の一口も言ひ出さなかつた。自實は何等要領を盡さずぼんやりと家へ歸つて來た。

長屋住居へ歸つて見れば如何にも情けない慘憺たるものだ。明日の仕度にさへ困つて居るのだから、女房どもはかみ付かざるを得ない。

『どうしたといふんです。遙々こんなところまで人を頼つて来て、一體どうする氣なんですか。たゞ三盃ばかりの酒で賣られて了ひ、一言もお金の話が出来なかつたなんといふことがあるものでですか。わたし達家内の者を食はせずに置く氣ですか——』

困つた。自實は徒に投首ばかりして居る譯には行かぬ。その翌る日また繆の屋敷へ出て往つた。この日も繆は出て會ふには會つたが、如何にも蒼蠅つらみといふやうな迷惑さうな様子が見へる。その場の調子は頗る面白くないが、結局言ひ出さずにも了へないので、口を開かうとする、先を越すやうに繆君の方から言葉を切つた。

『先頃は旅費を借用したのでしたな。あれはちやんと心に銘じて決して忘れはいたしません。どうもこの通りはした役人で、棒給といつても幾らもなし、折角遠方からお出下すつたのですから。御恩の程は何かいたさねばならぬと心得てはゐる次第で——どうかあの借金の證書をお出し下さい。また追々と返済することにいたしませう』

自實はぐつとした。

『あなたとは同じ村に生れて子供の時から仲好しで育つた間柄ではあり、大事の場合といふことで金は御用達しましたが、證書などは取つて置きはしません。今になつてそんなことを仰しやられては困るぢやありませんか』

繆君は急に色を正して開き直つた。

『イヤ證書は立派に入れてありますとも——では何でせう今度の兵亂騒ぎであなたは無くして了はれたのだ。イヤ——よろしい、證書などはどうでも善いとして、それは詮索せんさくしますまい、ところで只今申す通り、今が今では困るから期限を何とか延べて戴いて、滞りなくお返しの出来るやうにさせて下さう』

自實は遽に居催促もならぬ。『どうぞよろしく』といつてその日も引き取つた。

道々考へた。どうも素振りといひ言ふことゝいひ如何にも腑に落ちぬところが多い。昔親切にされたことは忘れて了ひ、今では袖にしやうといふ量見らしい。しかし一方は當世時めく身分であつて見れば、泣く子と地頭迂濶なことも出来ぬ。折角此處まで旅に出て、貸した金は踏み倒され、妻子は餓死させねばならぬ、羴羊藩てんやうはんに觸るといふ譬の通り、進退全く谷まつて了つた。けれどもじつとして居るわけには行かぬ。また半月ばかり経つて屋敷へ往つて見た。依然と

して物にならぬ。たゞ好い加減な世辭を聽かせるだけ、びた一文困るだらうからといつて出してはくれるではない。とう／＼何の彼のと口實を付けて半年あまりも引き摺られて了つたのであつた。

自實が繆の屋敷へ往復する途中に一軒の小さな庵があつた。外に用のない只繆君に催促だけで歸るので、折々その庵に腰を下して憇むこともある。主人は軒轅翁けんえんそうと稱し、なかなか立派な道士だつた。何の用かは知らず、根氣良く長い間前の道を往復し、その度に立寄つて往くので、つい懇意になり、時折はいろ／＼の世間話に日を暮すことさへあつた。遙々山東から閩中まで貸金の催促に来て、遂に一錢の金にもならず、この翁と知合になつただけが自實の收穫のやうなものだつた。

さう此うするうちにその年も暮れた。どうして新しい正月を迎へたものか。自實は何のなす業もなく、妻子と小さな長屋へ潜つて居るのだから方法のつけやうがない。やはり繆君を訪ねる外はなかつた。自實は繆君に會つて泣いて窮狀を訴へた。

『もはや正月も目の前に來てゐますのに、妻子は着る物もないばかりか、實は昨日今日食ふ物

さへ無くなりました。それで財布には一錢もなし、米櫃には一粒も残らぬ次第、以前お貸し申したあの金をどう此うと今は申し上げるのでなく、如何にも凌の付かぬ私をお救すけけが願ひたいのです。一盃の水を轍の跡に枯死する魚に與へ、一壺の残飯を桐の根に飢へた者に食はせたいふ話のやうに、目今の饑を救つて下さつたら、同郷の舊友としての恩義これに越したことはありません。お願ひで御座います、どうぞ可哀さうと思し召して下さい』

大地へ腹はら匍まひになつて哀願した。すると繆君はそれを引き起してやり、指を折つて日數を數へた上でかういつた。

『さやう、もう十日で丁度大晦日だ。大晦日の日あんたはお宅で待つてゐて下さい。拙者の知行米の内から二石を分け、それに錢二定(二十貫)を持たせてお宅へ届けさせます。まアそれを年越しの費用にして下さい。甚だ輕少だがそこはどうぞ悪からずお願ひする』

といつて『その日は決して外へ出て待つて居なくても好いから』と再三丁寧に念を押した。此の場合自實は如何に嬉しかつたか判らない。心から感謝して歸宅した。

『もう大丈夫だ心配するな——』

敷居を跨ぐと先づ今日繆君に會つての要領を話して妻子共を喜ばせたのであつた。

いよ／＼その日が来た、大晦日だ。今日こそ金も来る米も来る。頑是ない子供までもう来るか／＼と持つて居る。自實は朝から玄關へ坐り込み、小さい子に町の角へ出て見張らせるといふ騒ぎ。しばらくすると子供が駈け込んで来た。

『來ました／＼、米を持つた人が來ましたよ』

それツと家内中木戸へ飛び出して迎へると、なる程米を背負ふた男はたが、自實の家の前をば知らん顔で通り過ぎる。振り向きもしない。自實は多分此の長屋が判らないのだらうと、駈けて行つて聲を掛けた。

『ア、そのお米は——』

『へい張員外からお客分の方へお届けになるのです』

自實はたゞ目を白黒して引き返した。しばらくすると子供はまた駈けて來た。

『錢を持つた人が來ました』

また飛んで出たがそれも素通り、自實の家へは入らなかつた。また追ひかけて訊いて見ると

『李縣令からお近づきの浪士達へお届けで御座います』

といふ。何といふ極りの悪さであらう。がつかりして門へ引き返した。此うして幾度か米や錢を持つた人が通る度に、また外れるかと怖ろしいやうな極りの悪いやうな思をしながら、それでも當てにし切つて居るだけに出て見ずには居られなかつた。けれども終にその日は暮れたが繆君からといつては何者も入つて來ない。全く音も沙汰もなかつた。『詐はられた』腸は煮え返るが如何とも致し方はない。夜が明ければ正月である。世間は賑かに祝ひさゞめくであらう。自實の家は一粒の米、一束の薪さへもないのである。妻子と顔を見合はせて聲を上げて泣くばかりであつた。

自實の心中は堪らない。容し難いことである。怒りの焰は胸に燃へるのであつた。じつと白刃を側に引き寄せて、坐つたまゝ一夜を明かし、雞の鳴き明けの太鼓の鳴るのを待ち兼ねて、一刀を腰に打ち込み、矢庭に飛び出して繆君の門へ駈け付けた。年賀に出るのを狙つて一思ひに刺し通さうといふのである。

夜は明けはなれたがまだ早かつた。表門はまだ開けてない。ぶら／＼その邊に佇んでゐたが

往來には人影さへも見へなかつた。ただいつも馴染の軒轅翁けんえんそうの庵だけが明るい燭を點けて經を讀む聲が聽へる。翁は門の方へ向つて坐り、血相變へて通る自實の姿を見送つた。翁が見送るその目には、奇形異狀きけいいじやうの鬼共數十輩が自實の前後を擁して行くのが見える。ある者は刀劍等の兇器を携ひ、あるものは椎鑿などの得物を手にして居る。髪を振り亂し裸體はだか洗足はだしで驅けて往く有様は如何にもぞつとする程凶惡な気分であつた。やゝしばらくするとまた自實が歸つて來る。今度は金冠玉佩の氣高い服裝の者が數百人端然として自實の前後左右を擁して居る。幢幡ちゆうばんや天蓋てんがいを捧げ、凜々しき旌旗を押し立てゝ來る様は、頗る悠揚として、自實その身も隨身の者共もいづれも極めて平和な顔色であつた。軒轅翁はそれを眺めてどういふ譯か判らない。或は自實が死んだのではないかとも思つた。折しも經を讀み畢つたので、急ぎ聲を掛けて見ると自實は何事もなく確に生きた人間であつた。翁は兎も角自實を居間へ請し入れた。

『あなたは今朝大分早朝にお出かけだがどちらへお越しでした。それに行きがけにはどうも怖ろしい權幕だつたが、歸りには誠に柔和なお顔色だ。何かわけがお有りなさに相違ない。一通マア話して御覽なさい』

自實は少しも隠すところなく繆君の不人情不都合な仕打ちを物語つた。

『——さういふ次第で、わたしを困らせ取り亂させたので、今朝は如何にも腹に据えかね、刀を懷にして彼奴の家へ躍り込み、一思ひに刺し殺して腹を癒やさうと思つたのですが、門まで往つてまたいろ／＼考へて見たのです。彼奴はわたしに對しては如何にも不都合な奴だ。殺しても賺ちぎらぬのだが、しかし妻子には何の罪も科もない。それに彼奴には一人の年老いた母親がある筈、今彼奴を殺して了つたら、その遺族はどんな悲みを見、どんな悲慘な生活をする事だらう。此う考へると、たとへ人は自分を酷い目に遭はせても、自分は人を酷い目に遭はすことが忍びない。容し難い奴だが、じつと堪へて歸つて來ました』

耳を傾けて居た軒轅翁は忽に頭を下げてよろこびをいつた。

『ウンあなたは此の先充分な福祿に與かりますぞ、神々が早くも其事を照覽になつて御座る』

『それはまたどういふことで御座いますか』

『あなたの胸に一念の惡が萌した時は直ぐに鬼が現はれ、一念の善が萌した時は忽ち福神があなたの上に降りて來る。さながら影の形に隨ふが如くで、たとへ闇室の内、不用意の間にも心

の悪の萌しを現し、罪を作つて徳を損することは相成らぬのです』

翁はそれに就いて今しがた見た往復の鬼神の顯現を物語り、現在の窮狀に就いても様々に慰めて、

『これはほんの急場の間に合はせぢや』

といつて僅ばかりの米と錢とを恵んでくれた。

けれども自實は終日鬱々として樂しまない。その晩遂に福州城内の有名な神仙奇跡の地三神山の八角井へ身を投げて了つた。

不思議、自實が身を躍らしたその瞬間、水はさつと左右に開け、兩岸は宛も切り落した石壁の如く、僅に歩める程の細道が通つて居る。自實はその壁面に傳はつて數百歩進んで行くと、そこで壁は盡き道は突き當りになり、立派な往來の出口になつてゐた。天地はからりとして朗かに、日月の光は照りはえて居る。儼然として一の別世界であつた。そこに宏壯な一大宮殿があつて、見上げると標札には『三山福地』と金で書いてあつた。自實は如何にも珍らしくその門を仰ぎながら内へ入ると、見渡す程の長廊下が、眞晝の静けさにしんとして、如何にも物古りた

宮殿の建築に一種の古雅なる香がある。あたりを眺めながらふらふらと歩んだが、聞として住居る人の影だにも見へない。たゞ隱隱たる鐘磬の聲が遙かに雲外に響きを傳へて耳を打つ。自實は氣が付いたやうに俄かに空腹を感じて來た。身體も足も疲れ切つて、もう一步も前へ進めなくなり、へとくとその石壇の側へ腰を卸したまゝ横になつて居た。

すると忽ち一人の道士が現はれ、青霞の裙を曳き、明月の珮を振つて進み寄り、自實の前へ立つて呼び起した。にこやかに笑つて居る。

『翰林(文筆を以つて廟堂に立つ者の敬稱、官名翰林學士の略である)人生の味が解つたかな』

自實は起き上り拱手して禮を施した。

『ハイ如何にも人世行旅の味は充分に味はひ盡しました。が、只今翰林とお呼びかけになつたのは大さうなお見違ひでお座います』

『君は曾て興聖殿で西蕃への詔を書いたことを記憶して御座らつしやるか』

『イエどういたしましたして私は山東の田舎者で賤しい布衣の身分の者で御座います。生れて四十年、一向書物などは讀んだこともありませんし、天子の都などは住つて見たことさへありません』

ん。天子の御殿で詔を書くなど、ほんでもない話で——」

「ア、さやうか、それは君が飢しさ——心の饑に攻められて居るから、昔のことなどはほとんど思ひ出すことが出来なくなつて居るのぢや。」

道士は袖の中から梨棗なつめを四ツ五ツ取り出して、空腹で困つて居る自實に食はせてくれた。

「それは所謂かうりの交梨、火棗くわさうといふ仙薬ぢや。それを食べば過去のことも未來のこともはつきりと記憶に浮んで来る。」

自實は食つて見るとなるほど頭がはつきりして來た。曾て翰林院の學士であつたとも、大都の興聖殿で天子の側に侍して西蕃に與へる詔書を書いたことも、さながら昨日あつたとのやうに明瞭に浮んで來た。彼れは成る程と敬服した。道士に對し非常に敬虔けいけんな感じが湧き起つて來る。

「私は前世にどんな罪を作つてかやうな應報を受けたので御座いませう」

「君には何も別段罪といふやうなことはなかつたのだが、たゞ在職當時自己の文學の才能に誇つて後進の者を侮蔑した。親切に引き立てゝやるといふやうなことをしなかつたので、そのあまり鼻を高くしたところから、今日に一丁字もないやうな、文明生活には全く無智な無學な身

になつたので、又學問で身を立てやうと遊學して居る人達には、自己の爵位おごの高いに驕おごつて少しも目を掛けてやらなかつた、その爲めに長い旅に漂泊して折角力と頼む人は當てにならず、苦しみに苦しみ抜くやうになつたわけだ」

自實はその話の意味がはつきりとよく判つた。自分の身の上みの上に就いてのことは判つたので、更に現代の羽振りを利用して居る權門高官の人に就いて、彼等の未來が何うなるものかと訊ねて見た。

「某氏の如き身丞相みじやうさうとなり位人臣を極めて居りながら、強慾非道で己が腹を肥やすことばかり考へ、賄賂公行の有様であるが、あれは一體どうなるものでせう」

「あれは無厭鬼王むえんきわうといふのだ、地下に十箇じふの爐ろがあつて、彼れの集める不義の財物は全部その爐の中で鑄て了ふのだが、あの男も現在の福運はもう盡きて居る。間もなく幽囚いゆうしうの苦しみを受けることになつて居る」

「某氏の如き、平章の職に在り直接行政の當局に居りながら、らちもなき軍士の兇暴無節制を整理しやうともせず、少しも抵抗力のない良民共を殺害して平氣で居ります。彼れ等の未來は

どうなるものでせう』

『あれは多殺鬼王といつて、幽冥の軍卒何百人が彼れの陰に居る。昔黄帝の義軍に反抗した蚩尤しいうの一族のやうな銅頭鐵額どうとうてつがくの物凄い兇賊だ。それ等が頻りに現世に於ける彼れの兇暴を唆かして居るのだが、それももう命数が衰へて來た。やがて八ツ裂きの刑になる奴さ』

『某は監司の職でも少しも刑罰を正しく行はないし、某は郡守であるが租税取立てに甚しい不公平をやり、某は宣慰の職でも人民に對する教導などはしたことがありません。某は經略の職だが一向地方經略のことなどは顧みないで怨みを買つて居ります。あれはどんな應報に遭ひますか』

『あの者共はみな手械てがせ足械あしせを掛けられ、縛り首になつて肉が腐り骨が穢けがれ、その上でそれ〴〵重刑に行はれる、その他同様な魂共はいふまでもないことだ』

自實は一々感心し、更に繆君の借金踏み倒しの一條を訊ねて見た。これは實に骨身に徹して憎い奴なのだ。

『あれか、あれは王將軍の庫番だから、財産はあつても一ツも自分の自由にはならない』

道士はさういつて更に言葉を改めた。

『こゝ三年と經たぬうちに世運は大變動に遭ふ、非常に大きな禍があるから用心せぬといかぬ。その方も迂濶きうくわとしてはならぬ。餘程氣を付けて住所を擇ぶがよい。さもなくば恐らく池の水を涸らされて魚が死ぬやうな憂き目に遭ふであらう』

自實は深く懼おそれた。然らば何れの地にその大兵亂を避くべきかを訊ねると

『福清がよし。オ、それよりも福寧の方が尙ほよろしい』

と答へた。そして、

『その方此方へ來てから大分久しくなるぞ、家の妻子共が大さう待つて居る、直ぐ歸らつしや

』

といふ、自實は歸るにしても路が無くて出られぬことを訴へると、道士は傍の細路を指してそこから出られることを教へてくれた。自實は深く感佩し、恭しく再拜して道士に別れ、二里ばかり歩くと一ツの大穴が三神山の後に開いてゐた。家へ歸つて見ると半月ばかり經つて居たのであつた。

自實は取り敢へず長屋の世帯をたゞみ、妻子を連れて福寧縣のある村へ落ち付き、そこで田畑の耕作を始めた。するとある日、銀の先へカチリと當つたものがある。掘り出して見るとそれは永く地下へ瘞められた銀で、數へて見ると全部で四十兩あつた。思ひがけぬ大金を掘り出したので、漸く暮し向きが樂になつたと思ふと、天下の形勢はがらりと變つた。張士誠が元の丞相達識帖木兒の印綬を奪却して遂に拘殺し、明の大軍は福建に入つて平章陳有定を虜にし、その他從來の官吏共は大部分その首を刎ねられて了ひ、彼の繆君は王將軍なるも、爲めに殺害され、財産は全部沒收されて了つた。曾て大晦日に酷ひ目に遭はされてから、數へて見れば丁度三年目、道士の豫言の通りであつた。

華亭逢故人記

松江縣に全、賈といふ二人の壯士があつた。いづれも家には相當の資産があり、學問上の智識もあるが、太ッ腹な人間で酒は飲む氣焰は揚げる。細かなことなどには少しも頓着しない。稜骨の彼等には到底屑屑たる世間の交際が馬鹿々々しくて堪らない。一種の俠客肌で頗る奔放

な生活をして居つた。

元朝の沒落に近き至正の末年、張士誠が松江縣の一帶から浙江西部の地方に割據して大いに威を振つた頃、二人はしばしばその幕營にも往來し、盛んに大言吐語を吐いて衆人を驚ろかし、實に旁若無人なものであつた。その氣概と才學との秀で、居るところから、當時羽振りの利く目ぼしい連中は競つてこの二人に交ることを求め、この二人と知り合ひであるといふことを名譽なことのやうに心得て、人後に落さざらんとすることを力めるといふ有様であつた。左の二人の詩は大いに世間に喧傳されたものである。

華髮衝冠感一毛 西風涼透鸚鵡袍

仰天不敢長嘯氣 化作虹霓萬丈高

(全)

四海干戈未息肩 書生豈合老林泉

袖中一把龍泉劍 撐拄東南半壁天

(賈)

彼等二人の如何に鼻息が荒かつたかはこの詩を讀んでみても判る。世人はまたその自負の高い點を贊美したのであつた。

明の太祖朱元璋しゆげんしやうが自立して吳王となり元年と稱した至正二十四年、吳王元璋の大軍が張士誠を攻めて姑蘇城こそじやうを包圍したが、容易に陥落しない。一方には上海の錢鶴皋せんかくかうが兵を起して士誠に味方をしたので、戰鬪は頗る激烈となつた。その際全、賈の兩人は自から逆徒安祿山部下の嚴莊げんさう、逆賊黃巢ぎせくわうせうの將尙讓しやうじやうじやうなどの山氣に擬らへて張士誠の幕下へ馳せ參じ。わざ／＼士誠の陣營へ訪ねて往き、帷幕の内に交はつて隱然參謀氣取りで働いてゐたが、遂に嘉興郡かこうぐんその他が撃ち破られ、幾くもなく張の軍は總崩れとなつて了ひ、討ち漏された者共は悉く入水して死んだのであつた。全、賈兩人も無論それ等敗軍の士卒と運命を共にした。

その後八年の星霜を経て、大明一統の世となつた洪武かうぶの四年、華亭くわていの石若虛せきじやくきよといふ者が、ある事故があつて市外の田舎道を通りかゝつた。石は嘗て全、賈の二壯士とかなり親しい仲であつたが、その時偶然二人に行き逢つた。二人は相變らず元氣なもので、數人の子分、召使共も附いて居る。若虛の姿を見ると向から言葉をかける。

『ヤヤ石君相變らずかね』

石若虛は突差の間ではあり、二人の者が八年前に既に戰死して了つたのだといふことは忘れて居た。珍らしい友人に逢つて如何にも嬉しかつた。互に丁寧な會釋を交し、傍の草叢を掻き分けて坐り込み、大いに談じて時の移るのさへも氣が付かなかつた。

その時全は忽ち慨然として長嘆した。

『諸葛長民しよかくちやうみんがいつたことがある。貧賤にして長く富貴を思ひ、富貴なるものもまた危機を履むといふのだが、この語は決して徹底した議論ではない。苟くも富貴にならうといふなら危ぶまない瀬戸を渡るのは當り前だ、それを怖がるなどいふことがあるものか。あれも都合好くこれも都合よく、三方思ふ儘にしやうといふ揚州鶴やうしやうかくの話のやうな勝手なわけに行くものか。男子が一旦此ろといつた以上は、後世にその芳名を謠はれる程の偉いことをするか、さなくば何時の世までも大惡の臭名しうめいを罵しられるか、つまり一か八かだ。唐の高祖に背いて范願はんぐん、高雅賢かうがけん等に昇き上げられ、水飲百姓から忽ち漢東王かんとうわうになつた劉黑闥が、首を斬られる時に、俺は元の百姓家で菜でも作つて居ればよかつた。高雅賢輩の口車に乗せられたのが不覺だつたといつたさう

だが、馬鹿なことをいふ奴だ。だから古今にない笑ひ者となつたのだ』

すると賈が話を引き取つた。

『黒闥のやうなつまらぬ者は言ふに足りないさ。漢の田横でんわうとが唐の李密りみつなどいふ輩こそ代表的なものだ。所謂鐵中の錚々さうくたるものだらう。田横は始めは漢の高祖と同等に南面して孤と稱し、大いに王者の威を振つものだ。今更一方の者の臣下となつて頭を下げるのが嫌やなら、海島へ逃げ込んだ時、そのまゝ死んで了へば宜いぢやないか。大きな者は玉にする小さな者は侯にするなどと甘い言葉に釣り込まれて、のこ／＼東都まで出かけて往つて死ぬなどは態さまがない。李密もさうだ。彼が唐の高祖と同じく隋に反いて兵を起した時は、事狀の如何は兎に角高祖から賀状を送つて、しかも盟主に推戴されたのだ。それが遂にへこたれて了ひ、尾を振つて高祖の迎ひに應じて國に入り、従來の地位や功績を頼りに大臣公卿にして貰ひたいなどと無心をいつたのは穢いぢやないか。此の連中は何處まで不見識なケチ臭い量見なのか判らない。男子苟も死ぬなら死ぬでさつぱりとしたらいいぢやないか。人の喉のどの下を借りて息を吐いて居るとは何たるぶざまなことだらう。堪らないことだ。韓信かんしんは事實上漢の天下を造り上げた男だが、しま

には殺されて了つた。劉文靜りうぶんせいは唐に隋を倒すことを薦めた人物だが、これもとう／＼殺されて了つたのだ。凡そ人臣として彼等二人程偉い功を立てたものはないのだが、それでさへあの通り、外の有象無象輩が變な未練氣を起したところで問題になる筈がないぢやないか。』

『が、駱賓王らくひんわうなどは違ふな。李敬業りけいげふを佐たすけて兵を起させ、則天武后一族の暴戾を討つてんかうの檄を書いてやつた。失敗したとなると、立派に見切りを付けて靈隱寺の中へ隠れ、桂子けいし月中落、天香てんかう雲外飄うんぐわいひょうなどおつに澄したものだ。黄巢も一時唐の天下を大混亂に陥れた男だから、無論誅戮しゆりくを逃れさうなことはない。しかし一旦事敗れたとなるや。頭髪を剃り落し黒染の衣を着てすつかり世間から遁れて了ひ、鐵衣てつゑ著盡てつゑ著僧衣てつゑなどと詩を題して居るところが面白いぢやないか。この二人などはその時代に於ける極悪人の代表者だが、うまくその禍を脱がれたところを見ると、なか／＼智慧の廻る人物だつたに相違ない』

『ハ、ハ、ほんとうにさうだつたとすると、吾輩などは誠に面目ない次第さな』
賈は笑つた。その時全は氣が付いたやうにいつた。

『久しぶりの友人が居るのに、そつち退けにして他の話に夢中になつて了つた。そんな話ばか

りして居ては、何だか氣が腐つちまうぢやないか』

石若虚の方に向き直ほり、自分が着て居た緑色の上着を脱いで若い者に持たせ、それを酒代にして酒を買ひにやつた。やがて酒が来る。三人は大いに痛飲した。その時若虚は二人にいつた。

『君達二人の作る詩は世間で誰一人知らぬ者が無い程愛誦されて居るのだから、幸ひ今日愉快に飲んだところで、何か素破らしい傑作を一首づゝ作つて貰はうぢやないか』
いかにもと二人はしばし考へてゐたが、先づ全が一詩を吟じた。

幾年兵火接天涯幾年のへいぐわてんかいてん

杜宇有冤能泣血とようありよくちになき

當時自詫遼東豕たうじみづからほるれうとうのいのこ

一片春光誰是主いっぺんのしゅんくわうたれがこれしゆ

つゞいて賈も一詩を吟じた。

漠漠荒郊鳥倦飛ぼくぼくたうくわうかうとまうむ

人民城廓嘆都非じんみんじやうくわくすべくひなるをなげく

愁纏病骨何須葬しうれひやうつにまどきなんぞはうむるをもちひん

麥飯無人作寒食ばくはんひとのかんしきをなすなく

生存零落皆如せいぞんれいらくみなかくのごとし

二人の吟聲を聽いて、若虚は甚だ怪訝に思つた。

『君達二人の詩は何時のを見ても實に豪宕快話だが、今日の詩に限つて何だつてそんな陰氣臭い哀れつほいことをいつたんだね。昔のとは較べものにならないぢやないか』

二人はたゞ顔を見合はせて何ともいはなかつた。たゞ思ひ出したやうに時々哀しさうな聲を出して嘯くのであつた。やがて酒も無くなつたので、互に別を告げて立ち上り、左右に十數歩往つたと思ふと、全賈二人の姿は忽然と搔き消えて了つたので、若虚はびつくりし、その時始めて幾年か前に死んだ人間であつたことに氣が付いた。と見ればその邊の林は梢の下がとつぷりと暗く、山の陰には早くも沈んだ夕日の残暉を浮かし、森や草藪にはねぐらを訪ふ鳥の音が寂しく聞へて居た。甚だ無氣味でもあり不思議でもある。若虚は直ぐ先の村の今し方買つて來た酒屋へ行つて、酒代に置いた上着を看せて貰ふと、手が觸はるに隨つてさながら蝶のおしろ

いのやうにばら／＼と散つて了つた。若虚はます／＼怖ろしくなり、その晩はその酒家へ泊めて貰ひ、明る朝早々歸宅したが、その日のことを思ふと何ともいはれず怖ろしさにぞつとする。爾來どんな急用が出来てもその道は通らないやうにした。

金鳳釵記

元の武宗の大徳年間揚州路(今の江都縣)に呉防禦ごぼうぎよといふ富豪があつた。その屋敷は春風樓の附近の崔某さいぼうといふ官吏と隣り合ひで、この隣り同士は互に往來し、大さう親しい交際であつた。崔某には興哥こうかといふ一人の息子があり、防禦には興娘こうぢやうといふ娘がある。どちらもまだ襁褓ひらきの中で乳を含んでる頃、崔某の方から令嬢を憐の嫁にと許嫁けの約を申し込んだ。兩家は身分としても互に申分がないので、防禦も直ちに承諾し、約束の印として崔家からは金の鳳凰を鏤めた一本の釵かんざしを贈つたのであつた。

その後崔某は遠隔の地へ轉任することゝなつたが、赴任して以來十五年の長い間、遂に手紙一通の便りさへなく、四歳の時許嫁の夫と別れた娘興娘は、深閨に垂れ込めてもはや十九にな

つたのであつた。當の娘よりも母親の方が焦り出した。

『あなた、崔家では一體どうしたといふんでせうね。興哥さんにしてもあれきり十五年にもなるのに只の一度の便さへないのは可怪おかしいぢやありませんか。娘はもう段々年を取るばかりですよ。それは約束通りに守つて行く程結構なことはありませんけれども、その爲めに娘の一生を臺なしにして了ふわけには参りませんもの、これは考へどころで御座いますよ』

『俺は立派に友人とし約束をしたのだよ。まして子供同志二人は完全な婚約になつて居るのだから、俺は言葉を食んで約束を反古には出来な』

父親は飽く迄で几帳面に考へて居る。

娘興娘はまた今日か明日かと待ち焦れること十幾年、その人は遂に歸つて來ない。何者かその深刻なしかも長い／＼悶への生活に堪へ得やう。身も心も極端に弱り果てた。一旦枕に就いてからはあらゆる治療も遂に何の効果をも現はさず、父母は枕邊に看護つて居ても、何と慰めてやりやうもない。病床に在ることやがて半年、淋しく死んで了つた。

靜かに息を引き取つた愛し子の情けない臨終に、父母は身も心も消え入るばかり慟哭どうこくした。

口を利かなくなつた娘の屍を棺に斂める時、母は婚約の印に贈られた金鳳釵を手に、冷たい娘の屍を撫でて泣いた。

『これはお前の夫の家の物ですよ。オ、お前はもう此んなになつて了つた。これを残して置いたつて仕方はない——差してやりませう、身に着けておいで』

涙に濡れた髻へ差して棺へ入れてやつた。

葬儀を済ましてからやうやく二月ばかりたつた時である。崔興哥が突然歸つて來た。防禦は坐敷へ上げ、一體どうしたのか、十五年來音信不通の今日までの次第には何事かあつたのではなかつたかと訊ねると、興哥は打ちしほれて

『お別れしましてから、父は宣徳府の裁判官を奉職中に亡くなりました。引き續き母も亡くなり、今兩親の喪が果てましたので、遙々訪ねて參つたので御座います』
と物語つた。防禦ははらくと涙を流した。

『興娘も可哀さうな奴だつた。君のことばかり想ひつゞけ、とう／＼病氣になつて今では先々月想ひ死に死んで了つた。葬ももう済んだよ。でも君が歸つたのを見たら佛も喜ぶだらう』

佛間へ案内して、位牌の前に紙錢を焚き、生ける者に言ふやうに興哥の歸つて來たことを告げ、家中聲を上げて働き悲しんだ。

防禦は改めて興哥にいつた。

『君も御兩親に亡くなられ、殊に遠い旅先のことでは大抵のことではなかつたらう。今此うして遙々來てくれたんだから、還つて行くところもないだらうし、マア俺の家にお出なさるがいゝ。親友の子だもの吾が子も同じことだ。興娘が亡くなつたからといつて決して他人行儀にはしないから——』

直ぐに行李を持ち込ませて、門の側に在る別棟の小座敷を興哥の居間としてやつた。

半月程経つと、時は清明三月の節、丁度死んだ興娘の命日に當り、防禦は家内中で墓參に行つた。興娘には慶娘といふ妹があつた、今十七になる。この日も兩親と共に墓參に行き、家は興哥が留守番をした。一同が歸つて來た時はもう日も暮れて、あたりは暗くなつてゐた。人聲が聞へたので興哥が門まで迎へに出ると、轎は二挺で、前の轎が先づ門に入る。次の轎は門を入らうとして、立つて居た興哥の前へすれ／＼になり、チャリンと何が地に落ちた音がした。興

哥は轎を遣り過ぎてから、馳け寄つて拾ひ上げて見ると、それは一本の金鳳釵だったので、追ひかけて行つて母屋へ届けやうとしたが、もう夜のことではあり、轎が入ると直ぐ中門を閉め切つて了ひ、もう内へは入れない。己むを得ず自分の小坐敷へ持ち歸つた。

興哥は燭を明るくして獨り坐つて見たが、心は何となく曇つて居る。今日は許嫁の命日であつた。墓參の人達を送り迎へるについても、思ひ出されるは夢のやうに朧ろ氣な振り分け髪（おしげ）の昔や、遂に空想に終つた甘い二人の結婚生活である。考へるほどますますあじきない。今やその人は亡く、只一人、しかも生活の途もなく、人の家の門側へ寄食して居るやうな有様とは情ない。何時までこんな生活を續けて居られやうか。徒らに嘆聲を泄らさばかりであつた。

夜も更ける。淋しく寢に就かうと思つて居ると、コツ／＼と門を叩く音がする。

『誰れだ、どなたです』

『……………』

返詞がない。そのまゝ黙つてゐるとまたコツ／＼やる。三度聲を掛けて見たが、やはり同じことだ。立ちよつて門を外し、そつと細目に覗いて見ると、これは驚いた、非常な美人がたど一

人門の外に立つて居る。扉を開ける刹那、裙を擧げてスツと内へ飛び込んだ。興哥があつと狼狽して居ると、女は憚かるやうに姿をすぼめ、息を殺すやうに低い聲で興哥の耳へ口を寄せた。

『あなた、わたしを御存じないでせうね。わたしは興娘の妹です。慶娘と申しますのよ。向き程轎の中から釵を投げましたがあなた捨てて下すつて——』

興哥を抱へるやうにして内へ入り、同じく寢に就かうとするのであつた。興哥は現に娘の父防禦に食はせて貰つて居る身であり、且つ何かと親切な待遇に感謝して居る際だ。さうしたことは良心が容さない。

『駄目です』

頑として拒絶した。いろ／＼と言ひ寄つたがどうしても聽かぬので、女はサツと色を變へて怒り出した。

『何ですかあなたは、父はあなたを親身の子か甥のやうに大事にして、この門側の坐敷へ置いてあげてるぢやありませんか。それにこの眞夜中わたしをこんな所へ誘ひ出して来て、どうなさるといふんです。よう御座んす。わたしお父さんに言ひ付けて、そして役所へ訴へて了ひま

すから。イ、エ宥すもんですか』

興哥は當惑して了ひ、已むを得ず女の要求に應じたのであつた。明方になると女は歸つて往つた。

それ以來夜になると必らず忍んで来て、夜明けには必らずそつと歸つて行く。此うして門側の小坐敷に往來する毎夜の冒険は一月半も續いて行はれた。

『あなた、わたしの居間は母屋の奥坐敷ですし、あなたは此うして外の住居なんですから、今まで誰にも見付からないのがほんとに仕合せでしたわ。けれども好事魔多しとか、佳期阻易しといひますからね。わたしほんとうに心配でたまないのよ。ひよつとして見付かつて御覽なさい。それは大變ですわ。お父さんやお母さんにどんなに叱られるか知れはしない。籠を閉ぢて鸚鵡を鎖し、鴨を打つて鴛鴦を驚かすつていふやうにわたしだけが押し込められるなら、それは厭いはしまれんけれど、あなたの身の上や名譽にどんな迷惑がかかるか判りません。わたし何だか安心ならなくてしやうがありません。面倒の起らない先に二人で何處かへ往つて了つた方が善いと思ひますわ。どんな田舎の百姓家でもいゝから二人呑氣に一生を送りたいと思ひま

す。どんなことがあつても二人は離れることのないやうにね』

興哥もその外に良き思案は出ない。

『あなたの話は非常に善い考へに相違ないが、しかし實行するには何うしたらいいか少し考へさせて下さい』

興哥はいろ／＼と考へて見た。今のこの身では親も財産もない、自分の身すら獨立して行けない有様なのだ。外に有力な親戚でもあるかといふとそれもない。駈落ちをするにしても何處へ落ち付いて何うして生活を立てたものか。それが頗ぶる難問題だ。あれかこれかと知り人の頼れさうなものを物色したが、これぞといふものは見當らぬ。昔家に居た奉公人の金榮といふのが大さう感心な男だと、よく亡父が言つて居たのを聞き覺へて居る。義理堅い親切な男だつたさうだからその男を頼る外あるまい。その後鎮江の呂城で農業に従事して居るといふことだからそれにしやうと考へを決めた。二人で訪ねて往つても世話が出来ぬと薄情なことはいはぬであらう。その明方五鼓の聲の聞へる頃、旅仕度といつても別にない、慶娘と二人、極めて輕装で呉の屋敷を脱け出した。

二人は船を傭つて瓜州の渡し場から楊子口を渡り、鎮江縣の丹陽まで往つて、土地の百姓に尋ねて見た。如何にも金榮といふ家がある。大さう有福な暮しで、人望もあり、その村の庄屋をして居るといふことであつた。頗る有望だ。興哥は大いに喜んで眞直ぐその家へ往つて見ると、主人は一向覺へがないので取り合はなかつたが、父の官職姓名から郷里のこと、興哥自身の幼名を名乗つたので始めて舊主人の子と判り、崔氏夫婦が客死したと聞き、改めて位牌を祀り、興哥を上坐に直し、主従の禮を執るといふ騒ぎ。

『これは家の若旦那だ』

と下へも置かず款待してくれる。慶娘と共に屋敷を脱けて來た事情を打ち明けたので、金榮は特に表坐敷の上等の部屋を明けて二人の居間に供し、舊主に事へると毫も異らず、衣食萬端悉く念を入れて、何一つ不自由なく世話をしてくれた。

榮の家に世話になりやがて一年ばかりも経つて見ると、女は俄に我家が戀しくなつて來た。

『お父さんやお母さんに見付かつて叱られるのが怖かつたから、あなたと卓文君のやうな駈落ちをしたんですわね。全く已むを得なかつたのですわ。けれども時の經つといふものはほん

とに早い、もうかれこれ一年になりますものね、子に對する愛情つてものはどんな人間だつに同なんですから、今わたし達が歸つて往つたら、どんなにか喜ぶだらうと思ひますわ。歸つて見ませう。きつと今度は叱るやうなことはないでせう。親の恩程有難いものは人間にはないんですから、とう／＼親を棄て、了ふなどいふことはよくないと思ひます。ねえ歸つて見ませんか』無理のない話である。興哥はその言に従つて歸ることにした。再び楊子江を渡つて郷里の城下に入り直ぐ家の前まで船が着くと、女は此ういつた。

『一年も駈落して居て、今づう／＼しく二で人往つたら、また叱られないとも限りませんね。あなたが先に行つて様子を見て來てくれませんか。わたしはそのうち舟から出る用意をしてゐませう』

興哥が出掛けやうとするとまた呼び止め、

『家へ行つて何か胡亂に思はれたらこれをお出さない』

といひ金鳳釵を抜いて興哥に手渡した。興哥はそれを懐にして屋敷へ歸つて見ると、吳の家族の者は驚き且つ喜んだ。防禦も聞きつけて玄關まで迎へに出る。いそ／＼として喜んで居る

ばかりか、如何にも恐縮さうに申譯をいふ。

「どうも相濟まなかつた。去年中は全く行き届かず随分いやな氣持だつたらう。君が餘所へ往かれたのも實は吾々の扱ひが粗末だつたからのこと、何共申譯がなかつた。どうぞ悪く思はぬやうにお願ひする」

興哥そこ申譯なく面目ない、たゞ平伏して顔も上げ得ず、只々恐れ入つて、

「相濟みません」

と繰り返す外に言葉もない。防禦は少し變だと思つた。

「君は一體どんな悪いことをしてさう謝つてばかり居るんだね。さつぱり判らないよ、マアわけを話してくれ給へ。俺には一向呑み込めないが——」

興哥は顔から火が出る程極りが悪い。が、結局言はずにしまうわけにも行かなかつた。

「ハイ誠に申譯ないことをいたしました。お嬢さんのお情に甘へて道ならぬことをいたし、御兩親の承諾もなく情交を通じたその上に、駈落をしてお嘆きをかけました。その後は田舎の方へ參つて一年ばかり隠れて居りましたので、遂手紙も差し上げず、永い間お嬢さんのお顔も見

れぬやうにいたして居りました次第、夫妻の情は無論深いには相違ありませんけれども、父母の御恩はどうして忘れられませう。只今お嬢さんをお連れして歸つて參つたので御座います。どうぞお嬢さんの御心情をお酌み下すつて、私共の罪をお宥し願ひたらう御座います。そして私共の結婚の希望を遂げさせて戴き、親の御慈愛を以つて新夫婦の家庭を平和に幸福に暮されるやうにさして戴きたう御座います。此れ以外には何も望みもありません。どうぞお願ひで御座います」

防禦はまたびつくりした。

「うちの娘は今病氣で寝て居るよ。可怪しいね。もう一年にもなるんだ。お粥さへ喉へ通らず、寢返りにさへ人の手を借りて居る程なのだ。そんなことがあるものか」

話は少々變になつた。興哥は恐らく家庭の體面上、娘が駈落ちを秘密にして、世間體を蔽ふ爲めにさういふのではあるまいかと思つた。

「イヤお嬢様慶娘さんは只今船の中に待つてお出ですから、どなたかお迎へをやつて戴きませう」

防禦には如何にも信じられぬ話だったが、興哥があまり眞面目にいふので、兎も角奉公人を船へ見にやつた。往つて見たが何も居なかつた。防禦は遂に腹を立て、此の書生何を出鱈目を言ふかと怒號り付ける、興哥はまた斷じて出鱈目でないといふ證據に懷から金鳳釵を取つて防禦の前へ差し出した。防禦は手に執つて見てまた更に驚いた。

『オ、これは亡くなつた娘興娘の葬の時棺へ入れてやつた品だ、どうして此處へ出て來たらう』不思議、二人は口を緘んで對い合ひ、たゞ目を据へて見て居ると、奥の病床に寝て居た瀕死の慶娘がガバと跳ね起き、つツと坐敷へ駈けて來て、父親の前へ頭を下げた。

『わたしは興娘で御座います。不仕合せなわたしは早くお傍を離れて了ひ、遠い野原へ棄てられました。崔家の若さんとの縁はまだ切れて居りません。わたしが今こゝへ參つたのは外ではありません、うちの妹慶娘をわたしの代りにして縁を繋ぎたいと思ふのです。わたしのお願ひを聽いて下されば、妹の病氣は直ぐ癒つて了ひますが、この願を聽かれなければ妹の命はもうこれきりで盡きて了ふから承知して下さい』

一家の驚きはいふばかりなかつた。その身體を見れば紛ふ方なき慶娘だが、その言ふ言葉か

ら舉動のすべてがすつかり姉の興娘なのだ。父親もぎよつとした。

『お前はもう死んだんぢやないか。また浮世へ來て人を惑はすとは怪しからんぢやないか』

『仰しやる通りわたしは死んだものに相違ありません。冥途へ參りましてから、私には罪といふものがなかつたので、召捕られることもなく、天上の女神后土夫人のお傍で書類扱ひの役を申し付かることになりました。浮世の縁がまだ切れなかつたので、特別に一年のお暇が出ましたので、崔家の若さんとの關係をこの休暇中に取纏めやうと出て參つたので御座います。』

父はこの物語を聞いて深く畏れ且つ感激し、願ひの通り許してやると、父の前へ丁寧な辭儀をし、向き直つて興哥の手を握り、一しきり歎いて別れを惜んだ。

『お父さんお母さんからお許しが出ました。よく面倒見て下さい。けれどもあなた、新しい人があるからと故人を忘れちゃいけませんよ』

わツと聲を上げて泣き倒れた。視ると死んで居る。急に大騒ぎをして水や藥を含ませると、しばらくし甦り、病氣は拭ふやうに癒つて了ひ、すべての舉動が平常通りに復して居る。今までの事を訊ねても本人は少しも判らず、たゞ夢のやうな氣持だつたといふのであつた。

興哥と慶娘とは日を選んで結婚式を挙げたが、興哥は興娘が亡き後まで自分を想つてくれる愛情に深い感激を有つて居たので、婚約の印であつた金鳳釵を賣つて鈔二十定（鈔五十兩が一定に當る）の金にし、全部を投じて興娘の追善費に充て、瓊花觀（道教の寺）へ參詣し、道士を頼んで三日間の追善供養を行ふと、ある夜興哥の夢に興娘が現はれて懇に禮をいつた。

『立派な追善をして戴いて、あなたのお情はしみじみ嬉しう御座いました。草葉の陰からお禮を申します。妹はおとなしい子ですから、どうぞ可愛がつてやつて下さい』

はッとして目を覺したが、その後は遂に何事もなくなつた。實に不思議な話もあるものだ。

聯芳樓記

至正の初年、蘇州城西の閶門外に手広い米問屋を營んで居る薛といふ大金持があつた。二人の娘があつて、姉は蘭英、妹は蕙英と呼び、揃ひも揃つて滴たるばかりの美貌の上に、非常に聰明な生れで、學問といひ詩歌といひ當代遙かに群を抜く才媛だつたので、父親の鼻の高さは思ひ遣るべきものであつた。二人の娘の部屋として、特に屋敷の裏の方へ數寄を凝した一樓

を建て、樓名を「蘭蕙聯芳之樓」とつけたのであつた。

その頃承天寺の雪窓といふ和尚が水墨の蘭蕙を書くことに妙を得、えらい名聲だつたので、聯芳樓落成の時、特に和尚を請じ、四面に美しく塗り上げた壁へ蘭蕙の筆を揮つて貰つた。一度この樓上へ登つて見ると、藹然として春風の室に入るが如くであつたといふ。蘭英、蕙英の二人はいつもこの樓上に詩歌吟詠を楽しんで居た。二人の作つた詩の數は數百首の多きに上り、それを編輯して聯芳集といふ詩集を出したことがある。非常な評判で、好事家連は競つてその集を傳誦したものであつた。

その頃會稽に楊鐵崖といふ有名な詩人があつた。その作『西湖竹枝曲』といふのが非常な傑作で、その詩に隨つて和詩を作つたものが百餘人もあり、それを纏めてある書肆から出版したので、二女はその詩集を見て笑ひながら此ういつた。

『抗州に竹枝曲があるんなら蘇州にだつて竹枝曲がないつてことはあるものですか』

楊鐵崖の詩の體裁をそのまゝ取つて『蘇臺竹枝曲』といふのを十章作り上げた。

蘇臺竹枝曲

姑蘇臺上月團圓
月落西邊有時出

姑蘇臺下水潺湲
水流東去幾時還

館娃宮中麋鹿遊
香魂玉骨歸何處

西施去泛五湖舟
不及真娘葬虎丘

虎丘山上塔層層
納伴燒香寺中去

夜靜分明見佛燈
自將釵釧施山僧

門泊東吳萬里船
寒山寺裏鐘聲早

烏啼月落水如烟
漁火江楓惱客眠

洞庭金柑三寸黃
東南佳味人知少

笠澤銀魚一尺長
玉食無由進尚方

荻芽抽筍棗花開
早起腥風滿城市

不見河豚石首來
郎從海口販鮮回

楊柳青青楊柳黃
妾似柳絲易憔悴

青黃變色過年光
郎如柳絮太顛狂

翡翠雙飛不待呼
生憎寶帶橋頭水

鴛鴦竝宿幾曾孤
半入吳江半太湖

一縞鳳髻綠於雲

八字牙梳白似銀

斜倚朱門翹首立 往來多少斷腸人

十

百尺高樓倚碧天 闌干曲曲畫屏連
儂家自有蘇臺曲 不_レ去西湖唱採蓮

姉妹の作はその他のもみな立派なもので、大いに稱讃されたものだ。如何にその詩才の秀でゝゐたかといふことが判る。楊鐵崖がこの姉妹の詩稿を見て感心し、自から筆を執つて詩稿の後に左の二首を書いたのであつた。

綿江只說薛濤牋 吳郡今傳蘭蕙篇
文采風流知有自 連珠合璧照華筵

又

難弟難兄竝有名 英英端不讓瓊瓊
好將筆底春風句 譜作瑤箏絃上聲

それが爲めにまた更に名聲を高くし、漢の班婕妤、蔡文姬の再来かも知れぬ。李易安、李淑真

以下の者は足許へも寄れないなど、遠近で評判を傳へたものであつた。

蘭、蕙の居る聯芳樓は官河の上に、さながら架け渡したやうに建てゝあるので、河を通る船はいづれも樓下に漣を刻んで通る。薛家の店の關係でそこへ着けてある船も尠くはない。その船のうちに鄭といふ崑山縣の素封家の倅の船も交つて居た。鄭生は眉目秀麗、氣韻溫雅の實に立派な青年で、その父が薛家の主人と、かなり親交の仲だつたところから、殆んど親類の子かなぞのやうに親しく往來し、現に薛家に假寓してこの附近の商ひに従事して居たのであつた。折しも眞夏のこと、鄭生は素裸になつて船首へ立ち出て、好い氣持に行水をつかつて居ると、樓上には蘭英、蕙英の二人が窓を開けて涼風を入れ、チラと樓下の船に逞しい肉體を洗つて居る青年を覗いたが、やがて荔菱二つを取つて青年の目の前へ投げ下した。鄭生はふいと仰いて見ると、蟲々として天に聳ゆる高樓は、曇を雲に陳ねたかと思まからばかり、荔菱を投げかけた人の心はたしかにそれと察しられたが、身に翼の生へぬ限り、どうして縹緲たるかの天界に接近することが出来やうか、殆んど望み得べからざることゝ考へて居た。

その晩、世間はしんとして寢靜まり、月は西に沈み銀河は斜に傾いた頃、萬籟聞としてたゞ

舷を洗ふ漣の微かな囁きを聴きなから、鄭生は一人舷へ出て、ぼんやりと佇んで居た。朧げな期待が咬るやうに心を動かして、いつものやうな穩かな眠にはどうしても就けなかつたのだ。すると頭上の高樓に何か囁くやうな聲が幻覺のやうに響いて來た。振り仰いで瞳を凝らすと、樓上の二美人が長い綱のやうなものを下して居る。目の前に降りたのを見ると、それは鞆繩に用ゐる索の先に一つの大きな竹籠を括つて下げたのであつた。鄭生は夢中でその籠へ飛び込むと、索は次第に手繰られて、忽ち樓上の窓から蘭蕙二人の居間へ引き入れられた。互に見た男女は、喜び極つて殆んど物言ふことも出來ず、ともに携へて寢に入り、意のまゝに繾綣の情を盡したのであつた。その夜姉の蘭英は鄭生の爲めに歡懷一詩を吟詠した。

玉砌雕欄花兩枝 相逢恰是未開時
嬌姿未慣風和雨 分付東君好護持

蕙英も一詩を吟した。
寶篆烟消濁影低 枕屏搖動鎮帷犀
風流好似魚游水 纔過東來又向西

曉方になると鄭生はまた例の竹籠で船へ下りて來た。それ以來夜るになれば必ず樓上から竹籠が下りて來る。一夜として竹籠の往來の絶へたことはなかつた。そして二美人が生の爲めに吟詠した詩の數も頗る多かつた。一々こゝに掲げるに堪へない。たゞ鄭生はそれに對し一度も詩で答へたことがないので、心竊かに耻ざるを得なかつたが、ある夜机の邊りに美しい剡溪の玉葉牋があつたのを見て、筆を執つて始めて一首の詩を書いた。

誤入蓬山頂上來 芙蓉芍藥兩邊開
此身得似偷香蝶 遊戲花叢日幾廻

二女は始めて詩を貰つたので非常に喜び、丁寧に篋笥の中へ藏ひ込んで寢に就いた。鄭は快く身を横へながら、また一首を望むと、枕に就いたまゝ蘭英が先づ

連理枝頭竝蒂花 明珠無價玉無瑕
と吟じ、蕙英が直ぐにそれを引取つて

合歡幸得逢蕭史 乘興難同訪戴家
と續け、更に蘭が

羅襪生塵魂蕩漾 瑤釵墜枕鬢髮

と咏むと、蕙が直ぐに結句を付ける。

他時泄漏春消息 不悔今宵一念差

見事な一篇の律詩が出来上つた。

ある夜例の如く歡洽の後、鄭生悵然として嘆息した。

「僕は今旅行先でああなたのお父上の厚意を受けてこの屋敷内へ泊めて貰つて居るのだが、かうしたことがまだお父上の耳に入らぬから好いやうなもの、一旦これが發覺したらお五の逢ふ瀬はもうそれまで、陳の樂昌公主が飽かぬ分れに鏡を分けたやうな悲劇に到達するだらう。或は晉の雷華が延平津の水に劍の行方を尋ねたやうに、再び元に戻る事が出来なくなるかも知らぬのだ。情けないことだ」

聲を飲んでしばらくと涙を滂した。けれども蘭と蕙は少しも悲觀しなかつた。

「わたしはつまらない者ですけれど、自分のことはよく考ひて居ります。女ながらも一通りは學問の道も心得て居るつもりですから、隠れて男と逢つたりしては良くない。操は飽くまでも

堅く守らねばならぬといふことも存じて居ります。けれども秋月春花のなやむ心の目覚めですもの、雲情水性の青春の血は壓へやうとしても、それは堪へるところでなかつたのです。宋玉の牆を窺ひ、卞和の璧を獻じて、わたしの方からあなたを誘惑したのです。そしてあなたがわたしの愛を受け容れて下さつたのですから、形式はどうでも、事實は結婚以上に有力な確實なものぢやありませんか。將來は永くあなたのお側に侍いて幸福な家庭を造りたいと、そればかり願つて居りますのに、突然そんなことを言ひ出して、自分で自分の戀の成功を呪ふなんてことがないぢやありませんか。——あなた、あなた、わたし達は女でも非常に堅い決心があるのですよ。お互の秘密が何時か露れるやうなことがあつて、兩親からどんなに叱かれても、ちつとも懼れはいたしません。わたしを鄭さんと結婚させて下さいと、はつきり兩親に頼むだけです。わたし達のこの決心が遂げられなかつたら、此の世ではお目に掛りません。どんなことがあつたつて餘所の家へお嫁になど往くものですか」

吐露された驚くべき熱情に、鄭生は燃ゆるばかりに感激したのであつた。

その後幾もなく鄭生の父から薛家の主人へ宛て、悻が早く還るやうに傳へてくれといふ手紙

が来た。鄭生は既に商用の豫定期間の如きは全然無視し居たのである。蘭、蕙の父薛氏は手紙の趣を傳へて直ぐに歸郷するやうに勧めたが、鄭生はぐづぐづして居て、一向出發しさうな様子もない。頗る怪しいと感付いたので、ある日聯芳樓へ上つて見ると、娘の手函の中に鄭生の詩が藏ひ込んであるのを發見した。薛氏は非常に驚いた。しかし事此に及んでは奈何ともいたし方がない。いろ／＼考ひて見るに鄭生は立派な青年だし、地位家柄としても互に相當して居る。事を激して不測の變を醸しては青年男女の將來を破壊するやうなものだとも考へた。若い者共の希望を遂げさせてやりたいといふことを手紙に書いて鄭生の父に遣ると、鄭生の父も毛頭異存はなかつたので、茲に改めて媒酌人を介して兩家の好みを通じ、一般慣習のとほり、問名、納采など所謂六禮の儀式手續を完了して、鄭生は目出度く薛家の婿となつたのであつた。その時鄭生の年は二十二、長女蘭英は二十、次女蕙英は十八であつた。當時蘇州城下の人達は、大抵三人の關係の成り立ちを知つて居たので、非常に興味ある珍らしい話として物に書き載せるなどいふ好事家さへあつたさうだ。

剪燈新話

第二卷

山陽 瞿佑 宗吉 著

令狐生冥夢錄

令狐讓といふ男は非常に剛直な男で、一種の豪傑風の肌合であつた。生れてこの方神、佛などといふものを信じたことがない。神靈上の問題は一切信を置くに足らぬといふ極端な無神論者だ。自負が高いから世間の者がすべて馬鹿に見える。死んだ者の幽霊だとか、狐狸その他の變化だとか、乃至因果應報の話などをすると、頭からヤツつけて了ふのであつた。

讓の隣りは烏老といふ指折りの大金持で、しかも貪求飽くことを知らず、己が懐の肥へることなら如何なる手段でも擇ばない。義理人情には三文の價値をも認めぬので、その慘虐無慈悲なことは三尺の童子も慄ひ上るといふ位であつたが、ふとした病氣であつけなく死んでしまつた。ところが不思議にもその因業爺は三日目に甦つたので、近隣の者は更に目を睜つた。ある者がその奇蹟的な甦生に就いて本人に訊ねて見ると、老爺は此う答へた。

『わしが死ぬと遺族の者共が金を惜まらず佛事供養をして、澤山の紙錢を焚いたため、冥官達が下さう喜び、誠に神妙の至りとあつて、また娑婆へ還されて來ましたよ』

これを聞いた令狐讓怒るまいことか

『俺は現在の悪官吏共を怪からんと思つて居た。彼等は己れを肥す爲めには天下の法令を曲げる。相手が金持なら賄賂を取つて助けてやる。貧乏人なら賄賂が取れぬから軽い罪も重くする。然るに所謂冥途の役人がそれ以上の收賄をやるとは何事か。』

彼れはいよく鬼神幽冥のことが嫌やになり、憤慨の餘り一詩を賦した。

一 陌金錢 便返魂 公私隨處可通門
 鬼神有德開生路 日月無光照覆盆
 貧者何緣蒙佛力 富家容易受天恩
 早知善惡都無報 多積黃金遺子孫

詩が纏まると大いに得意になり、自から高らかに數回朗吟して見た。

この夜明るい燭の下に獨り悠然と坐つて居ると、突然二人の鬼の使が現はれた。ゾツとする程瘴惡なものだつた。ツツと讓の前に進み寄り

『冥途より追つ立ての使である』

といふ。その場に召し捕らうとするので、譚は大に驚き、逃げ出さうとしたがその時は早くも一人の鬼に着物を攫まれて了い、他の一人の鬼は帯に手を掛ける。ぐいぐいと門から押し出されたが、もう足は地に着いて居ない。あわやといふ間に地獄の大門へ到着して了つた。地獄の大官府といふのは世間の諸官廳と殆んど同じ様な構造で、頗ぶる嚴肅なものだつた。二人の鬼に拉せられて門を入ると、遙か殿上に王者の如く嚴めしい人が、我々たる冠を戴き、机を前に控へて居るのが見える。鬼共はその堦下まで譚を引き出してぐいとそこに引き据へ、畏るる堦上の王者に報告する。

『仰せに遵ひ令狐譚を召捕つて参りました』

すると王者は破れ鐘のやうな厲聲を譚の頭上に浴びせた。

『その方日頃儒者の書籍を読みながら、自ら守り慎しむことを知らず、以ての外な放言をいたして、我が冥府を悪し様に觸らす、不届至極のうつけ者め！。犁舌地獄(舌で耕作の勞役に服する地獄)を申し付ける』

宣告があるとぞろ／＼數人の鬼共が現はれて、否應言はさず手足や髪の毛を掴んで引き摺り

出り出さうとする。絶對絶命の場合、手近かの欄干に武者振り付いてどうしても離れない。とろ／＼欄干がめり／＼と折れて了つた。

『拙者令狐譚は人間の儒者だ。残念、罪もないのに刑に處されるのか。天の神様があるならばこの無實を晴して下さい』

譚は命限りの悲鳴を揚げた。すると殿上で綠色の上衣に笏しやくを持った者が王に獻言した。この冥官は明法といふのなさうだ。

『この者は元來人の秘事を發くことが好きな奴ですから、たゞ申し渡しだけでは服罪しさうもありません。一通り彼れの供述を取つて、嚴重にその犯狀を追窮し、いよ／＼辨解のない處まで罪を正さるゝが宜しいと存じます』

『それも尤もだ』

王は直ちにその言を容れて下役を呼ぶと、一人の獄吏が堦下に引据へた譚の前へ紙と筆を突き付けた。

『さアその方申し立ての次第あらば書き上げろ』

けれども譏はたゞ罪を犯した覺へがないといふ外に、別に何と書きやうもない。じつとして居ると、また殿上から例の破れ鐘聲

『その方飽く迄で罪の覺へはないと言ひ張るか。あの』一陌金錢便返魂、公私隨處可通門』といふのは一體誰が言つたのだ』

譏は成る程と始めて冥府へ拘引の事情に合點が行つたので、卽座に筆を執つて墨痕淋漓と口供を書き付けた。

伏して以みれば混淪たる二氣初めて天地の形を分ち、高下三才、鬼神の數を列せず。

中古よりこのかた始めて多端を擧め、幣帛を焚き以つて神に通じ、經文を誦して以つて佛に諂ふ。是に於いて名山大澤威靈あり。古廟叢祠また主者多し。蓋し以ふに群生昏塾、衆類冥頑、或は惡を長じて以つて悛めず、或は凶を行つて而も自ら恣なり。強を以つて弱を凌ぎ、富を恃んで貧を欺。上は君親に孝ならず、下は宗黨と睦しからず。財を貪り義に悖り、利を見て恩を忘る。天門高ふして九重知ることなく、地府深ふして十殿これ列なる。剉燒春磨の獄を立て、輪廻報應の科を具し、善を爲すものは勸めてます〜

動め、惡を爲すものは懲して戒めを知らしむ。法の至密、道の至公と謂ふべし。然るに威令の行はるゝ所、既に前に瞻て後に仰ぐ、聰明の及ぶ所、反つて小に察々にして大に遺る。貧者は獄に入りて殃を受け、富者は經を轉じて罪を免れ、たゞ傷弓の鳥を取つて毎に吞舟の魚を漏らす。賞罰の條是の如くなるべからず。譏が如きに至つては三生の賤士一介の窮儒なり。左枝右梧するも兒の啼き女の哭するを免がれず、東塗西抹するも命塞まり時乖くを救はず。偶不平を以つて鳴り、遽かに多言の咎を獲て、臍を嚙むも及ばざるを悔え、尾を揺かして憐を乞ふことを耻づ。今その罪名を責むるを蒙り、その狀伏を逼らる。龍鱗を批ち龍領を探り、豈敢て生を求めんや。虎頭を料り虎鬚を編む、固より禍を受くることを知る。言此に止む伏して乞ふこれを鑒せよ。

王は一通り譏の口供書を読み、また改めて判決を下した。

『令狐譏の主張するところは頗る正しいものだ。これは罪を加ふべきものではない。健氣にもその志を秉つて忤けないところが感心だ。矢鱈に暴威を以つて壓迫することは宜しくない。今この陳述は相當に道理あるものと認めることが出来る。この者は特に放免して尙ほ世間に知ら

れぬ正直なものを推彰する意味を知らしむることにいたせ』

同時にまた獄卒を派遣して因業爺の烏老を召捕り、直ちに入獄を申し付け。譚には再び二人の使を付けて家へ送還することになった。

無罪を宣告されたので、譚は身も心も急に軽々として。護送の獄卒と打ち解けて話も出来る。

『拙者が娑婆での商賣は儒者なので、地獄といふものは事實無いものだと言は打ち消して居たが、只今此處へ来たのを幸い、一寸見物して往く譯には行くまいか』

『見物したいなら雑作はないが、それには一應地獄取締りの書記官に断はらなくちやならないね——こちらへ来て見なさい』

二人の獄卒は譚を案内して西の廊下を廻つて行く。そこには別棟の廳舎があつて、山のやうに積んだ書類の真中に、所謂取締りの書記官が控へて居た。二人の者から譚の希望を申し入れると、書記官は監札のやうなものへ朱書で何か書き付けて手渡した。書いた文字は遙か上古の篆籀文字のやうな形で、何が書いてあるか判讀さへも出来ないものだつた。

その廳舎を出て北へ一里ばかり行くと、雲を衝くやうな鐵の城廓が巍巍として聳へ、黒い霧が物凄く天に漲つて居る。守衛らしい者が大勢居て、それがいづれも頭は牛、顔は鬼、身體の皮膚は一面に青く、紺色の髪をばざとして逆立て、手には槍や鉞のやうな兇器を執り、門の附近に或は坐つて居る者もあり、或は立つて居る者もある。二人の番卒が例の鑑札を出すと、鬼共は『宜しい』といつて通らせた。

門を入つて見ると如何にも慘憺たるものだつた。無数の罪人がごろ／＼して居る。皮を剥ぎ取られつゝある者や、全身を刺されて血を流して居るもの、心臓を割かれて居るもの、目を抉られて居るものなどが、凄いばかりの悲鳴を揚げてその邊りにのた打ち廻り、泣き叫ぶ聲に大地が震いて居る。ある所には二本の銅柱があつて、その上に男女二人を縛り上げ、下には夜叉がゐて大出刃を揮つて男女の胸を切り割り、流れ出る臟腑や腸へ沸々とわいて居る熱湯を沃ぎかける。これは洗滌地獄といふのであつた。譚は目を背けた。

『これはどういふのですか』

『この男の方は娑婆に居る頃醫者が職業で、この女の夫の病氣を治療に頼まれた際、二人が不

義をしたのです。その病夫は遂に死んで了つたのだが、二人が手を掛けて殺したのでないといひながら、悪むべき心情を推して罪を調べると、事實殺したと同様なので此ういふ仕置きを受けるのです』

次のところでは坊主や尼が丸裸にされ、鬼共が牛や馬などの皮を被せて追ひ立てゝ居る。これは皆畜類になるところなので、中にはぐづ／＼して畜類になりたがらぬ者もあり、それ等は鐵の鞭でピン／＼撲られて居る。流れる血潮は狼籍として目も當てられない。

『これはどういふのですか』

『この奴原は娑婆に居た時田畑の耕作もせず織物裁縫をするでもなし、それで遊んで衣食をして居りながら、少しも佛の戒律を守らず、女に戯れたり生臭物を食つたり、破戒無慚の行が多かつたので、これから畜類にして人間に追使はれることになるのです』

最後に突き當りのところへ行くと、特別の一仕切りになつてゐて、門には『誤國之門』と書いてある。數十人の者が鐵の床に坐らされ、身には嚴重な桎梏てかせあしかせを掛け、青石の枷くびかせでぐい／＼と壓し潰されて居る。二人の獄卒はその内の一人を指し、譔を願みて説明してくれた。

『この男は宋の時の秦檜しんくわいですよ。忠義な者は計略に陥して殺して了ひ、天子の心を晦まして朝廷を没落させたその報ひで、此うした重罪に行はれるのです。その邊にごろ／＼して居るのもみな一國を誤つた奸臣共なので、國家の革命があるとその度にこの奴原を驅り出して、肉を毒虫に咬ませ、骨は飢えた鷹に啄つかせ、ひき肉のやうに碎けたところへ、神水をふりかけて業風に吹き晒すと、また本の形に返るのです。幾度となくそれを繰り返すので、何億萬年にも此の奴原は世に出ることは出来ません』

譔はうんざりしてもう歸らうといひ出すと、二人の獄卒はわざ／＼家まで送り届けてくれる。やゝ恐縮した。

『送つて貰つちや御苦勞ですな。何もお禮のしやうはないが——』

二人は笑つた。

『イヤお禮の御心配はいらないが、あの詩を作ることだけ止めて下さい。どうも厄介ですからなハ、ハ、ハ、』

『ハ、ハ、ハ、』

大笑ひに笑つて欠伸をし、氣が付いて見るとすべて一場の夢だつた。夜が明けてから隣りの烏老の様子を聞かせると、その晩三更頃、また突然死んで了つたといふことであつた。

天臺訪隱錄

台州の徐逸は一通り學問の素養もある男だつた。五月節旬の日に天台山へ遊山に出かけた。所謂採藥である。名にしおふ山道の險峻に同行した數人の者はへとくになつて了ひ、中途から還つて了つたが、逸だけは山の景色の秀抜にして、泉水樹影の幽邃な趣きに恍惚として了ひ、小憩することも忘れてづんく奥へ進んで往つた。有名な孫興公の『天台山賦』などを朗詠しながら、迢々たる山路を辿る愉快さは譬ふべきものがない。

赤城霞起而建標 瀑布泉流而界道

『全くその通りだア』

逸は我れを忘れて峻坂に歩を進めて居たが、更に一里(邦里)ばかり來たと思ふ頃は、日は西

に落ちて梢には鳥の宿りを求める聲が淋しく聞へて來る。彼れは始めてあまり深入りし過ぎたことに氣が付いたが、進んでも果して到達するところが判らない。歸るにも遠い山路をどうしたものだらう。甚だ當惑してぼんやり澗間を眺めて居ると、大きな瓢が流れて來た。彼れは家の門を見た程に喜んだ。

『これは村があるに違いない。村はないにしても道士の往居か山寺かゞあるに決つてる』

俄かに勇を鼓し、澗間傳ひにまた十丁ばかり分け登ると、忽ち立派な往來に突き當つた。大きな石の門があつて、それから數十歩内へ入ると、眼界はからりと開け、いかにも廣々とした村に四五十軒の人家が散在して居る。住民の風俗を見ると、冠や衣裳付きすべてが非常に古風なもので、氣質も極めて淳朴で些しも卑しいところがない。家は石を積み上げて茅の屋根を戴せ、荆の墻竹の扉といふ簡素なものだ。犬や鶏の聲も長閑かな氣分を湛へ、桑や麻などの畑が一面に廣がつて、立派な一つの村落をなして居る。

村民共は珍らしい風采の逸を見て大さう驚いたらしい。

『あなたは何ういふ方です、吾々の村へ踏み込んで來て——』

頗る穩かならぬ顔である。逸は藥を探りに山へ登り、道に迷つてこゝへ來たのだと事情を一通り話したが、彼等は互に顔を見合はせて、一言も語らず、全然取り合つてくれなかつた。

中に一人の老人が居た。服装を見ると儒者のやうなところがある。藜あかぎの杖に縋つて逸の前に進み寄つた。自から太學陶上舍（國士監の入選監生の舊稱）だといふ。挨拶がなか／＼鹿爪らしい。

『この深山の險阻をどうして迷ひ込まれたのぢや。途中は虎狼や妖怪變化の往家ぢやに——もう日も暮れに迫つて居る。無下に斷つたら助らうとは思はれぬわい。マアこちらへ御座らつしやれ』

親切に自分の家へ案内してくれ、逸は深く感謝し、兎も角も老人の家へ落付いたが何となく腑に落ちないのはこの人里の存在だ。容を改めて老人に訊ねて見た。

『拙者はこの台州に生れ、この台州で成長し、この台州に今日まで住んで居るのですが、こゝに村が在るといふことは遂に聞いたことがありません。一體どういふ村なので御座いますか』
上舍老人はさつと眉に八字を寄せた。

『浮世のごた／＼を逃れた世捨人ぢや。今更過ぎ去つた時の話をして、たゞ嫌やな氣持ちに

なるばかりぢやからな——』

『でも御座いませうがどうぞお聽かせ下さう』

頻りに懇請したので上舍は始めて語り出した。

『わしは宋朝の時から此處に住んで居るのぢやよ』

逸はびつくりした。上舍は更に語り續けるのであつた。

『わしは宋の理宗皇帝の嘉熙丁酉（元年）の歲に生れたぢや。年頃になつて太學に籍を置き寄宿舍（そつりさい）の率履齋（そつりさい）に居て周易を講じた頃は、多くの人々から推賞されたものぢやつた。度宗皇帝の御代になつてから、兩回まで祭酒堂（さいしゆだう）の試験に首席を以つて級第し、禮部省（れいぶせう）の薦をも受け、これから大いに腕を揮ひ、世に顯はるゝ程の働きをしようといふ時に、度宗皇帝は不幸御他界あらせられ、朝廷の政治は皇太后が御攝行になる。北方よりは元の軍兵が江を渡つて亂れ入り、天下は申しやうなき混亂となつて了ふたぢや。當時四歳になられた若君が位に即かれ、年號を徳祐と改元された歲、わしは妻子を引連れて此處へ避難する。今の村の者共も皆その時諸共に避難して來た人々ぢや。長い間には心も落ち付き、田を耕し木の實を拾ひ、山へ行つては薪を探り、

井戸を掘つては水を飲む。藁屋を作れば雨露の難儀もなし、寒くなつたと思へばまた暑い時も来る。極めて伸びやかな月日を送つて居るんぢやから、花が咲けば春が來たと思ひ、葉が落ちれば秋ぢやな思ふ。——さうぢや今は何といふ朝廷で、年は何歳になつたのかな』

『畏くも只今の天子は睿聖文武に在し、元の朝廷の後を繼いで新たに國家を立て、中華の國を統一して國號は太明と稱へ、太歲闕逢(甲)攝提格(寅)に年號を洪武と改正して今年は丁度七年になるのです』

『ホ、オさやうか。わしは宋だけは知つて居るが、元の世といふのは一向知らぬことぢや。今は明といふなど、どうして知らうぞい。珍らしいことぢや。どうぞ客人。わしにその三代の移り變りを聞かしては下さらんか』

『されば、宋の徳祐丙子(度宗の子熈の二年)の年に元の軍隊が臨安へ亂入し、少帝熈を始め謝太后、全皇后の三宮は虜となつて北に遷されて了ひました。この年少帝熈の兄君廣王昞が海上に於いて位に即き、年號も景炎と改めたが、幾くもなく崩御されました。諡を端宗と申し上げたのが此の方です。次いでその弟君益王昚が位を繼いだが、忽ち元軍の爲めに追迫され、無殘入水して』

果てられた。それで宋の天下は遂に終りを告げたのであります。實に元朝の戊寅(世祖の至元十五年)の歳のことです。元は遂に宋を滅したので、南北を統一しましたが、至正丁未(順帝の年號二十七年に當る)の歳まで干支で一週り半九十餘年で滅び、即ち大明一統の御代となり、只今は實に洪武萬年の七年ですから、さやう宋の徳祐丙子の歳から今日までを數へると、彼れ是れ百年になるのです』

上舍老人はこの物語りを聽いてはらくと涙を落した。夜深く山氣靜まつて、萬籟寂然、話し聲の止んだ後は凄いばかりであつた。逸はその部屋へ泊めて貰うことになつた。土の床、石の枕ではあるが、すべてが整然として且ツ清潔なものである。逸は何となく心が澄み、冷氣骨に徹る感じがして、一晚とうく眠れなかつた。

翌る日は特に鶏を殺して羹を作つたり、黍の飯を炊いたり、非常な歡待しをしてくれ、瓦の盃に松醪の酒を注いで逸に飲ませ、上舍老人は金縷詞の曲を作り、自から歌つて興を添へ親しく逸に觴を侑めるのであつた。

夢覺黃梁熟 恠人間曲吹別調

棊翻新局 一片殘山并剩水

幾度英雄爭鹿 算到了誰榮誰辱

白髮書生差耐久 向林間嘯傲山間宿

耕綠野 飯黃犢

市朝遷變成陵谷 問東風舊家燕子飛歸誰屋

前度劉郎今尚在 不帶看花之福

但燕麥兔葵盈目 羊胛光陰容易過

嘆浮生待足何時足 樽有酒且相屬

歌が畢るとまた逸に酒をすゝめ、ちびり／＼やりながら、宋の時の話を始める。話すに従つて懐古の懐がますます濃かになると見へ、後から／＼いろいろのことを考ひ出して盡きるところがない。

『寶祐丙辰(四年)には理宗皇帝親から進士の試験をされたのだが、その時文天祥の答案は第四

番目であつたのを、皇帝が特に取り換へて首席及第にされたのぢやつたよ。

賈似道が政治を執るやうになつた時は如何様甚だしいもので、西湖の上葛嶺へ別莊を建て、の振舞などは話にならなかつた。世間では朝廷には宰相がないが湖上には平章があるといったものだつた。

こんなこともあつた、皇族出の方が嶺南縣の令に任ぜられた時、二羽の孔雀を献上したのであつた。野飼にされたが大さうよく馴れたので、飼養した男がその郡の太守にされたのだつた。襄陽が元兵の包圍を受けた時は酷ひ苦戦をしたものぢや。守將呂文煥が決死の勇士を募つて朝廷へ援軍を請ひ、その使に臘つめの密書を持たせたのぢや。その男は似道の面前へ出て熱心に援軍を願ひ求めたが、似道が平氣な顔をして居るので餘程業を煮やしたものと見へる。男のいつたことはなかく、勇ましかつた、今襄陽は包圍を受けて六年になり、糧食が全く絶へて了い城中の士民は互いにその子を取り換ひて食ひ、骨を折つて薪にてし居るといふ有様、且夕の間にも陥落するといふ急場で御座る。閣下は天下太平のやうに装ふて皇帝陛下を誤魔化して居られるが、一旦北夷の馬に大江で水を飲ませることになれば、國家は滅亡の外御座るまい。閣下は幾時

までその傲奢な振舞が出来ると思はつしやるかときめ付け、我が手で吭を締めて死んだのぢやつたわい。

謝堂といふのは皇太后の姪御ぢやつたが、偉い豪勢なもので、夜客を招んで宴會を開く時には水晶の簾を掛け、沈香の火で物を暖め、坐敷には燭といふものを點けず、燭りの代りに徑一尺の瑪瑙の盤へ大きな明珠四つを入れて置くのぢや。その珠の光の明るいことさながら晝のやうであつたと聞いて居る。席へ召された樂人共がお氣に召すやうな巧い歌で御機嫌を伺ふのぢや、氣に入つたとなると御殿に備へてあつた黄金七寶の酒甕重さ十數斤のものを即坐にお下げになる。少しも惜いやうな顔をなさらぬといふ。素破らしいものぢやらう。

その謝堂の伯母君謝皇后が政事を執られた時、此ういふ夢を御覽になつた。天が俄かに東南に傾ひて了ひ、一人の者がそれを攀へやうとするが、力及ばす度々腰が碎ける。三度まで踏ん張つて持ち上げたが、その時日が大地へ顛け落ちた。すると一人の者が駈け寄つてそれを差し上げて駈けて行くといふのであつた。謝后は夢が覺めてから、朝廷に仕へる臣下のうち夢で天日を捧げた人に似たものがないかと、悉く調べて見ると、天を攀へた一人は文天祥で日を捧げ

た一人は陸秀夫だつたといふことぢや。この二人は直ぐに特別の拔擢を蒙つた。

江萬里が賈似道の暴虐に愛想を盡かして國を去つた時は、都の上下の者千餘人が市外まで見送り、別れの惜しさに車に取り付いて離れなかつた。その内に城門が閉まつたので、その人人はみな野宿したのぢやつた。

賈似道が全軍指揮の爲めに出陣した時の騒ぎはいらかつたよ。白銀の鎧を着け眞珠の鞍を置き、千里の馬を二頭まで牽かせたのぢや。一頭の馬には總督府の印章を負はせ、一頭の馬には軍令を書く料紙や、陣中行賞に用ゐる書類などを負はせたのぢや。その荷駄の上には黄絹の蔽いを掛るといふ仰山な趣向、その日市民共はみな商賣を放つて出陣見物に出るといふ前古未聞の馬鹿々々しい出陣ぢやつたわい。』

上舍老人は頻りに興奮して、最後にはその當時の人物批評をした。

『陳宜中は肚に智謀はあるが、果斷に乏しい。家鎮翁は如何にも精神の立派な男ぢやが、融通の利かぬのが困る。張世傑は誠に驍勇な男ぢやが目先が見へない。李庭芝は才走して見へるが結局要領を得ぬ男ぢや。マア中で取り別け優れて居ると思はれるのは文天祥一人ぢやな』

實に滔々數百言、如何にも善く話す。しかもそのいふことが一々肯綮に中るものであつた。逸はその晩もまた泊り込み、その翌る朝暇を告げると、老人はまた古詩一篇を作つて、「これは錢別ぢや」といつた。

建炎南渡多翻覆
泥馬逃來御黃屋
盡將舊物付他人
江南自作龜茲國
可憐行酒兩青衣
萬恨千愁誰得知
五國城中寒月照
黃龍塞上朔風吹
東窓計就通和好
鄂王賜死斬王老
酒中不見劉四麻
湖上須尋宋五嫂
累世內禪罷言兵
八十餘年稱太平
度皇晏駕弓劍遠
賈相出師笳鼓驚
携家避世逃空谷
西望端門捧頭哭
毀車殺馬斷來蹤
鑿井耕田聊自足

南隣北舍自成婚
遺風彷彿朱陳村
不向城中供賦役
只從屋底長兒孫
喜君涉險來相訪
問舊頻扶九節杖
時移事變太匆忙
物是人非愈悵悵
感君爲我暫相留
野藪山穀備獻酬
舍下鷄肥何用買
床頭酒熟不須芻
君到人間煩致語
今遇昇平樂安處
相逢不用苦相疑
我輩非仙亦非鬼

上舍老人はわざ／＼村の外れまで送つて来て、名残惜し氣に袂を別つた。

逸は歸る途すがら、五十歩位づゝ置きに一本の竹の技を挿して道の目印しを付けて來たのであつたが、四五日経つてからお禮がてら再び上舍老人を訪れやうと、上等の酒を買ひ、澤山の珍味を調ひて下男共に擔はせ、天台山の奥を指して攀ぢ登つて見ると、亂峰重疊、峻坂削るが如く、何處を何う通つてよいか判らない。行くては鬱蒼たる樹木と丈なす艸叢に蔽はれて、

目印に挿した竹の枝も果して何處であつたか見當さへも付かなかつた。樵夫や牧童が通つたかと思はれる靡げな小徑を見付けて行つて見ると、谷の鳥の悲しげに鳴く聲と、嶺の猿の哀れな叫びを聴くのみで、何としても曩の村落への道は見付からない。逸は非常に失望し、惆悵として我家へ引き返した。

考へて見ると上舍老人自身の言ふところでは、宋の理宗皇帝の嘉熙元年に生れたといつたから、現在までには百四十年の長い年月を経過して居るのだ。それで居て顔形の様子などもまだつや／＼として衰ろいた様子もなく、言葉遣ひまでもなか／＼上品なそしてはきはきして居るばかりか。記憶力の明確なこと、宋朝の當時目撃したといふことを掌を指すやうに喋舌るところなど、何う見ても五六十格好の年にしか見へなかつた。やはりあれは有道の流、仙人などいふたぐひのものだらうと想像された。

滕穆醉遊聚景園記

元の仁宗の延祐の初年、永嘉縣に滕穆といふ青年があつた。年は二十六、風采容貌なか／＼

瀟洒たるもので、且つ詩歌にも巧みなところから、土地の青年間には大いに評判の才子であつた。彼は臨安(杭州府)は山水の景色も佳し、賑かでもあり、非常に好いところだと聞いてゐたので、かねてから一度ゆつくり遊びに往つて見たいと考へてゐたのであつたが、丁度元年甲寅の歳に文官登用試験の詔書が發布され、穆は地方からの推薦をもつて臨安の試験に應じることゝなり、幸に日頃の望みは達せられることゝなつた。

いよ／＼臨安の城下へ出た穆は、城の西門湧金門外に假寓して、南、北の高峯を初め、西湖の有名な諸寺院へ毎日のやうに往來し、靈隱、天竺、淨慈、寶石等の諸刹から、玉泉、虎跑、天龍、靈鷲、石屋の諸洞、冷泉の亭など、あらゆる名所古蹟、幽間深林、懸崖絶壁の景勝は足跡の及ばぬところなく、殆んど見つくして了つたのであつた。

たま／＼七月十五日の晩、西湖十景の一、蓮の名所麴院が宿から手近のところだつたので、ぶら／＼涼風を追ふて往つて見た。なる程佳い所だ、折から月は晝のやうに明るく、甘いやうな蓮の香は満身を包んで忽ち縹緲の世界へ持つて行くかと思はれる。水の面を見れば大きな魚が波の間を縫ふて躍り、岸を見れば濃緑の梢の間に涼しき聲を鳴いて飛び交はす。その晩は昔

五代の時吳越王錢氏が建立したといふ有名な南皮園の雷峯塔下に舟を寄せて、舟の中に泊ることにしたが、先程から大ぶ飲んだのでひどく酔が廻はり、横になつて見たが何となく息苦しくて寝つかれない。着物を引掛けてまたぶら／＼歩行き出した。土堤傳ひに夜風に吹かれる心持はまた形容すべからざるものである。冴えた月下の景を貪り觀ながら、聚景園へ往つて見やうと志した。

脚に任せて園内を逍遙する。當年の壯麗はすばらしいものであつたらうが、南宋亡びて已に四十年、會芳殿、清輝閣、翠光亭などの輪奐の美はたゞ人の口牌に遺るばかりで、園中の有名な大建築物は悉く頽れて了つた。たゞ瑤津の西軒だけが巋然として獨り榮華の昔を物語つて居る。滕生はその西軒の欄干に凭れ、恍惚として冥想に耽つてゐた。

するとやはりその夜の明月を賞する人か、一人の美人が先に立ち、一人の侍女が後へ跟いて、靜かに歩みを運びつゝ園内へ入つて來る様子である。滴たるばかりの黒髪を氣高かく結び、あでやかなその姿はさながら神仙（支那では美人の形容に直ぐ神仙といふ言葉を使ふ。吾が國で小野の小町か衣通姫といふやうなものだ）のやうに美しい。一體何處へ往つて何をするのかと、滕生は椽先

に出て息を殺すやうに注視してゐると、美人は如何にも感慨深さうにかこつのであつた。

『水の色も山の姿も此うして見れば少しも變りないのに、年が經ちまた朝廷も變つて了ふと、此うも情けなく荒れ果て、御殿や役所の跡方もなくなつて了ふ。昔周の大夫が舊き都を嘆いた黍離の詩の悲しみも、オ、しみ／＼思ひ知られる』

そのまゝ園の北側へ廻つて行く、西湖の岸の石垣のところへ往つて腰を卸した。そして非常に哀怨な聲で詩を歌ふのであつた。

- 湖上園亭好 こじやう うえん ていこう 重來憶舊遊 じゆうらい いてききゆう いうをおもふ
- 徵歌調玉樹 ちかきょく じゆをしらべ 閱舞按梁州 えつぶり やうしうをあんしゆう
- 徑狹花迎暈 みちせまくしてはなれんをむかへ 池深柳拂舟 いけふかしてやなふねをほらふ
- 昔人皆已歿 せきじん みなすでにぼつ 誰與評風流 たれとともにならうをわたらん

滕生は元來好者だ。初め出て來た姿をちらと見た時から已に充分に心が動いて居る。澄める聲で歌ふ詩を聽いてはぞく／＼としてもう辛棒がならない。椽先に凭つたまゝ直ぐその吟聲に歌ひつゞけた。

湖上園亭好

相逢絶代人

嫦娥辭月殿

織女下天津

未領心中意

渾疑夢裏身

願吹鄒子律

幽谷發陽春

歌ひ濟ますと同時に駈け出して美人の側へ近づいて往つた。美人は敢て驚いたらしい様子もなく、却つて向ふから言葉を掛ける。言葉遣ひなどもなか／＼淑やかなものだ。

『あのあなたがこちらにお出ましになつたことはとうに存じて居りましたので、わざわざお訪ねいたしましたんで御座いますの』

生が『どういふ人か』と姓名を尋ねると、美人はやゝはにかんだ。

『わたし浮世の人に棄てられてから随分久しくなりますもの、申し上げてもよう御座んすけれど、あなたきつと吃驚なさると思ひますわ』

はては妙なことをいふ。生は、これは幽霊に相違ないと確かに判断はついたが、けれども別段懼ひやうな氣持にはどうしてもならぬ。是非と強いて問ふたので、美人はやうやく語り出した。

た。

『わたしは衛芳華と申すもので御座います。故の宋朝の折に理宗皇帝の宮仕に上りまして、二十三の時に死んだので御座います。此の園の隅に葬られて居りますが、今晚は一寸演福寺の方へ参り、賈貴妃(理宗の妃、奸臣賈似道の妹)をお訪ねしましたの、まあ／＼上へ上がれなど仰しやるものですから、歸りの遅くなるのも忘れて、大さう長話をしてしまいました。ほんとにあなたお待ち遠だつたで御座いますね』

そして伴れの女中の方を向ひて

『翹翹や、お前うちへ往つてお敷物だの酒や果物など持つて来て頂戴。今晚はこの美しい月に殿方もお見えになつたのに、何にも無しぢやあんまり曲がないからね、そしてゆつくりお月見をいたませう』

と言ひ付ける。翹翹は畏まつて出て行つたが、しばらくすると美しい紫の毛氈を抱え、白玉の飾りの付いた樽や碧瑠璃の盞など、すべて御殿風の高貴な酒道具を持ち込んで、立派に席の準備が整つた。盃へ注いでくれた酒は實に芳醇無比なもので、到底その邊の酒屋で賣つて居る

やうなものではなかつた。互に打ち寛ろいで愉快に語り合つたが、話の材料といひ言葉遣ひといひ何處となく清婉で如何にも上品なものである。

「翹翹や、何か一つ歌つてお酌をしてお上げな」

「ハイでは望海潮の詞を歌ひませうか」

「新人でいらつしやるお方に舊い歌をお聴かせするなんていけませんよ」

美人はその席上で『木蘭花慢』の曲を作つて、翹翹にそれを歌はせた。

木蘭花慢詞

記前朝舊事 曾此地會神仙

向月地雲階 重携翠袖來拾花鈿

繁華總隨流水 嘆一場春夢香難圓

廢港芙蓉滴露 斷隄楊柳搖烟

又

兩峯南北只依然 輦路草芊芊

悵別館離宮 烟銷鳳蓋波沒龍船

平生銀屏金屋 對漆燈無焰夜如年

落日牛羊隴上 西風燕雀林邊

翹翹が歌ひ畢り聲を引くと、美人はさめくと涙を落した。

生はいろくと慰めたり、また一寸言葉を絡らんで小當りに當つて見た。内心何といふかと危ぶんで居ると、美人は慇懃な態度で應じたのであつた。

「この世の者でなく、長らく塵土に埋もれた身ですけれども、どうかしてお側に侍づくことが出来ますならば、たとひ身は死にましても此の嬉しさに朽ち果てることはありませんまい。それに先程あなたのお歌ひになつた詩を伺ひました時から、わたしの心ではすつかり許して居るの御座います。どうぞ郷子の律(燕の郷術が律を作つて吹いたところが、五穀の生へない寒谷に忽ち温氣を生じて穀物が生へたといふ故事がある)を吹いて、一度は幽谷の春を發らき、楽しい夫婦の生活をしていたしたいと存じます」

生甚だ案外であつた。

『イヤ先程の詩はあれはほんの口から出任せでした。何う此うといふ心があつた譯ではなかつたですが、思ひ掛けすあの句が辻占になつて了ひましたな』

月見の薙もかなり長かつたので、月はもう西の垣の彼方に落ち、銀河は東嶺の上に傾いてゐた。美人は翹翹に酒宴の後を方付けさせ、生に對つて

『わたしの住居は大さうむさくろしい處で御座いますから、あなたをお伴れ申す譯に参りません。こゝが綺麗ですから此の西軒にいたしませう』

といふ。二人は互に手を把つて西軒に入り、その晩はそこに假寢の夢を結んだのであつた。

閨中の様子、すべて生きた人間と毫も變るところがない。やがて夜明けに近く、互に涙を揮つて別れたのであつた。

翌る日、生は昨晚の不思議な邂逅をした場所へ往つて見た。聚景園の内へ入つて隅の方を尋ねて見ると、果して宋の宮女衛芳華の墓といふのがあつた。その墓の左の方に小さな土饅頭がある。それは女中の翹翹を瘞めた場所であつた。生は感慨に堪えず、時過ぐるまでそこに想ひ耽つてゐた。

晩になつても何となく氣掛りになるので又西軒へ往つて見ると、美人の方が先に來て待つてゐて、いそ／＼と立ち迎へて此ういつた。

『今日晝のうちあなたがお訪ね下さつたやうな感じがしてゐましたが、でもわたし夜をこそと思つては居ましたが、晝お出とは少しも思ひ掛けなかつたものですから、遂お目に掛らずにしまいましたの、七、八日も経ちましたら、もう何時でもお目に掛れると思ひますわ』

爾來二人は毎晩のやうに此の西軒で嬉曳をした。十日ばかりも経つと、美人は日の中でも出て來るやうになり。生は自分の下宿へ連れ込んで、頗る甘い新家庭の歡樂を味ふこととなつた。そのうちに試験も過ぎたが、無論落第だ。いよ／＼郷里へ歸らうとすると、美人は是非連れて往つて貰ひたいといふ

『しかし翹翹は置いて往くのかね』

『エ、わたしがあなたのお側に侍づくことゝなりますと、今迄の住居が留守になつて了ひますから、あれは留守番に置きませんとね』

生はとう／＼美人を連れて歸郷し、親戚や友人には『杭州である良家の娘と結婚して來た』

と紹介したのであつた。村の人々も生の連れて來た嫁を見ると、縹緞は十人並優れて美人ではあり、起ち居物腰も淑やかに、言葉も美しく、伶俐でもあり優しくもあり、好い女を見付けたものだと思つて居た。家庭に於ける取り做しもまた申し分がない。舅姑を始め目上に對してもなかく能く氣を付け、決して禮儀を崩すやうなことはなく、女中下男に對しても非常に思ひ遣りが深く、近所隣や村の者にも大さう氣に入られた。そして家事上の取り廻しもなかく、几帳面で、自分の身持は飽くまでも慎ましく、屋敷の内でも中門の外へは決して輕々しく出たことがない。「滕生は好い女房を持ち當てた」と、誰れでも褒めぬものはないのであつた。

かくて夢のやうに三年の歳は過ぎて了つた。延祐四年丁巳の歳、その秋が丁度三年目の郷試（地方試験）を執行することになつたので、生はまたその試験を受けに浙江へ往くことになり、旅行準備も出來て直ぐにも出發するやうになつた。美人はそれにつけてまた俄かに我が故郷が戀しくなつた。

「あなたこれからいらつしやる臨安はわたしの故郷ですわね、あなたに連れ添つて此處へ参りましてから、もう三年になりました。如何でせう、わたしも連れてつて戴いて翹翹も一寸訪ねてやりたいと思ひますが——」

生も何等異存はない、船を庸ひ夫婦帶同で錢塘（抗州省）へ往き、一軒の家を借りて兎も角そこに落ち付いた。

その翌日が丁度七月の十五日であつた。二人の間には無量の感慨なきを得ない。

「三年前の今夜で御座いましたね、初めてあなたにお會したんですわ。此處へ來たのが丁度その時季に當つたのも何かの因縁でせうか、今晚は御一所に聚景園へ往つて、思ひ出多いあの西軒で昔のことを忍ばうや御座いませんか」

それは好からうと酒の用意などをして出掛けることにした。日は漸く暮れ、月が東垣の上に出る頃には、南浦の蓮の開く音がサラサラと聞える。露に垂るゝ柳、烟に籠めた篁、霞み渡る岸の土堤にゆらくと揺いて居るやうに見えて、宛然として過ぎし日の風景そのまゝであつた。聚景園の前まで往くと、女中の翹翹がちゃんと迎ひに出て居て、路の傍に退つて丁寧に禮をした。

「あなた様は殿方と御一所で方々と御旅行なすていらつしやいましたね。もう三年になりました。